

中京大学 現代社会学部紀要

2017 第11巻 第1号

<論文>

アジアで進行する少子化

—— 現状の理論的把握と背景要因の仮説の提案 ——

…………… 松田茂樹 (1)

シンボリック相互作用論とパーソナル・アイデンティティ論の接合

—— アンセルム・L・ストラウスのシンボリック相互作用論と死の「気づき」の理論 ——

…………… 芦川 晋 (29)

【付録】アンセルム・L・ストラウス

(Anselm Leonard Strauss)1916-1996 業績一覧

(81)

『文化・階級・卓越化』を読む

—— 社会調査の方法として蘇り、更新されるブルデュー ——

…………… 森田次朗 (103)

相澤真一

アジアで進行する少子化

——現状の理論的把握と背景要因の仮説の提案——

松 田 茂 樹

はじめに

日本をはじめとしてアジア諸国——本稿では東アジア・東南アジアの先進国・新興国諸国を指す——では、少子化が進行し、それは各国の社会経済の持続的発展に影を落としている。少子化は北西欧においてはじまったものだが、現在ではアジアが世界で最も少子化が進行する地域になった。本稿では、欧州と比較したアジアの少子化の特徴を理論的に整理して、この地域の出生力を低迷させる要因に関する仮説を提案する。本稿の構成は次のとおりである。まず、アジア諸国の少子化の進行状況を述べる。次に、アジアの少子化は第2の人口転換の一連の人口学的現象と異なる面があり、それは強い家族制度及び結婚と出産のリンクを特徴としていることを示す。アジアの家族は性別役割分業の傾向が強いことも論述する。最後にアジアの少子化の背景要因として4つの仮説を提案する。

1. 急速に進行する少子化

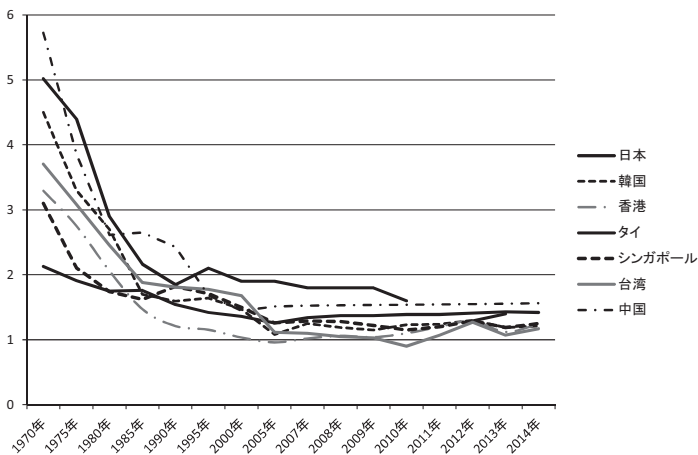
(1) アジア諸国の低出生力

少子化とは、合計特殊出生率（以下「出生率」）が、その国の人口が増加も減少もせずに均衡する出生率の値である人口置換水準——日本の場合には2.07——を長期間下回り、低迷する状態のことである。

近年アジア主要国では出生率が急速に低下して、2を大きく下回る状態

になっている（図1）。アジアの中で出生率が最も早く低下しはじめたのが、日本である。日本の出生率は、戦後すぐの1947年に4.54であったが、政府による産児制限の推進等により1960年には2まで急速に低下した。そして、70年代半ばに2を割って以降、徐々に低下して、2005年には過去最低の1.25になった。その後回復傾向にあるものの、いまだ1.44（2016年）にとどまる。韓国の出生率の低下は日本よりも短期間かつ急であり、1970年に4.5であった値が、その後15年足らずで2を割り込み、2014年に1.21と世界的にみても極めて低い水準である。シンガポールの出生率も、1970年の3.10から徐々に低下して、80年代に2を下回り、2000年代以降は1.2前後で推移している。台湾と香港の出生率も同様の傾向を辿っている。これら諸国と若干傾向が異なるのが中国とタイだが、両国の出生率も近年低迷する。このように、低出生率はアジアの先進国と新興国に共通する現象である。このうち近年出生率の明確な回復傾向がみられるのは日本のみである。

図1 アジア主要国の合計特殊出生率の推移



資料：内閣府『少子化社会対策白書』、中国は世界銀行調べ。

少子化は、先進国に広く共通してみられる現象である。北西欧諸国では1980年代に人口置換水準を下回る水準に出生率が低下した。南欧諸国や東欧諸国においても少子化が観察されている。

近年欧州諸国では、かつて出生率が低迷していた国においても、出生率が上昇傾向にある。主要国をみると、イギリスとフランスの出生率は、90年代から2000年代に一時期1.6台まで低下したが、現在では1.8を超える。北欧のスウェーデンでも、2000年代に1.5台まで低下した出生率は1.8台に回復した。最新年の出生率を比較すると、北西欧において出生率が比較的高く、南欧であるイタリアとスペインにおいて低い。出生率が約2.1未満の状態は少子化（below-replacement fertility）、約1.5未満は「低出生力（very low fertility）」（Caldwell and Schindlmayr 2003）、約1.3未満は「極低出生力（lowest-low fertility）」（Kohler et al.2002）に分類される。南欧の両国は90年代半ばから2000年代初頭にかけて超少子化状態を経験したが、その後徐々にではあるが出生率は上昇している。

アジアと欧州諸国の最近の出生率を比べると、東・東南アジアの先進国・新興国の出生率は、かつて少子化が問題視されてきた欧州諸国よりも総じて低い（表1）。韓国・香港・台湾・シンガポールは超少子化である。アジアの少子化を研究する Jones et al. (2009) は、この地域が ultra low fertility の状態にあると形容する。いま少子化はアジアにおいてこそ問題なのである。

なお、アジアの大都市の2008~2012年の平均出生率をみると、都市国家であるシンガポールは1.23であるのに対して、東京1.10、ソウル1.01、台北1.08、香港1.13、北京0.71、上海0.74であることから、シンガポールの出生率は大都市として決して低くないという見解もある（Jones & Hamid 2015）。しかしながら、同国政府は自国の出生率の水準に満足しておらず、それを引き上げようと考えている。

表 1 アジアと欧米諸国の合計特殊出生率

国名	TFR	年	国名	TFR	年
日本	1.44	2016	アメリカ	1.86	2014
韓国	1.21	2014	カナダ	1.61	2011
香港	1.24	2014	イギリス	1.81	2014
中国	1.56	2014	フランス	1.98	2014
台湾	1.17	2014	ドイツ	1.47	2014
シンガポール	1.25	2014	スイス	1.52	2013
タイ	1.40	2013	イタリア	1.37	2014
			スペイン	1.27	2013
			ベルギー	1.75	2013
			デンマーク	1.67	2013
			オランダ	1.68	2013
			ノルウェー	1.78	2013
			スウェーデン	1.88	2014

資料:『少子化社会白書』、『人口統計資料集』(2016)、中国は世界銀行調べ。

(2) 少子化の負の影響に対する懸念

世界の中でアジアは急激に経済発展している地域である。急速な少子化は、短期的には年少人口——これは高齢者人口とともに従属人口に該当する——の割合を低下させて各国の公的負担を軽減する。それは労働者1人あたりの人的資本の蓄積にもつながり、各国の経済成長に押し上げる要因になる。しかしながら、中長期的にみると、低出生力は各国の社会・経済に対して多大な負の影響をもたらすことは間違いない。少子化が国の社会経済に与える負の影響として、主に次にあげる4点が想定される(松田2013)。

第一は、経済成長への負の影響である。これには大きく分けて2つの影響がある。まず、労働力人口の減少が生産活動を停滞させる。日本では生産活動に充実することが多い15~59歳の人口が2010年に約7,100万人であったが、2040年には5千万人まで減ると予測されている(内閣府2016)。また、消費活動が活発な現役世代の人口が減ることによって、国内消費は低迷する。一般的に人間の消費支出は、結婚や子育てを機に生活費、住居費、教育費などの支出が増える。年齢別にみると、若いころから

年齢があがるほど旺盛になり、40代後半でピークを迎えて、高齢者になると消費をしなくなっていく（Dent 1993）。日本が1990年代以降長く経済が低迷してデフレに陥った背景には、人口数が多い団塊世代が中年から高齢者になり、人口構成全体が少子高齢化してきたことがあるといわれる（藻谷 2010）。

第二は、社会保障制度（年金・医療・介護）への影響である。日本は、年金、医療保険、介護保険において高齢者に支給される費用をそのときの現役世代が保険料や税金で負担する方式を採用している。この方式では高齢者人口が現役世代人口に対して増え続けると、社会保障制度の財政が悪化する。日本の年金制度における高齢者人口対現役世代人口の比率は、1980年には1対約7.5であったが、少子化と高齢化がすすんだ現在1対約2.5になり、2050年には1対約1.2になる。このような人口構成では現役世代が負担できる範囲の保険料・税金で社会保障費用をまかなうことは困難になっていく。韓国では年金制度は部分積立方式であるが、高齢者世帯の年金を将来の現役世帯が負担する構造になっている。また、アジアには社会保障制度が十分整備されていない国もあるが、それらの国において高齢者人口が増えれば、家族や親族による介護負担等が現在よりも増えていく。

第三は、社会関係資本（ソーシャル・キャピタル）の減少である。社会関係資本とは、人と人とのつながり（=社会的ネットワーク）や、そこから生み出される他者に対する信頼、規範、互酬性などのことであり、この資本が豊富な社会は地域の人々の間での助け合いがなされ、また経済活動も活発になる（Putnam 2001）。現代社会では、個人での生活・消費活動が増えて家族・友人・地域社会における人々のつながりが減少するなどして、この社会関係資本の総量が減ってきていることが懸念されている。少子化の進行により高齢化がすすみ、やがて人口が減少していけば、社会関係資本の総量は減り、それが国の社会・経済活動を停滞させる。

第四に、少子化の進行により高齢化がすすめば、政治家は投票行動において力をもつ高齢者に手厚い政策を一層採用するようになり、年金・医

療・介護等の高齢者向けの政府支出を手厚くして、子育てや教育へは十分な政府支出が行きわたらない状態になることが懸念される——これは「シルバー民主主義」と呼ばれる。このために、少子化が進行するほど、各国政府は少子化対策を拡充して出生率を回復させることが政治的に難しくなっていく。

アジア各国がこれら負の影響を軽減するには、中長期的に出生率を回復させる必要がある。そのためには、各国は少子化の背景要因を解明して、それをふまえて出生率回復に向けた少子化対策を実施することが必要とされている。

2. 強い家族制度及び結婚と出産のリンク

(1) 第2の人口転換との違い

欧州では、少子化は1960年代後半からはじまった「第2の人口転換」(van de Kaa 1987) と呼ばれる一連の人口学的変化の一部として捉えられている。多産多死から少産少死への「第1の人口転換」は出生率の低下の他に、婚姻率の上昇、初婚年齢の低下、同棲や離婚の少なさなどの特徴があるのに対して、第2の人口転換は、出生率は人口置換水準を下回る水準への低下、同棲の増加、婚外子の増加、離婚等の特徴とする。

第2の人口転換が生じた背景には、自己の欲求の高次元化、地域コミュニティなどからの個人の離脱と社会の凝集の弱まり、国家や宗教からの個人の解放、ジェンダー革命等がある(Lesthaeghe 2010)。中でも、次にあげる個人の価値観の変化がこの人口転換を促した強い要因とみられている。第1の人口転換はフィリップ・アリエスのいう〈子供〉の誕生によって子どもへの愛情と経済的投資(アリエス)によって子ども数の減少がもたらされたのに対して、第2の人口転換は成人の自己実現欲求によってもたらされている。Maslow(1954)によると人間の欲求は経済発展によって生理的欲求や安全欲求などの物質的なものからより高次の自己実現欲求へと移ってとされる。経済発展を謳歌した欧州では、若年層を中心に個人の

解放や自己実現を重視して、反体制への志向を強めるという「物質主義」から「脱物質主義」（Inglehart 1977）へというポストモダンの価値観の変化が起こり、それが第2の人口転換をすすめた。

この理論を提唱する Lesthaeghe(2010) は、アジア諸国においても第2の人口転換が広がっており、中でも日本は第2の人口転換を経験していると主張する。その根拠として、日本における若年層における同棲や婚前妊娠の増加、離婚率の上昇等をあげる。日本・韓国・シンガポールでは、女性の価値観がリベラルであることと晩産化は関係しているともいう。

しかしながら、アジアの様相は第2の人口転換とは異なる面が多い。近年アジア諸国では、第2の人口転換に含まれる諸現象のうち、出生率低下、離婚の増加による結婚の不安定化、晩婚化・未婚化は起きている。中でも出生率低下と晩婚化・未婚化は欧州よりも短期間にかつ急激に生じている。けれども、近年のアジアの人口学的変化は、北西欧の第2の人口転換と次の2点において異なる。まず、アジアでは結婚と出産をつなぐ規範は依然強く、結婚制度そのものはゆらいでおらず（落合 2013）、若い世代では同棲が増えつつあるものの（小島 2010）、欧米と比較するとその率は非常に低い。また、北西欧では脱物質主義への価値観変化が第2の人口転換のドライブになったのに対して、家族制度の強さをみても、アジアでは北西欧と同様の価値観変化が出生率低下等をもたらした要因にはなっていない。アジアにおける近年の少子化等の人口学的変化は、欧州とは異なる価値観又は価値観以外の要因によってもたらされている面が強い。

日本を含むアジア諸国は、欧州よりも短期間に経済や政治面における近代化を達成した。しかし、家族制度は強く残り、価値観もポストモダンのものと異なる。そして、欧州諸国以上に急速な少子化を経験している。こうした社会の特徴を解釈する理論枠組みに韓国を舞台にした「圧縮された近代」（Chang 2010）がある。欧州において2世紀かかった近代化を、韓国は政治、経済等の分野において半世紀で達成した。古典的な近代化論では、近代化のプロセスにおいて社会の諸制度は伝統的に家族が担ってき

た経済活動や教育等を担うようになり、家族や伝統的価値観が弱まることを想定している。しかしながら、韓国では儒教を背景にした伝統的な家族主義——それは政治、企業、社会秩序の維持の各所に広まる——が強く残り、その家族主義が短期間における急速な近代化の達成を可能にさせた。この近代化の過程において政府は経済発展を優先して、社会福祉は家族がもっぱら担ってきたために、家族の負担は非常に重い (functional overload)。このために、若い世代は家族を形成することを避けるようになり、少子化が進行しているという。

この圧縮された近代は、韓国のみならず経済発展の著しいアジア各国に共通する特徴であり、アジアの中で最も早く近代化を遂げた日本は「半圧縮近代」とされる (落合 2013)。日本においても、1970 年代には家族を福祉の主要な担い手のひとつと位置づける「日本型福祉社会」という政府構想があり、社会福祉の整備がすすんだ現在においても子育てや介護における家族の役割ははまだ大きい。この理論枠組みは、経済や政治分野に比べて、その社会の基盤をなす価値観や家族制度は維持されやすく、変化するとしても時間がかかることを示唆する。

(2) 未婚化と少子化のリンク

近年アジア諸国では、「結婚からの逃避」(Jones 2005)とも形容される、急速な未婚化が進行している。日本・韓国・シンガポールの性・年齢別にみた未婚率が図 2 である。各国とも 20 代の未婚率が非常に高い。男性では、20~24 歳は 3 カ国ともほぼ未婚者であり、25~29 歳は韓国とシンガポールにおいて 80% 以上が未婚である。女性の未婚率は、男性よりも低いものの、20~24 歳は約 90% 以上、25~29 歳は約 60% 以上である。30 代以上では、日本男女の未婚率が他 2 か国よりも高い。

過去 20 年あまりの間に、各国において年齢別の未婚率は上昇している。1980 年時点を見ると、日本男性の未婚率は 25~29 歳 55.2%、30~34 歳 21.5%、35~39 歳 8.5%、同女性は 25~29 歳 24.0%、30~34 歳 9.1%、35~39 歳

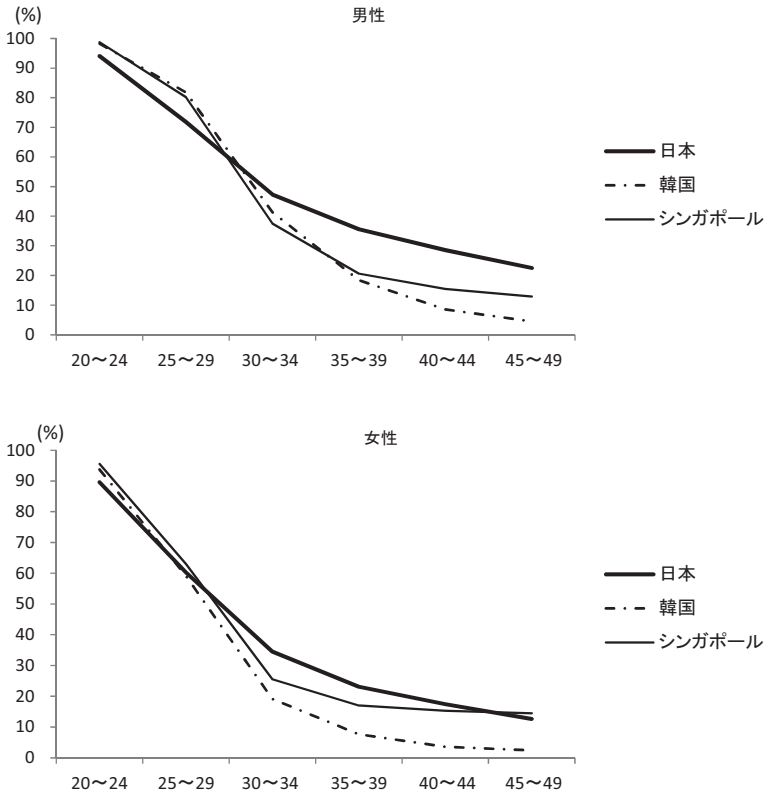
5.5%であり、これは図2よりも大幅に未婚率が低かった。同年、シンガポール男性の未婚率は25~29歳54.8%、30~34歳21.3%、35~39歳10.5%、女性は25~29歳33.6%、30~34歳16.6%、35~39歳8.5%であった。韓国も1980年時点の未婚率は、25~29歳45.2%、30~34歳7.3%、同女性は25~29歳14.1%、30~34歳2.7%であり、男女とも30代以降において極めて低かった。

同棲と婚外子が広まっていないということは、人々は結婚後に子どもをもうけることになる。このために、欧州諸国と異なり、アジア諸国では未婚率の上昇は少子化に直結する。日本についてみれば、1970年代半ば以降の出生率低下の9割は未婚率によってもたらされている（岩澤 2014）。アジア諸国の少子化の要因を解明するには、未婚化が進行する要因を解明することが不可欠である。

未婚化の進行ほど急激ではないものの、アジアでは既婚夫婦の子ども数も徐々に減少している¹。日本では、結婚持続期間15~19年を経過した夫婦の完結出生児数は、1982年および2002年に2.23人で2人を超えていたが、2015年には1.94人に減少した。韓国の既婚女性の出生児数は1991年に2.17人であったが、2015年には1.75人にまで減少した。シンガポールにおいても、夫婦の子ども数は日本以上に少なくなっている。完結出生児数に近似する40~49歳夫婦の子ども数を見ると、1980年4.42人、2000年2.21人であったが、2015年には1.85人である。これら夫婦の子ども数の減少は、結婚年齢が遅くなったことに加えて、各国において夫婦が子どもをもうけづらくなってきていることをうかがわせる。

以上から、アジアの少子化の要因を知るためには、まず欧州と異なり未婚化が進行する要因を解明することが必要になる。それに加えて、夫婦の出生数が減少する要因の解明も不可欠になる。

図 2 日本・韓国・シンガポールの性・年齢別にみた未婚率



注：日本 2010 年、韓国 2005 年、シンガポール 2015 年の値。
 資料：国立社会保障・人口問題研究所『人口統計資料集』2016、
 Department of Statistics Singapore, Population Trend 2016

3. アジアの家族—強い性別役割分業

(1) 夫婦の職業と年収

結婚後、アジアの夫婦は性別役割分業の傾向が強い。夫には稼得役割が求められ、妻には、例え就業していたとしても、責任をもって家事や子育てを行う役割が求められる。こうした傾向は、儒教文化の影響でもある (Tsuya and Bumpass 2004; Chang 2010 など)。

ここでは日本・韓国・シンガポールを取り上げて、その分業の様子を述べたい。使用した個票データは、日本と韓国が内閣府の「少子化社会に関する国際意識調査」（内閣府 2011；2016b）である。このデータのうち、日本は 2015 年調査、韓国は 2010 年調査を用いた。シンガポールは 2016 年に「アジア少子化・教育・雇用研究会」（代表：松田茂樹）が実施した「結婚、家族、仕事に関する意識調査」の個票データである。各国の調査は 20 歳から 49 歳までの男女個人を対象に面接法によって調査されたものであり、標本抽出においては各国の調査事情に応じて無作為抽出またはそれに準じる方法が用いられている。日本は層化二段無作為抽出法、韓国は割当法、シンガポールは等間隔抽出法である。サンプル数は、日本 754 人、韓国 1,005 人、シンガポール 803 人である。このうち、以下では現在配偶者のいる女性のサンプルを集計した。

夫と妻の職業の度数分布が表 2 である。3ヶ国とも夫はもっぱら自営または正規雇用であり、非正規雇用や無職は少ない。夫に比べると、妻は正規雇用である割合が低く、無職、すなわち専業主婦の割合が高い。妻の職業をみると、日本は非正規雇用者が 37% と高いのに対して、韓国では正規雇用者と非正規雇用者が少なく、自営と無職が多い。シンガポールは、正規雇用者が約 5 割と非常に高い一方、無職が 3 割と日本よりも多い——すなわち同国女性は、正規雇用者としてフルタイムで就業するか、全く就業しない専業主婦になっているかのいずれかに分かれている。

妻の職業はライフステージによって異なる（図 3）。日本女性は、子どもがいない又は末子 3 歳以下のときに無職である割合が高いが、4 歳以上になると無職の割合は低くなり、非正規雇用者が増える。末子 3 歳以下のときに正規雇用者の割合が 5 割と非常に多いが、これは近年日本がすすめた育児休業や保育所整備等の効果の可能性がある——ただし調査のサンプル数は少ないために回答割合の誤差は大きいことに留意する必要がある。韓国の女性は、子どもが産まれてから 12 歳、すなわち小学校卒業までの間、約半数が専業主婦である。そして子どもが 13 歳以上で再び就業する

傾向がみられるが、その職業はもっぱら自営業である。シンガポールの女性は、子どもが産まれる前は8割が正規雇用者であるが、出産後3割程度は離職して専業主婦になっている。同国女性の特徴は、末子が小学校にあがる頃から正規雇用者の割合が徐々に低下して、専業主婦の割合が上昇することである。3カ国の傾向を単純化すると、日本では子どもの幼少期に母親が専業主婦として子育てをする、それが韓国では子どもが小学校を卒業するまで続き、シンガポールでは逆に子どもが小学校にあがる頃から専業主婦になる傾向がある。このような各国の女性の就業パターンを生む背景には、各国の親の子育て観や子どもの進学競争の状態があることがうかがえる。韓国とシンガポールでは、進学競争の激しい教育段階において母親が専業主婦として子どもの教育をサポートする傾向がある。

夫と妻の収入の度数分布が図4である。日本の特徴は、夫の年収は500~700万円を頂点とする山型であるのに対して、妻の多くは、専業主婦と非正規雇用者が多いために、200万円未満である。韓国では、男性の年収が2,000~3,000万ウォン未満を頂点とする山型であるのに対して、女性は収入がないという割合が日本よりも高い。シンガポールの男性の年収の分布は、他2か国よりも、高いものから低い者まで広がっている——すなわち他国よりも同国男性の収入の格差が大きい。同国女性は、収入がない割合が約4割と高いが、収入のある女性は、日本のように低年収が多いということはない。3ヶ国とも、女性よりも男性の年収が高い金額で分布している。

表2 夫と妻の職業

	(単位:%)					
	日本		韓国		シンガポール	
	夫	妻	夫	妻	夫	妻
自営	19.2	7.5	41.5	35.8	15.7	7.1
正規雇用	78.6	32.9	51.7	11.9	79.8	53.0
非正規雇用	1.5	36.9	5.1	13.9	2.1	8.8
無職	0.7	22.6	1.7	38.4	2.4	31.1

図3 ライフステージ別にみた妻の職業

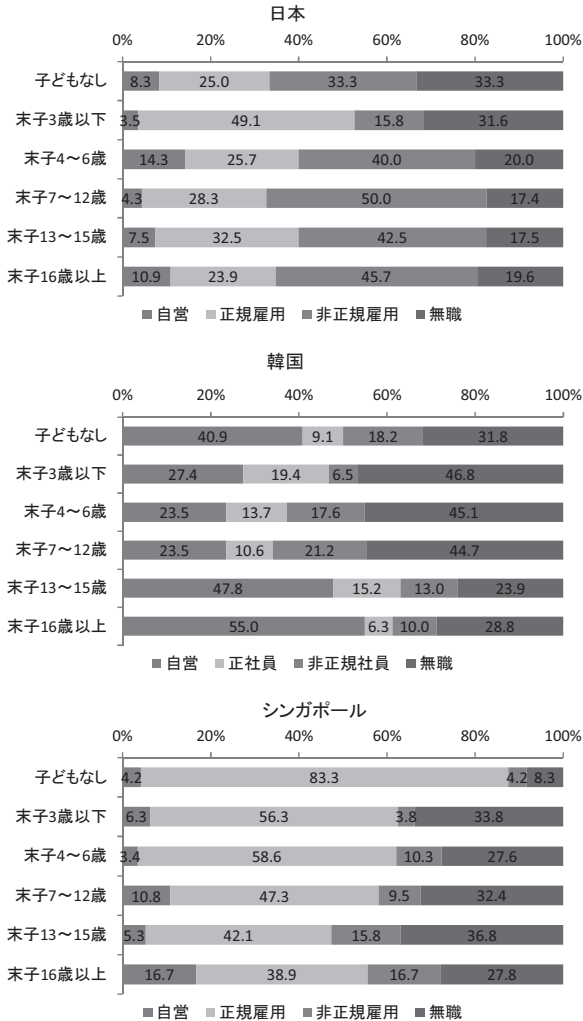
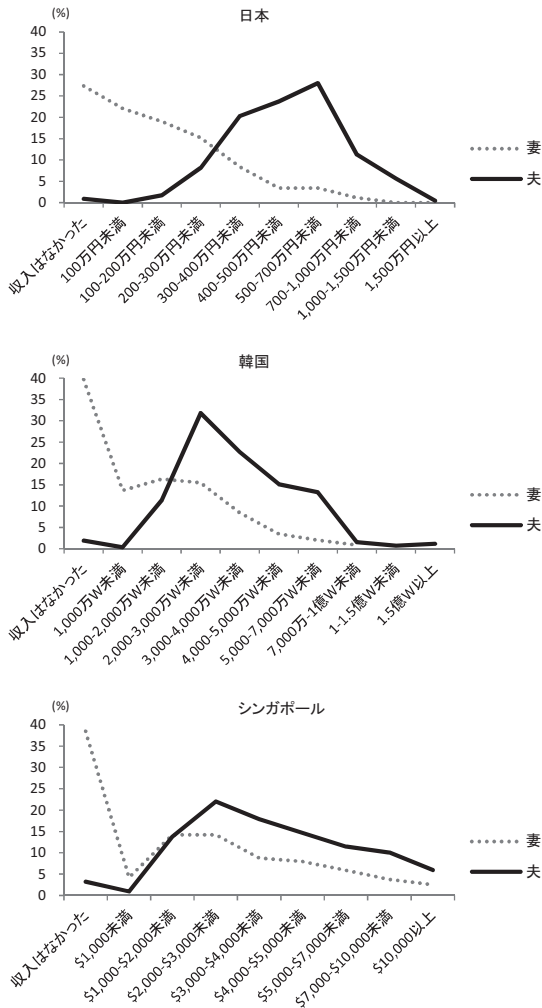


図4 夫と妻の収入の度数分布



注：日本(単位：円)と韓国(ウォン)は年収、シンガポール(シンガポールドル)は月収。

(2) 規範意識

「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」という考え方に対する賛否が図5である。賛成（「賛成」＋「どちらかといえば賛成」）の割合は、日本が6割以上で最も高く、韓国とシンガポールは賛否がおよそ半々に分かれている。この結果をみると、性別役割分業の規範が強く維持されているとはいえないだろう。

しかしながら、父親の役割として重要なことをみると、各国女性は父親に稼得役割を強く求めている（表3）。すなわち、重要なこととして最も多くあげられたものは「働いて生活費を得ること」であり、その割合をみると、日本は97%、韓国が84%、シンガポールが91%である。次に回答割合が高いものは、各国とも「家庭内での重要事項を決定すること」である。「子どもの世話をすること」は日本とシンガポールでは半数以上であるが、「家事を行うこと」は各国とも非常に少ない。

以上の分析からみえてくることは、3国では女性の就業状況に差があるものの、いずれの国においても男性には稼得役割が強く求められているということである。実際に各国とも夫の職業は自営または正規雇用者であり、非正規雇用者は少ない。そして、夫と妻の収入の分布をみると、夫の収入が妻よりも相当程度高くなっている。

図5 「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」という考え方に対する賛否

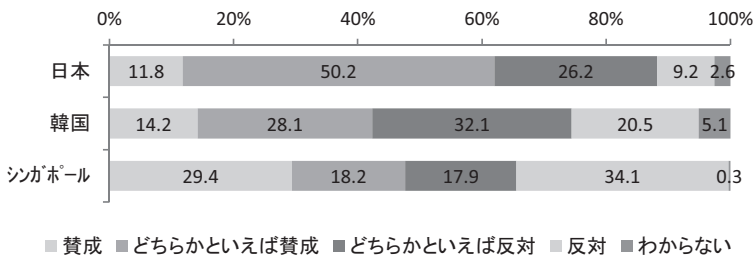


表3 父親の役割として重要なこと

	(%)		
	日本	韓国	シンガポール
働いて生活費を得ること	97.0	83.8	90.9
家庭内での重要事項を決定すること	60.1	75.6	81.8
母親の話や悩みを聞くこと	40.6	56.5	40.5
子どもの世話をすること	63.8	33.2	53.4
家事を行うこと	15.1	2.6	8.8
日曜大工や電化製品の修理などを行なうこと	7.7	13.1	7.4
町内会などで地域とのつながりをもつこと	11.1	8.8	0.7

注：韓国とシンガポールは3つまで選択。日本は1番目から3番目に選択した割合の合計。「その他」「特になし」の表示を省略。

4. アジアの少子化の要因——4つの仮説の提案

(1) 既存仮説の検討

アジア諸国の少子化の要因は数多くの既存研究で言及されてきているが、中でも以下にあげる2つが代表的な仮説である。

最もポピュラーであるものが「ジェンダー平等仮説」である。McDonald (2000, 2009) は、アジアでは家族制度がジェンダー平等的ではなく、女性が家庭的責任を負っている、そのために女性にとって仕事と家庭の両立が難しく、女性の晩婚化がすすむと論じる。この仮説を支持する経験的証拠として、先進諸国を比較すると近年女性労働力率が高い国ほど出生率が高く、GII(Gender Inequality Index)が高い国ほど出生率が低いという関係がある (Ahn and Mira 2002; Suzuki 2013)。90年代以降、女性がリプロダクティブ・ライツをもち、男女共同参画の理念が浸透し、個人主義が徹底している国ほど出生率が高い傾向があるとされる (阿藤 2000; Esping-Andersen 2009)。

こうした国別の違いが生じた背景に、文化的な要因も関係している。Suzuki(2013)は、旧ソ連・東欧も含む世界的な少子化の進行状況の差に、文化的な要因が関わっていることを指摘する。具体的な文化的境界は、Reher(1998)らをもまえた北西欧・英語圏とそれ以外を分ける「強い家

族紐帯／弱い家族紐帯」の文化的差異と、独自に提唱した韓国・台湾における「儒家家族」の規範とそれ以外の諸国における「封建家族」という文化的差異である。これらの文化的差異は各国におけるジェンダー平等度の違いを生み、その度合いが低いアジア諸国において少子化がもたらされているとされる。

これは最も広く普及している仮説であるが、次にあげる欠点を抱えている。まず、この仮説は、日本や韓国などアジア諸国において女性の就業率は高まり、仕事と子育ての両立支援は拡充されてきたにもかかわらず、出生率は依然低迷している理由を説明することができない。また、女性労働力と出生率の2変量関係の分析をみると、世界的には女性労働力率が高い国ほど出生率が高い傾向がみられるものの、分析対象をアジア諸国に限定すると、ジェンダー平等度が高いシンガポールや香港の出生率が低いなど、この仮説が想定する関係がみられない。さらに、欧州諸国についても、オランダのように男性稼ぎ手モデルで、女性は子どもが幼いうちは家にいる国が高出生率を維持してきた理由——「オランダの出生率のパラドックス」——を説明できない（Rindfuss and Choe 2015）。最後に、この仮説は日本をはじめアジア諸国において男性の未婚化が生じている——日本では男性の結婚意欲も低くなっている——理由を説明できない。

これに対して、Rindfuss and Choe(2015)が先進国を分析して提示したのが、親、特に母親にとって子育てと他の役割の両立が容易であることが高出生力をもたらすという仮説——これを本稿では「両立仮説」と呼ぶ——である。低出生力の国は、それぞれの国が有する背景によってそれら役割の両立が難しくなっている。彼らは親にとって子育てと他の役割の両立を難しくする背景として、次の点をあげる。労働市場をみると、先進国では女性が高学歴化したために多くの女性が子育て後に再就職する女性を含めてフルタイムまたはパートタイムで就労することを望んでいるのに対して、アジア諸国は雇用者の労働時間と通勤時間は長く、女性は就労しても家事と子育てに責任をもつべきであるという社会規範が強い。また、

アメリカなどに比べて、アジア諸国は労働市場の柔軟性が低く、女性が子育てを終えた後に再就職することが難しい。教育面では、柔軟に高等教育に入学・再入学やコース変更をできる教育システムを持つオランダやアメリカなどの国は、人々が子どもをもうける年齢も柔軟になるために、出生率が高い。日韓などアジア諸国は、高等教育の入学が柔軟ではない上に、学歴競争が激しいことが低出生を招いている。アジアの母親たちは子どもがその競争を勝ち抜けるように宿題の手助けをはじめさまざまな教育面のサポートをする。こうした「教育的武器競争」が出生率を低下させているという。ジェンダー平等仮説と比較すると、両立仮説は女性が両立する仕事としてフルタイムのみならずパートタイムも含めており、また女性が子育て期に専業主婦となり子育てが一段落した後に最就職するかたちでの両立も含めているところが異なる。この仮説は、女性にとって子育てと両立させる仕事役割の中身や仕事の程度は各国において異なり、母親がそれらを両立させる程度も、国によって、おそらくはその国民が許容する水準が反映して、異なるものであることを示す。

以上2つの仮説を比較すると、ジェンダー平等仮説よりも両立仮説の方が、先進国およびアジア諸国において出生率が高い国と低い国の違いを説明しうる。しかしながら、両立仮説にもアジアの未婚化・少子化を説明できない部分が多く残る。例えば、両立仮説も、ジェンダー平等仮説と同様に、アジア諸国で生じている男性の未婚化を説明できない。アジアの学歴競争に言及をしているものの、教育コストの高さには注意を払っていない。また、日本は女性の仕事と子育ての両立を容易にする環境整備がすすめられてきたが、いまだに低出生力であるということは、それ以外の強い要因も存在することが想定される。

(2) 4つの仮説

アジアの少子化は未婚化と夫婦の子ども数の減少の2つから生じており、中でも出生率下落に与えている未婚化の影響は大きい。これを念頭に

において、本稿では、アジア諸国に低出生率をもたらしているある程度共通する主要因として、次にあげる4つの仮説を提示したい。そして、それらが欧州における低出生力の要因と異なることを述べる。

<若年層における雇用の悪化と硬直的な労働市場>

第一は、若年層における雇用の悪化である。アジア諸国の中でも経済が成熟化した国では、経済発展により生活コストや子どもの教育費等が上昇した一方、若年層の雇用は悪化している。日本は1991年のバブル経済崩壊後、若年層において非正規雇用者が増え、正規雇用者も賃金が伸び悩んだことが、その後の出生率を低迷させる強い要因になった（松田 2013）。

韓国でも1990年代後半のIMF危機や2008年のグローバル金融危機によって経済成長が鈍化し、加えて高等教育進学率が急増した学歴インフレによる高学歴者の労働力供給が過剰になったことも影響して、若年の非正規雇用者や失業者が増加している（裊 2015；平田 2015）。これら非正規雇用者の増加は世界的な傾向であり、その背景には経済のグローバル化による企業の国際競争の激化と人件費削減がある。アジアの新興国が経済発展により工業社会からポスト工業社会——雇用の非正規化がすすむサービス業のウエイトが高い——に移行しつつあることも、これらの国の若年雇用を悪化させている背景にある。この仮説は、経済成長率が低下した国々において、若年男女両方、特に男性にあてはまる。アジア各国では高学歴化が進行しているが、高学歴化した若年男女は自らの学歴に見合う所得が高く、安定した職につくことができるまで、結婚を先延ばしする又は諦めることになると想定される。

<急速な高学歴化と教育費負担>

第二は、急速な高学歴化と家庭の教育費負担の重さである。少子化がすすむアジアの先進国と新興国では過去数十年間に急速な高学歴化がすすんでいる。1980年と2011年の4年制大学進学率を比較すると、日本は24

%から43%へ、韓国は7.9%から68%へ、香港は1.5%から26%へ、中国は1%から11%と急激に上昇した（UNESCO 2014）。25~34歳の大学生の割合をみると、日本（60%）・韓国（69%）は、イギリス（49%）、フランス（45%）、ドイツ（30%）を凌駕する（OECD 2016）。同じくシンガポールの値も52%にのぼる²。台湾の大学進学率は日韓を上回る。

これら急速な高学歴化はアジア躍進の原動力になる一方、次にあげる3つの経路を通じて急激な少子化をもたらすことになったとみられる。

まず、高等教育への進学率が上昇すれば、在学中に結婚・出産する者は少ないために、若者たちの結婚・出産年齢は上昇する。仮に最終的にもうける子ども数——これはコホート合計特殊出生率に相当する——が変わらなかったとしても、若年層において高学歴化がすすんでいる間、晩婚化・晩産化が進行することにより出生率（期間合計特殊出生率）は減少することになる。

また、子世代が高学歴化するために、親世代はもうける子ども数を抑制する。高等教育への公財政支出（教育機関への支出・対GDP）をみると、OECD平均が1.1%であるのに対して、日本は0.5%、韓国は0.7%と少なく、親による教育費の私費負担が高学歴化を支えてきた³。アジア主要国では高等教育に占める私立学校の割合は高く、日本が79%、韓国が81%、シンガポールが64%である。当然のことながら、私立学校の学費は公立学校よりも高い。アジアでは子どもの教育競争が激しく——それがアジアの子どもたちの学業の水準を高めているのであるが——子どもたちは小・中学生から塾に通うことも一般的であり、その経済的負担が親にかかる。内閣府（2011）の『少子化社会に関する国際意識調査』によると、希望する数まで子どもを増やせない理由として、日本人の45%、韓国人の73%が「子育てや教育にお金がかかりすぎるから」——この調査ではアメリカ、フランス、スウェーデンの人がこの理由をあげた割合は低い——をあげている。このデータを統計分析したNishimura(2012)は、5か国のうち日本と韓国において、教育費負担の重さが出生を抑制する要因になっている

ことを明らかにしている。なお、米国はアジア諸国以上に高等教育の学費が高いが、同国では学生本人が学生ローン——これは学生に負担が重いという批判がなされているが——を利用して学費を支払うために、日韓に比べて保護者が子どもの教育費負担を理由に出生数を抑制することがない。

さらに、労働市場の特徴と組み合わせ、高学歴化は次の2つのメカニズムにより少子化をすすめる。ひとつは、女性が高学歴化することにより、結婚・出産の機会費用——結婚・出産を機に一旦仕事を離職するなどした場合に逸失する利益——が高まり、そのために女性が結婚・出産を回避するようになる。この点は次にあげる両立仮説に関係する。もうひとつは、高等教育がユニバーサル化して労働市場において高学歴者の供給が必要を上回る状態になることにより、大学を卒業した若者たちの中に自分の教育程度に見合う職に就くことができない者が増えた。これは、前述した若年層における雇用の悪化につながり、若者の未婚化をすすめる要因になる。

<子育てと他の役割の両立の難しさ及びその背景にある労働市場、教育、家族の特徴>

第三は、前述した Rindfus and Choe(2016) による両立仮説である。そのポイントを再度述べれば、この仮説では親、特に母親にとって子育てと他の役割の両立が容易であることが高出生力をもたらすことを想定する。仮説の趣旨を理論的に考えれば、他の役割には、仕事役割のほかに、仕事以外における自己実現や個人や夫婦としての生活等も含まれる。ジェンダー平等仮説と異なり、この仮説では女性の仕事役割として、フルタイムの仕事のみではなく、パートタイムや一旦専業主婦になった後に最就職も含む。

この仮説をアジアに適用する場合、両立を難しくしている要因として、労働市場、教育、家族の特徴に目を向ける必要がある。労働市場をみると、日本や韓国などのアジア諸国はフルタイムの雇用者の労働時間は長く、労

働市場の柔軟性は低いために離職と転職が容易ではない。教育面では、前述のように、子どもの年齢が低い頃からの学歴競争は激しいために、母親が子どもの学校や塾等の教育面のサポートをすることが必要とされている。家族制度をみると、儒教の文化的背景をもつ国では、女性が家事や子育ての役割を担うものであるというジェンダー規範が強いために、女性にとって仕事役割と妻／母親役割を両立させる負担が重い。この両立仮説はこれ単体で存在するというよりも前述した労働市場、教育、家族の特徴と密接に関連して、それらの総体としてアジアの女性の両立が難しくなっており、そのために女性たちが結婚・出産を先延ばしすることを想定する。

この仮説はアジアにおいて女性の未婚化、晩婚化がすすむ理由を説得的に述べる。ただし、次にあげるように、この仮説ではアジアの少子化の背景を説明できないところも少なくない。まず、この仮説の視点はもっぱら女性に置かれているために、男性側から生じている未婚化・少子化を説明できない。また、日本・韓国をはじめアジア諸国には、主体的に自身の仕事よりも子育てや子どもの教育に関わることを選択する女性たちが存在する。日本では、女性の継続就業率は上昇してきているものの、結婚・出産を機に仕事を辞めて、子育てが一段落した後に復職するという家庭志向の女性も少なくない（松田 2013）——労働市場が柔軟で再就職が容易であれば、彼女らも両立が容易になるが。韓国では、主体的に子どもの教育に関与する「自己実現としての母」像が、高学歴女性の選択肢のひとつになっている（柳 2015）。シンガポールや台湾では母親が仕事を辞めて小学生の勉強や塾通いをサポートすることが多く、そのために女性の労働力率が40代以降で低くなることが指摘されている（落合他 2007）。

<第2の人口転換の想定と異なる価値観>

経済発展にともなって個人の自己実現欲求が高まり、物質主義から脱物質主義へというポストモダン的な価値観の変化が起こったことが、第2の人口転換を促した強い要因とされる。アジア諸国においても個人の欲求は

高次の自己実現欲求に移行してきているとみられるものの、価値観変化の理論がその背景として想定する経済発展の状況は欧州とアジアでは大きく異なる。欧州では社会が経済的に豊かになったことによって、人々価値観は物質主義的なものから脱物質的なものへと変化した。これに対してアジアの近代化の速度は速いために、価値観変化の背景とされる物質的豊かさを、アジアの人々は少なくとも欧州の人々よりも十分享受していない。その証拠に、高い経済成長が続くアジア諸国では個人消費——まさに物質主値である——は活発で、それがまた各国の経済成長をもたらしている。1970年代以降の日本人の価値意識の変容の分析によると、「総じてポストモダニズム系の議論には否定的で近代の深化・徹底を主張する議論には比較的肯定的な結果」（太郎丸 2016:211）が得られている。アジアは圧縮された近代を経験したがゆえに、人々の間で欧州のように物質主義から脱物質主義への価値観変化がまだ生じていない。アジアにおいて生じている個人の価値観はく物質主義的で、自己実現を求めるもの>である——具体的には、仕事において高い収入を得て物質的に豊かに暮らすことや、制約の多い結婚生活を避けて独身生活を謳歌することなどにつながる。こうした個人の価値観が、急速な未婚化、少子化を引き起こしている背景にあるとみられる。

おわりに

本稿では、欧州と比較した東アジア・東南アジアの少子化の特徴を理論的に把握した上で、低出生力の背景要因の仮説を提案した。得られた主な知見は次のとおりである。まず、アジアでは欧州よりも短期間にかつ急激に出生率が低下しており、その主要国には極低出生力と呼ばれるほど低い出生率である国が少なくない。また、既存研究では先進国における少子化現象は第2の人口転換における人口学的変化の一部として捉えられてきたが、その理論と異なりアジアでは家族制度が強く、同棲や婚外子が少ない。加えて、アジアでは北西欧のように脱物質主義への価値観変化が低出生率

をもたらす背景になってはいない。最後に、本稿ではアジアの少子化の要因に関する4つの仮説——①若年層における雇用の悪化と硬直的な労働市場、②急速な高学歴化と教育費負担、③子育てと他の役割の両立の難しさ及びその背景にある労働市場、教育、家族の特徴、④第2の人口転換の想定と異なる価値観——を提案した。これらの仮説は、今後の研究において実証的に検証されるものである。

謝辞

本研究はJSPS 科研費 26285122(「日本とアジア新興国における少子化・教育・雇用の関連に関する国際比較研究」研究代表者・松田茂樹)の助成を受けて行った研究の成果である。本文中で使用した内閣府の調査データは、内閣府子ども・子育て本部から使用許可を受けている。

注

- 1 子ども数の数値は、日本は「出生動向基本調査」、韓国は韓国保健社会研究院「出生力調査」、シンガポールは「Population Trend」より。
- 2 シム・チュン・キャットが韓国青少年研究所の公開セミナー「Relation between Youth Employment and Marriage Experience」において報告した「More Marriages and Babies Wanted— The Impact of Population and Education Policies on Fertility in Singapore」(2016年8月25日)。
- 3 教育再生実行会議の第三次提言(2013)の参考資料である「これからの大学教育等の在り方について」より。

文献

Ahn, Namkee and Pedro Mira, 2002, “A note on the changing relationship between fertility and female employment rates in developed countries,” *Journal of Population Economics*, Volume 15, Issue 4: 667–682.

阿藤誠, 2000, 『現代人口学—少子高齢社会の基礎知識』日本評論社。

- 裴智恵, 2015, 「韓国の若者政策：現状と課題」岩上真珠編『国際比較若者のキャリアー—日本・韓国・イタリア・カナダの雇用・ジェンダー・政策』新曜社, 111-129.
- Caldwell, John C. and Thomas Schindlmayr, 2003, "Explanation Of The fertility crisis In Modern Societies : A search for commonalities," *Population Studies*, Vol.57 No.3, pp.241-263.
- Chang Kyung-Sup, 2010, *South Korea under Compressed Modernity : Familial political economy in transition*, Routledge.
- Dent, Harry S., 1993, *Great Boom Ahead*, Hyperion. (=1993, 竹内宏監修・八木甫訳『経済の法則—3つの波が予測する「グレート・ブーム」の時代』イースト・プレス)
- Esping-Andersen, Gosta, 2009, *Incomplete Revolution : Adapting Welfare States to Women's New Roles*, Polity.
- 平田周一, 2015, 「日韓の若者にみる非正規雇用とジェンダー」岩上真珠編『国際比較若者のキャリアー—日本・韓国・イタリア・カナダの雇用・ジェンダー・政策』新曜社, 130-146.
- Inglehart, Ronald, 1977, *The Silent Revolution : Changing Values and Political Styles Among Western Publics*, Princeton University Press. (=1978, 三宅一郎他訳, 『静かなる革命—政治意識と行動様式の変化』東洋経済新報社)
- 岩澤美帆, 2014, 「結婚と出生—出産離れがもたらす未婚化」日本人口学会企画セッション「少子化論のパラダイム転換—出生数増加の決め手は何か」報告資料.
- Jones, Gavin W., 2005, *The Flight from Marriage in South-East and East Asia*, *Journal of Comparative Family Studies*, Vol. 36, No. 1, WINTER 2005: 93-119.
- Jones, Gavin W., Paulin Straughan, Angelique Chan, 2009, *Ultra-Low Fertility in Pacific Asia : Trends, causes and policy issues*, Routledge.
- Jones, Gavin W. and Wajihah Hamid, 2015, *Singapore's Pro-natalist Policies : To What Extent Have They Worked?*, Ronald R. Rindfuss and Minja

- Kim Choe (eds), *Low and Lower Fertility: Variations across Development Countries*, Springer, 33–51.
- Kohler, Hans–Peter, Francesco C. Billari, and José Antonio Ortega.,2002, The Emergence of Lowest–Low Fertility in Europe during the 1990 s, *Population and Development Review*, Vol. 28 (4) : 641–680.
- 小島宏, 2010, 「東アジアにおける同棲とその関連要因—学歴との関連を中心に」『人口問題研究』 66–1,17–48.
- Lesthaeghe, Ron, 2010, “The Unfolding Story of the Second Demographic Transition,” *Population and Development Review*, Vol.36 (2), 211–251.
- Maslow, Abraham H., 1954, *Motivation and Personality*, Harper and Row. (= 小口忠彦訳, 1987, 『人間性の心理学—モチベーションとパーソナリティ 改訂新版』産業能率大学出版部)
- McDonald, Peter, 2000, “Gender Equity in Theories of Fertility Transition,” *Population and Development Review*, Vol. 26 (3) : 427–439.
- McDonald, Peter, 2009, “Explanations of low fertility in East Asia,” in Gavin Jones et al. eds., *Ultra–Low Fertility in Pacific Asia: Trends, causes and policy issues*, Routledge, 23–39.
- 松田茂樹, 2013, 『少子化論—なぜまだ結婚・出産しやすい国にならないのか』勁草書房.
- 内閣府, 2011, 『平成 22 年度少子化社会に関する国際意識調査』.
- 内閣府, 2016, 『平成 28 年版高齢社会白書』.
- 内閣府, 2016b, 『平成 27 年度少子化社会に関する国際意識調査』.
- 文部科学省, 2017, 『諸外国の教育統計平成 27 年版』.
- 藻谷浩介, 2010, 『デフレの正体—経済は「人口の波」で動く』角川書店.
- Nishimura, Tomo, 2012, “What are the factors of the gap between desired and actual fertility? – A comparative study of four developed countries,” Discussion Paper Series from School of Economics, Kwansei Gakuin University, No 81.

- 落合恵美子, 2013, 「近代世界の転換と家族変動の論理：アジアとヨーロッパ」『社会学評論』64（4）：533-551.
- 落合恵美子・山根真理・宮坂靖子, 2007, 『アジアの家族とジェンダー』勁草書房.
- OECD, 2016, *Education at a Glance*.
- Putnam, Robert D., 2001, *Bowling Alone: The Collapse and Revival of American Community*, Simon&Schuster. (柴内康文訳, 2006, 『孤独なボウリングー米国コミュニティの崩壊と再生』柏書房).
- Reher, David Sven, 1998, “Family Ties in Western Europe: Persistent Contrast,” *Population and Development Review*, 24（2）：203-234.
- Rindfuss, Ronald R. and Minja Kim Choe, 2015, *Low and Lower Fertility: Variations across Development Countries*, Springer.
- 太郎丸博, 2016, 『後期近代と価値意識の変容—日本人の意識 1973-2008』東京大学出版会.
- Tsuya, Noriko O. and Larry L. Bumpass, 2004, *Marriage, Work, and Family Life in Comparative Perspective: Japan, South Korea, and the United States*, University of Hawaii Press.
- 柳采延, 2015, 「自己実現としての教育する母—韓国の高学歴専業主婦における子どもの教育」『家族社会学研究』, 27（1）：7-19.
- Suzuki, Toru, 2013, *Low Fertility and Population Aging in Japan and Eastern Asia*, Springer.
- UNESCO, 2014, *Higher Education in Asia: Expanding Out, Expanding Up*.
- van de Kaa, Dirk J., 1987, “Europe’s Second Demographic Transition,” *Population Bulletin*, vol.42（1）：3-55.

シンボリック相互作用論とパーソナル・アイデンティティ論の接合

— アンセルム・L・ストラウスのシンボリック相互作用論と死の「気づき」の理論

芦 川 晋

0. はじめに

本稿の目的は、「グラウンデッド・セオリー」の生みの親としても知られるアンセルム・L・ストラウスが提示するシンボリック相互作用論の展開を吟味した上で、その実践編ともいえるはずのグラウンデッド・セオリーとストラウスのシンボリック相互作用論がどのような関係に立つのかを考察する前半部分に相当する。前半部分であるというのは、まず、紙幅の関係上、ここで主としてつきあわせの対象にする文献を、理論的主著と目される『仮面と鏡』(Strauss [1959])とグラウンデッド・セオリー最初のフィールドワークである『死ぬことに気づく(『死のアウエアネス理論』)](Glaser & Strauss [1965])に限定せざるをえないからである⁽¹⁾。

実際、ストラウス&グレイザーは、その最初の方法論的著作である『グラウンデッド・セオリー』(Glaser & Strauss [1967])において、『死ぬことに気づく』(1965)を本理論の適用例としてあげているが、『死ぬことに気づく』は上記方法論的著作に先駆けて刊行された書物であり、『死のアウエアネス理論』と邦題にもあるように、最終章でもそのフィールドワークの成果を「気づき」の理論とまとめた上で、「具象理論」と「一般理論」を区別し、本書を前者に位置づけたところで終わる。言ってみれば、本書はグラウンデッド・セオリーのとば口に立ったところで話が終わっているわけで、これを十分な適用例にあたるものとしてよいのかよく分からない

ところがある。

むしろ本書を初めとするいくつかの先行するフィールドワークの成果が方法論的著作である『グラウンデッド・セオリー』の形成に寄与しているとみた方が、内容的にも時系列的にもしっくりくる。そして、本稿で検討したいのはこの『グラウンデッド・セオリー』に至るまでに、ストラウスが展開していたシンボリック相互作用理論が実際のフィールドワークの成果とどのように結びついているかについてなのである。

ストラウスは『仮面と鏡』で、シンボリック相互作用論にアイデンティティ論を導入し、もっぱら「多元的に構造化した相互作用論」と呼ばれる理論を展開したと評価されている。こうした理論はその後のフィールドワークにどれほど効いているのだろうか。少なくとも、『死ぬことに気づく』は患者自身がもうじき死ぬことに「気づいている」かどうかをメルクマールとし、それと医療スタッフの「気づき」との間で考えられる組み合わせとそれぞれで展開されうる相互行為戦略の類型が取り出されている。この「気づき」をめぐる議論は『仮面と鏡』では「多元的に構造化した相互作用論」の一部に相当すると考えられる。

というわけで、この二つの議論はどこまで連続して、どこから断絶しているのだろうか？本論文では、必ずしも明瞭になっているとはいえないそれぞれの書物の意義を明らかにしたうえで、二つの連関について考察してみたい⁽²⁾。なお、前述したように、このとき考察の中心に位置するのはパーソナル・アイデンティティにかかわる問題である。

また、本稿はもともと「ハーバート・ブルーマーにおける相互作用の「内在性」について」(2017a)の姉妹編として構想されたものであり、本論文単体での知見のみならず、姉妹編とつきあわせることでストラウスがハーバート・ブルーマーの議論をどのように継承したのか、あるいはしなかったのかを明らかにすることも狙っている。シンボリック相互作用論は個々の論者についての研究論文は多くても、座標軸としてジョージ・ハーバート・ミードが使われることをのぞけば、各論者間の理論の比較研究が

行われることはまれである。しかし、シンボリック相互作用論の理論的、ないしは学説的な展開をたどろうとすれば、個々の論者が取り出した問題設定がどのようなものであり、それがどのように深化していったか(あるいは深化していかなかったか)をつきあわせてみる作業は欠かせない。

というわけで、その後の理論的展開や調査方法論まで含めた、いわばストラウスの理論の全体像にかかわる議論は続編に委ねるとして、シンボリック相互作用論のミード／ブルーマーからの展開について簡単に言葉を継いでおくと、興味深いのは、ストラウスの理論的な名著と言ってよい『鏡と仮面』(1955)は主題として「パーソナル・アイデンティティ」を扱っていることである。ちなみに、G・H・ミードもハーバート・ブルーマーももっぱら「他者の役割取得」に焦点を充ており、アイデンティティという概念を採用していないし、またそれに対応する概念も見いだせない。

しかし、ストラウスが相互作用という問題圏にパーソナル・アイデンティティの問題を導入することで、ミードやブルーマーが描いた他者の役割取得を介して引き継がれていく相互作用過程には回収しきれない相互作用やその参与者のあり様に焦点をあてることができる。そして、これがもっぱら「多元的に構造化した相互作用論」と呼ばれている。ここから引き出された知見は、ミード、ブルーマーに連なるシンボリック相互作用論の系譜のなかで、ストラウスの最大の貢献にあたるように思われるのだが、管見のおよぶかぎり、少なくとも国内では「多元的に構造化された相互作用論」という整理ばかりが先行し、そのこと自体は誤りではないにしても、それがパーソナル・アイデンティティを中心に展開した議論であり、ミード、ブルーマーからの新しい議論の展開であるという視点は弱い。まあ、ストラウス自身も本書でアイデンティティを主題にすることの意義を取り立てて言挙げするでもなく、淡々と議論をすすめているということもあるかもしれないが。

しかし、ストラウスの議論のなかでもパーソナル・アイデンティティの問題系を中心に据えることで、ブルーマーの議論では me-I 話以上にはどう交

差するのかよくわからない、アーヴィング・ゴッフマンの議論とシンボリック相互作用論とのつながりや、ゴッフマンを参照することで新たに開かれる議論の展望を示すこともできるだろう⁽³⁾。読み合わせてみるかぎり、理論形成にあたってゴッフマンの影響はかなり大きいように思われる。ここにシンボリック相互作用論の新しい展開を見いだすのは極めて容易なことだと思う。また『死ぬことに気づく』の分析手法、類型論の展開の仕方でもゴッフマンの影響はかなり大きいものがあるといつてよい。

本稿では前半で、もっぱら『鏡と仮面』を俎上に載せてストラウスがシンボリック相互作用論のなかで「パーソナル・アイデンティティ」をめぐる問題をどう取り上げたかとその意義を明らかにしていく。そのうえで、それがどのようにグラウンデッド・セオリーにつながっていくのかを見ていくことにしよう。

1. パーソナル・アイデンティティがもたらす相互作用の応接の多様性

ストラウスはミードやブルーマーと違って対象への意味付与・同定 (identification) の問題を「名付け」(naming) という言語の問題に置き換え、分類 (classification) と評価 (evaluation) の関係として事象を論じ直す。すなわち、人物であれ他の対象であれ、「名付け」は基本的に対象に対する評価を含んでいる。たとえば、「出世魚」と呼ばれる魚がある。かつてなら人間も成長にあわせて名前を変えて行く習慣があった。さらに、しばしば人には「あだ名」が付けられるが、名は体を表すというようにあだ名の多くは、その人物の何らかの特徴や逸話を誇張して同定するものであり、当の人物に対する評価を含んでいる (cf. 与太郎)。

事物についても同様であり、対象にたいしてどのように名付けられるかに応じて対象の位置づけが変わり、対象に向ける個人の評価や行動も変容する (cf. 転失気)。単純な話、オスプレイが「着水した」と表現するか、「墜落した」と表現するかで、われわれはこの事態に対してまったく違った評価を与える。そして、ときとして名付けをめぐる争いが生じる。

というわけで言語による分類はわれわれに行為の方向付けを左右する価値をそなえている。とはいえ、それは常に一定した価値をそなえているというわけではなく、時間的経過のなかで評価が変わり (cf. 内部告発)、行動が再組織されることもある (ちなみに、オスプレイの事故は本国の米軍では「墜落」の扱いを受けている)

このように名付けをめぐる議論は、語法こそ違え、ミードないしはブルーマーのいう「他者の役割取得」、「物的態度の取得」におおよそ対応する議論であり、問題状況では新しい(連携)行為の様式が出現してくることに変わりはない。しかし、ストラウスは、価値は対象それ自体のうちにあるのではなく、評価を伴うものであるから、評価を下すためには自らが「経験」してみなければならないとして、自己の「経験」にも注意を向けようとする。

行為は一定の時間的な過程のなかで行われ、必要に応じて過去の自己を対象 (*me*) として「主体」(*I*) が評価する。この評価が意外なものであれば、未来はそれだけ不確定となり行為は再評価を受け、自己評価も変わる(語彙の拡張の可能性)。自己評価に変容をもたらす何よりも大きな機会は他者の反応であり、他者から期待外れの反応が来れば、自己評価をやり直す必要にせまられることになる。再評価が必要になるのは、他者と互いに共通の用語の下で行いを組織していかなければならないからである。

こんな問題状況だらけの世界であるから、世界は発見的であるのみならず危険も含んでいる。実際、自分の経験した事柄 (*me* の集積) が世界のなかにうまく位置づけられなくなるような経験をすることがある(親しい人間にずっと嘘をつき続けられていたことが分かる)。このとき、自己はその「経験」ゆえに孤立し「世界を喪失」する(「誰も自分のことを分かってくれない」)。この精神的な世界剥奪は、個人だけとはかぎらないが(cf. 第一次世界大戦、ホロコースト)、いずれにせよ、失われてしまった自分が歩む道を取り戻し、世界喪失状態から回復するためには代替的な説明が必要になる。ストラウスは物語についてさして論じてはいないが、ここ

で求められているのは自分が経験してきたことと世界を整合させる新しい「自己物語」である⁽⁴⁾。

こうした「世界喪失」体験は、その裏返しとして個人の努力や献身といった「コミットメント」の強さを炙り出す。こうしたコミットメントが徒勞に終わるとき、個人はしばしば自己自身に疑念を向ける。何らかの営みに自らを投入することは、何かをするだけのことでなく、自己評価や自己の「存在の仕方」にも結びついているのだ。

現に、本来の目的よりもそれをどう実現したいかの方が重要になってくることがある（「数学の証明は美しくなければならない」）。そうすると集合的な目標のなかに個人的な目標が紛れ込み、それがメンバーシップよりも自分のアイデンティティに結びついてくることがある。相互作用を介して得られる「経験」の方に目が向き、自己の存在の仕方により重きをおくようになることがあるのだ。ゴッフマンならこれを「支配的関与」と「主要的関与」の逆転として説明するであろう。一定の状況下にあって定められた役割（「支配的関与」）からズレたところにあるパーソナルなアイデンティフィケーション（「主要的関与」）がより重要になってくるのである（Goffman [1963a]）。

もともと対面的状況では互いが何者であるかを特定できればよいのだが、個人にこうしたこだわりが生まれたら、例えば、ただ野球をすればよいというものではなく、相手の動機付けを定め、互いがどうしたいのかをはっきりさせなければならなくなる。気晴らしに野球をしたいだけなのか真剣勝負で野球をしたいのかをはっきりさせる必要があるときもあるのだ。この点をはっきりさせてはじめて（「動機の言明」）、引き続く相互行為を組織できる。つまり、感受したい経験と自分の有り様、パーソナル・アイデンティティとが結びつくように相互作用を組織化する必要が生じることがあり、ここでは「動機の言明」がものをいう。ここまでくると、スト劳斯がミードやブルーマーが検討していないパーソナル・アイデンティティあるいは経験の領域に足を踏み入れる意義がわかるはずだ。

こうなると対面的相互行為はより複雑になる。人物やそのパフォーマンスのどの部分に注意を向ければよいかを考慮する必要が出てくるからである。たとえば、ストラウスがあげているのは、医局に「女医」がやってくるケースである。あるいは、第三者が居合わせているような場合、われわれは第三者の存在にも配慮しながらふるまうことがある（家族の前での看護婦の医療行為）。ゴッフマンがよく持ち出すのは言ったこととその言い方の違いである。たとえ、同じ内容を伝えたとしても、口のきき方次第で互いの関係が変わりかねない。また、相手次第で自分や他人が口にしたことや身振りに対する自覚の度合いも異なる（見知らぬ人の相手をする場合）。

ストラウスは「意識している」かどうかでタイプの組み合わせを作る。① AがBの意識的な振るまいに意識的に反応する、② AがBの無意識の振るまいに意識的に反応する、③ AがBの意識的なふるまいに無意識に反応する、④ AがBの無意識の振るまいに無意識に反応する。さらには、その時点では気づかなくても相手の振るまいをあとから意識するようになることもある。そして、AとBを入れ替えれば2倍の組み合わせが生まれる。このような分類が『死ぬことに気づく』の類型構成の中心に位置する「気づき」の文脈に関わってくることは見やすい。ここでは互いのふるまいがどの程度意識的か、気づいたうえでなされているかが問題にされている。

このように、自分のやってしまったこと（me）に後から反応したり、逆に突発的に無意識な反応してしまうこと（I）もある。これは相手の反応についても同様であり、われわれは自他の反応に対して意識的であることもあれば意識的でないこともある、のみならず、後から意識されてくることもある。ここから多様な組み合わせが考えられるが、そのすべてに注意を払うことは難しく、少なからずは見過ごされる一方、それだけ互いに誤った判断を下す余地も大きい。

どこで誤ったかを特定できるようにするためにも反応はあらかじめ分類

しておく必要があり、それは大きく①一定の状況下での相手の一般的な意思、②相手が自分自身に向ける反応、③相手が（受け手ないしは観察者である）自分に向けてくる反応、といった具合に分けられる。「他者の役割取得」にはこうした多様な局面やプロセスが含まれるし、同じことは自分自身が他者にうまく反応できたか解釈を加える必要が出てきたときにもあてはまり、同じような三分類を用いることができる。ストラウスはこれを「自己自身の役割取得」と呼ぶ。

相互作用の多様な側面はたいがい慣例化して自明視されており、どこに焦点を据えるかは当の参与者に依存する。参与者が行為のどの局面に反応するかは状況によって変化し、ときにはそれが累積して、あるいは、ときには突発的に（実際、しばしば話はそれる）、注意の焦点が定まり、互いのあいだ一体性が感じられるように「関与」（involvement）を生み出していく。

もっとも、ひとは相互行為のさなかで時として空想あるいは考え事にふけて、それが相互行為に影響することもある。精神療法や宗教のように複数の関係者が空想にふけったり、それに解釈をつけるようなこともあるだろう。こうしたストラウスの議論は、ブルーマーとはちがって、シンボリックな相互作用と非シンボリックな相互作用をはっきりと連続的なものとして扱っているだけでなく、相互作用の多元的な局面のどの部分に互いが反応するか、互いがどこまで意識的にまで目配りしている。

相互行為の分析は精神医学ないし社会学が行う。精神医学が相互行為に重ねられる（参与者が代行する）パーソナルなイメージに注目するのにたいして、社会学はこうして相互行為に「構造」を見いだす。相互行為に参与する個人はなんらかの社会集団や社会組織の成員であり、何らかの役割を担っている。一方、個人は複数の社会集団や社会組織の構成員であり、相互行為のなかで複数の役割の担い手として現れてくることもあり、それによって相互行為の局面が変化する。「一元的に構造化された相互行為」もあれば、「多元的に構造化された相互行為」もあり、相互行為には「多元

的に構造化されたプロセス」(Structured Interactional Process) が伴うわけである。また、ついでにはこのときゴッフマンから「関与」(管理) という概念を引き継いでいることにも注意を促しておきたい。

なお、こうして地位から地位へ移動するような多元的に構造化された事態は、自由で、非儀礼的な相互行為ほど起こりやすい (cf. 役割距離)。しかも、状況次第では相手から一定の地位を剥奪したり、一定の地位を強要することもできる。典型的には「上下」関係や「内部者／部外者」といった「地位強要」(Status-Forcing) がそれにあたる (ゴッフマンの議論なら『アサイラム』、ストラウスの『死ぬことに気づく』からなら、死をまえにした患者に対して看護婦が採る戦略を参照)。これが一般に「構造的相互作用プロセス」と呼ばれる理論の概要であり、パーソナル・アイデンティティの多元的な「転移」がその基底にあることが分かる。

さて、対面的相互作用がこのような事態を伴うとなれば、個人はときとして想定外の役割を引き受けなければならないことになる。ストラウスがこれを「パーソナル・アイデンティティ」への「地位強要」と呼ぶように、「地位強要」は役割にではなく「人物」(人格 *person*) に関わる。というのも、一定の地位に就くことを強要するという事は、本人がそのような地位、扱いに相当する人物であるという評価に結びついているはずだからである。もちろん、それが現実の評価を反映しているとはかぎらない。だから、上位者は褒めることでかえって貶めることができるし (「褒め殺し」)、そうでなくても過剰な世辞はときとして相手に小バカにされているように感じられるものである (ここでゴッフマンとガーフィンケルの議論が紹介されている)。

それどころか、明らかに不相応と思える地位に就いているケースもあり、これは周囲に迷惑を与えるばかりか、それを逆手にとって無理筋の要求を持ち出すこともできる。たとえば、トランプ米国大統領の「大統領らしからぬ」態度は、出迎える相手国の首脳らに困惑を与えがちである (もともと、こびまくる首相もいたけれど)。そして、それはトランプという大

統領の人物上の評価（嘘つき等）に結びついてくる一方で、これを外交的な策略として利用することもできる。

こうした「地位強要」がやりやすい人物や組織というものが考えられるが（裁判官、親、司祭、暴徒）、すべての人にそのような機会を手にする可能性がある。例えば、医者へ行くのを奨める、あるいは自殺を止める。また、こうした地位強要は個人にだけではなく集団にも当てはまるのであり、ストラウスは第二次世界大戦時の日系人の強制収容を例にあげている。あるいは、米国の参戦、さらにはビートルズのようにいきなり伝説的なヒーローに祭り上げられて困惑するといったこともありえよう。

このように、地位強要は大きな力を持ち複雑であるが、その位置づけが、一次的なものか、永遠に続くのか、不確定なままなのか、撤回可能なのか、自動的に移行するののかも異なる展開を見せる。また、地位強要はすべての人に可能であるだけでなく、故意にそうしたマネをする必要もない。ゴッフマンが「体面」の維持について述べているように、相互行為はその本質において地位強要を含んでいるので、地位を回復する策略や地位強要をかわす策略も習慣化している。ただ、常に思い通りになるとはかぎらない。

トランプの例からもうかがわれるように、話の通じない人というのはいるものだし（「女は口を出すな」）、また、しばしば話はそれる。一方で、相互行為をコントロールする技法というのもあり、機転を利かせて冗談扱いしてその場をしのいだり、相手を罠にはめたりできる一方で、相互行為のコントロールに喪失してしまうこともある。比較的構造化された相互行為においては、それにのっとって互いに適切な行いを期待することができるが、より不安定な場合には、「異議」(claim)と「対抗的異議」を通して互いに「地位強要」を申し立てることになるが、それも受容されたり拒否されたりといったサイクルがある（「キミは自分一人で大人になったと思っているのか」。「いずれにせよ、あなたにそんなことを言われる覚えはない」）。

こうしてみれば互いが自らを何者として引き受けているか、つまりパーソナル・アイデンティフィケーションを視野に入れることで、従来のシンボリック相互作用論では扱いきれなかった相互作用のより立ち入った局面を見ることができるとわかる。のみならず、次節でみていくが、これは相互作用だけにかぎった話ではない。

2. 「自己物語論」のための補論

本論文の本来の目的、ストラウスのシンボリック相互作用論とそのフィールドワーク研究の関係を吟味するには、『鏡と仮面』第3章までとそれに関連する諸論文を検討すれば十分とも言えるのだが、ここまででも多少言及はしているし、本論文執筆の行きがかり上、ストラウスがパーソナル・アイデンティティをシンボリック相互作用論の問題設定に組み込むことが「自己物語論」とどう切り結ぶのかも簡単に明らかにしておきたい(同書第4章以降)。

本論文執筆の背景には、シカゴ学派に端を発する「自己論」の系譜をたどるなかで、近年注目されている構築主義の「物語論的な自己論」を吟味することを課題とした論文「「自己」の「社会的構築」～昔から社会学者は「自己の構成」について語り続けているが一体どこが変わったのか？」(2017b)がある。

この論文では紙幅の関係で、ゴッフマンに先行する「自己論」としてミード／ブルーマーによるシンボリック相互作用論の展開部分を大幅に割愛せざるをえず、この端折らざるをえなかった部分を独立、加筆修正して「ハーバート・ブルーマーにおける相互作用の「内在性」について」(2017a)でブルーマーを中心に検討を加え直した。このときストラウスの議論を読み返す機会を得た。そうすると、ストラウスの議論は、かなりゴッフマンの影響を受けており、アルフレート・シュッツの議論との親和性もうかがわれる。ストラウスの議論には独自の世代論がある等、ここにもう一つのパーソナル・アイデンティティと結びついた物語論があることに遅まきながら

気づくことになった。

しかし、前述の論文では、ストラウスの「パーソナル・アイデンティティ論」、「自己物語論」に言及する余裕がなく、構築主義の「自己物語論」と批判的な突き合わせを行うために取り上げたのはアーヴィング・ゴッフマンの議論とそれに後継する議論を展開している EM 系の「自己物語論」である（とりわけ Goodwin [1990] を参照）。そこで、いささか変則的な構成にはなるが、「ハーバート・ブルーマーにおける相互作用の「内在性」について」（2017a）の続編という意味で「自己物語論」をも含めたストラウスの議論を補論として紹介し、そのうえで『死ぬことに気づく』の議論がストラウスの理論とどう連続するかを吟味する作業に向かうことにしたい。

ただし、誰かの語りを聞くことからフィールドワークの成果をまとめていくのは、当然ありうることであるから、語りの問題はグラウンデッド・セオリーのなかでも必要とされ、検討の素材となることは十分あり得ることである。だから、一見するといびつなこの構成もストラウスの理論に基づいたフィールドワークの展開の可能性を考えるとうえでは、表面上は『死ぬことに気づく』にはさして関わってこないが背景にあっておかしくない方法論の基礎を明らかにする一助ともなりうるであろう。本節でも最終的にこのことを確認することになる。いささか前置きが長くなったが、以下第2節をそうした位置づけのもとにパーソナル・アイデンティと「自己物語」論との関係を考察するための補論にあてる。

2-1、発達・成長とアイデンティティ認識の変化をめぐって～世代間の再生産様式

G・H・ミードは他者の役割取得が可能になる過程、ならびに相互作用の様式の拡張を「音声身振り」というプロセスと、発達上の「プレイ」から「ゲーム」（「一般化された他者」）への段階的移行として説明した。ミードに拠れば、ここで起こっているのは行動様式のヴォキャブラリーが変化

していく動的な過程であるが、メカニズムそのものが固定している以上、この過程そのものは必ずしも動的というわけではない。別にこれはモードにかぎった話ではなく、ジグムント・フロイトやハリー・スタック・サリヴァンなど精神医学の議論でもパーソナリティの核は人生の初期に定められ、その後の変容はそのヴァリエーションと見られている。

ストラウスも「発達」自体は漸進的な変容として考えているが、それに伴った概念の変容は人を過去とは異なる存在にするという。つまり、概念の変容はパーソナル・アイデンティティの変容に結びついてくるのである。子どもの発達に当たっては、素朴な分類からより複雑な概念の体系化への置き換えがすすみ、行動と分類の素朴なつながりは切り離される一方で、概念体系の変容・複雑化は知覚、想起、価値評価における変容をも意味する。もっとも、これはおおよそ水路づけられた変容であり、それとは別に「今日の私はもはや昨日の私ではない」と言いたくなるような経験の方向転換が生じることがある。ストラウスが注目したいのはこちらである。

これはまさにパーソナル・アイデンティティの問題なのだが、アイデンティティは知覚の変容レベルとは異なる深さがあって、なんらかの「転換点」に直面することがある。他者との関係が劇的に変化する儀礼のような出来事があるのだ。たとえば、「転向」がそれであり、転向には挑戦や誘惑といった自己試練、場合によっては悟りが伴う。あるいは、同一化したあこがれの人物に裏切られたり、知らずに育ってきた自分の氏素性を知ってしまうといったことがある(cf.「在日」「部落民」であったということ)。さらには、人を見捨てる、それも子どもや身内を見捨てる(『ソフィーの選択』『檀山節考』)、殺す、失う。いずれにもその人物をなんらかの岐路に立たせる経験となりやすい。

他方で、永続的な集団や社会構造のメンバーシップはたいてい制度化された地位の移行を含んでいる。簡単な話、進級・進学し出世する。制度的に定められた連鎖をたどるとき、地位に応じた動機付けが充当される(「勉

強」「ごますり」「付度)」。もっとも経歴の道筋が調整され、安定していたとしても、タイミングの問題(昇進の時期等)は生じる。タイミングが自他の観念と必ずしも調和するとは限らないので、どうしても移行過程が必要になるし、緊張を和らげるために、補助的な手段(浪人、昇給や新しいポストの創設など)が用いられることもある⁶⁾。これは地位移行が制度化されていないほど起こりやすい。いずれにせよ、こうして「地位移行」(Status-Passage)はパーソナル・アイデンティティの変化と発展の条件を設定する。

一定の地位移行を経た者はときとして後継者を導く指導的立場に着くことがある(教育係)。個人的な指導関係にある者は初心者への反応を解釈する用意ができており、ときには誘導、誘惑、裏切りなどを仕掛ける。指導のタイミングを重視して指導関係を制度化することもある。たとえば、指導マニュアル、スケジュール、挑戦、試験、非難(しごき)などが活用される。一方で、指導には互いの人物(アイデンティティ)が関係してくる以上、指導関係に入っても直ちに深い関与に踏み込むとはかぎらないし、指導関係にはリスクや危険、信頼や信用、同一化が関わってくる。とはいえ、師の目的は弟子を完全に制御できるようになることではない。自分を超えて次のステップへ進むことがどこかで期待されている。

しかし、あえて先の道へすすませず忠誠心を要求して踏み絵をふませることもある(cf. 第二次世界大戦初期の日系人の扱い)。共産主義社会下での「洗脳」やカルトによる「集団的転向」はその極端な例であり、様々なステップが転向の軌道に沿って配置される。異なるものの見方を教えられ、討論グループのもとで繰り返し自己批判を迫られる。通常の相互行為におけるアイデンティティの承認の基盤は打ち砕かれ、そのうえで信仰告白や自己犠牲、自分自身や近親者を裏切ることを求められる。しかも、それも一つの試練、誘惑として利用されることだろう。ここまで来てしまえば簡単にはもとのアイデンティティに戻れなくなる。

もっと一時的な場合もある。社会は時間をなんらかの単位で分割するこ

とを慣習化しており、それは相互行為の成り行きにも影響する(たとえば、服喪)。該当する人物はその期間のあり方に応じた有り様を示すように決められている(「時間的に制約されたアイデンティティ」)。そして、この期間のなかにも複雑な移行過程がある。これらには、新婚旅行、断食日、祝祭日、祝賀、休暇、裁判、執行猶予といった社会に広範に流布したものから、もっと個人的な事柄までが含まれ(病気、受験勉強)、特別なことがないかぎり、これらの移行的な局面に入るにあたっては当事者にそうする優先性が認められている。ただ、非制度化されたものほど問題視される可能性も大きい。エリク・エリクソンが問題にした青年期から成人期への移行のような、アイデンティティの決定的な変化にかかわる局面ほどことは重大であり、関わる人物にもそれに応じた配慮が求められるし、局面の理解に当たってはそれまでの経歴やライフサイクルが参照される。

ストラウスによれば、こうしたアイデンティティの転換をめぐる理論を提示するにあたって、ひとつには現行のパーソナリティの発達理論への批判があったという。一見すると分かりにくいのが、サリヴァンの著作を見れば分かるように、パーソナリティの発達理論とは異なる世代間の関係に関わる理論である。つまり、発達の過程でもっとも重要な関係をもつ人々や世代が地位移行につれて移りかわってゆく。しかし、しばしば成人期までの発達ばかりが注目され、この世代間の関係については忘れられがちである。

そして、この点に目を背けると発達過程は非歴史的で静態的なライフサイクルが移転していくような印象を与える。しかし、実際には、世代ごとあるいは世代間のライフサイクルが、互いの移動関係に影響を与えあいながら、差異化・個人化してゆく。もちろん、ここには年齢をはじめ、人種、国籍、社会階級、社会的地位、性差等多くの変数も影響してくる。パーソナリティの発達理論はあまりに単純すぎるのである。

たしかに、アイデンティティはかなりの時間的幅にわたって比較的变化しないものである。これは生物学的な「パーソナリティの安定性」や「社

会的環境の安定」といった観点から説明される。ただし、環境といっても同時代的な客観的世界ばかりではなく、そこには自分が主観的に経験してきた世界も含まれることに注意する必要がある（いわば A・シュツの「共時的世界」）。たとえば、急速に変化する都市生活が期待通りのものならば、そこでの生活は変化に比して安定したものとなろう（「高度経済成長期」）。こうなると「経験された世界」とは経歴や生活誌にほぼ等しくなる。

とはいえ、強制収容所、戦争・災害、大不況などで、ふつうの生活が長期的に分断されれば、不測の事態や挫折の可能性が大きくなる。この30年がそうした時期に相当することはわかりやすい。逆に、個人の「関心」の変化もそれまでの個人の経験や習慣の延長上にあれば、より自然なものに感じられてくる。

具体的な能力を示したり、学歴、資格等で一定の能力の保証することができれば、それに見合った地位に登用されやすくするが、逆に、こうした評価は他方で限界ともなるし、失敗によって傷つくこともある。そうはいつでも、自分に与えられる地位は、社会構造的にはどちらかといえば個人を保護するように組織されているのが普通だろう。個人の失敗は組織の失敗につながりかねないので、組織の運営がうまくなされるように適した人員の配置がなされるのが大概だからである。もちろん、組織に頼らず自力でといったこともできないわけではないが、社会の変動が早ければ早いほど個人は組織の成員であることに頼りがちになる（たとえば、不景気の公務員志向）。

こうしてみれば、アイデンティティの首尾一貫性とはイメージされがちなそれとはかなり違っている。まず、アイデンティティの変化を最小にする条件は変化の認識を最小にすることであり、あらかじめ示されたライフサイクルのなかで変化を説明できるようになっていれば、パーソナル・アイデンティティ上の変化の認識を鈍化させる（地元に残って「マイルド・ヤンキー」として生きる）。回顧的な人生の物語は経験した出来事の秩序化であり、人生がそれなりに満ち足りたものであるならば、トータルな人

生に持続的な意味が与えられ、逸脱的な出来事も「若気の至り」といった具合に、過小評価を受けることになるかもしれない。アイデンティティの一貫性は自分が経験してきた出来事その他を解釈し、秩序化することに依存しているのである。

2-2、パーソナル・アイデンティティを構成する集団形成の「歴史」的視座

以上で、ストラウスがアイデンティティという概念を相互作用の媒介項とすることで、大きく言って二つの視点がシンボリック相互作用論に持ち込まれてくると確認してきたことになる。一つは、アイデンティティは相互作用の応接形式の多様性を説明するということ、もう一つは個人の成長過程で相互作用する人物・世代や環境等は変化していき、それがお互いのアイデンティティ認識の変化に影響するということであった。

このように集団生活は相互作用、コミュニケーションをめぐって組織化されている。それはすでに確認したように単に思考を伝達・共有するというのではなく、それがコミュニティの行為から生じ、コミュニティの行為を可能にするということである。有意味なシンボルを共有していれば、たとえ二人でも集団が成立する。集団とはそもそもシンボリックなものである。この集団のメンバーシップの有無を説明するために、「メンバーシップ集団」と「準拠集団」を区別することがあるが、そもそもメンバーシップは多元的であり、これはあまりに単純すぎる見方である。

むしろ注目すべきは、共同的な活動に参加するとき、われわれは特定の用語法(イデオム)を習得し発展させるということである。これらの用語法は必ずしも首尾一貫したものとはかぎらないが、それでも、その都度、異なる基準を適用し、きちんとその都度の「役割要求」(role demands)を「分離」して対応することができる。もちろん、話が通じなかったり、合意をみななかったりすることもある。

そもそも共同的な活動に参加するまでに、個人は他のメンバーシップに

由来する用語法も引き継いでいるから、特定の集団の構成員の間でも概念の多様性がある。だから、しばしば下位集団が形成されることもある。それだけメンバーシップやアイデンティティが複雑になるわけである。とりわけ、障害者や子どものように概念化能力に限界があると、さまざまな集団活動に加わることが難しくなるし、ミドルクラスと下層階級でもコミュニケーション様式が異なってくる。もっとも、集団活動に関わる概念化に相違があったからといって必ずしも協力できないわけではない。いずれにせよ、こうしてみれば、集団形成はコミュニケーションの境界にそってなされることがわかる。

こうした集団はより抽象的で見えにくいものとなるが、その集団形成を考えるに当たっては「集合行動」から考えるのが有益である。たとえば、旅行者は緊密なやりとりをする集団とは言えないが、旅行のなかでの会話、訪問地をめぐるやりとりや代理店とのやりとりなどをおしてできた匿名な個人の集まりからなる「大衆」行動（ブルーマー）のようなものとして見ることができる（あるいは、サルトルの「集列性」）。

さらに、舞台や芸術、ファッション、犯罪、ラジオ、同性愛や野球、医学のように、参加者のネットワークがコミュニケーションの経路に依存しているような、さらに抽象的な集団を考えることができる。ストラウスはそれをタモツ・シブタニにならって「世界」(world)と呼んでいる。社会には多様な社会的世界があり、その中には成員の資格が明瞭なものから曖昧なものまでであるが、一定の経歴を伴うのがふつうである。なかにはメンバーシップの配分の条件が、その社会的な世界と結びついた固有な機関や組織へのコミットメントを伴う場合がある（たとえば、クラブや会員制の組織・学会）。シブタニは「世界」とは共有された視座 (perspectives) であるという。個人はそれぞれのコミュニケーションの経路を通じて共通の視座を獲得し、他人の行動を予期できるようになる。社会には多様な世界があり、コミュニケーションを重ねるごとにそのアイデンティティはどんどんと複雑化する (cf. 外科医、内科医、臨床医、研究医、研修医 etc)。

それは、宗教や人種に似ている。

とはいえ、当面のかかわりのある集団の抽象度にたとえ違いがあっても、そこでのパーソナル・アイデンティティが先行する過去の集団のメンバーシップにかかわっているかぎり、親族の歴史や帰属階級は、個人の記憶に残っていてもいなくとも、メンバーシップの源泉（配分の条件）として個人のアイデンティティの事実と感覚に関わり、自他の評価にもかかわってくる（移民2世）。しかし、パーソナル・アイデンティティにもっとも大きな影響力を与えるのは歴史的な過去が書き換えられることである（ナショナリズム）。のみならず、急激な変化を被らない集団や組織であってもそれぞれの世代は過去を書き換えていくのであり、自己はこの集団的視座に大きく影響される。もちろん、個人は超個人的歴史的な過去にそれぞれのスタンスをとり、たとえばそこから既得権を主張する。個人はこうして程度の差こそあれ集団的アイデンティティをおりまぜてパーソナル・アイデンティティを構成するのである。

というわけで、個人のアイデンティティ形成をめぐる問題は、ゆるく「歴史的な世界」と接合している⁽⁶⁾。もっとも、この「歴史的な過去」とは個人が自らのアイデンティティを構成するにあたって参照する集団的視座にすぎずそれを超えて実在するものとは限らない。ただ、いずれにせよ個人がパーソナル・アイデンティティを構成する用語法は「歴史性」を帯びており、個人はそれを考慮に入れてしまっているし、考慮にいれることができるのである。

こうして、相互作用の軸とアイデンティティ変容の軸、さらには、それぞれにイディオムを与える「集団の歴史」（集合行動）の軸を加えることでストラウスのパーソナル・アイデンティティの理論ができあがっているわけである。「アイデンティティは、パーソナルな歴史のみではなく社会的な歴史を内に含んでいる」（Strauss [1959] 203=166 頁 [1997]）。個人のパーソナル・アイデンティティを研究対象にしようとするれば、個々の人物が「歴史的な過去」に対して採る態度はやはりインタビューで重要なポ

イントとなる。そして、この点についてさらに説明を求めていくなれば、それは一種の物語（ライフ・ヒストリー）の聞き取りのようなものになっていくであろう。パーソナル・アイデンティティを主題的にとりあげようとすれば、それは一種の「自己物語論」にたどり着くわけである。

3. 死ぬことに「気づく」

『死ぬことに気づく』（1967）の序によると「本書の分析は私たちが「気づきの文脈」（awareness context）と呼ぶ概念に基づいている。ここではこの概念が、死んでいく状況にある患者の「死の蓋然性」について誰が何を知っているかという意味で使われていることを指摘するだけでよい」（Glaser & Strauss [1965] xi=ix 頁 [1988]）と述べ、ストラウスは、この「気づきの文脈」をめぐる図式がものごとを極めて有効に機能させることを強調している。

改めて指摘しておけば、この「気づきの文脈」の問題はストラウスがシンボリック相互作用論で展開した「多元的に構造化されたプロセス」に結びついてくる。『鏡と仮面』では、互いが人物やパフォーマンスのどの部分に反応するかと関連して、互いが互いの反応をどこまで意識し、意識されたものとして受け取っているか、それともいないかが関わってくることを指摘したうえで、ストラウスは4×2の類型を作っていたが、「気づき」の文脈の問題はこのどこまで意識しているかに関わってくる議論になる。

このそれぞれの「気づき」の局面に応じて関係者は異なる態度や行動をとるのだが、関係者の行為は、本論からもうかがわれるように、もっと細やかな条件にも依存しているし、その都度の行いは一度きりのものである。それをかなり大ざっぱに「文脈」という言葉で一括りにしてしまうのだから、かなり乱暴なやり方ではある⁷⁾。こうしてストラウスは「文脈」にその都度類型的な定義を与え、各人がそれぞれの「文脈」でどのように感じどのように振る舞うかを論じるのだが、当然、一定の局面での感じ方、振る舞い方はおおよそ一定であり、それぞれの局面で期待されるふるまい

もおおよそ構造化されている(「多元的に構造化されたプロセス」)。「文脈」の問題はその都度の標準的な行為類型と結びついているわけである。

このように、ストラウスが「文脈」と呼んでいる事態は類型的なものであり、類型的な行為からなる。こうなると、ストラウスが「文脈」として考えようとしたことは、ゴッフマンが「場面」(occasion)と呼んだ事態とかなり重なってくるのではないかと考えてみたくなる。患者の「気づき」の状態の変化とは、見方を変えれば、患者に適用される立場(カテゴリー)の変化とみることもできる。そして、ゴッフマンは一定の「場面」で一定の役割を担う人物に期待される行動が規範的に構造化されていると考える。つまり、ストラウスが「文脈」という概念から意識に準拠して事態を説明しようとするのに対して、ゴッフマンは「場面」や「役割」(立場)といった概念から規範に依拠して事態を説明しようとしている。

しかも、看護婦や医療スタッフの「文脈」と結びついた意識は、患者の「気づき」を中心に構造化され、患者が一定の「気づき」の状態にあるときにどうすべきかという「気づき」や振る舞いとして主題化される以上、実質的には、規範に依拠して「場面」や「役割」で考える場合と大きな違いがでてくるとは考えにくい。いずれにせよ、病棟で一貫して問題になるのは基本的に患者の「気づき」であり、周囲の人々は患者の「気づき」の状態に応じて自らの振る舞いを調整しなければならない。つまり、「文脈」であれ「場面」であれ、「患者の気づき」を中心にして医療関係者に求められる規範的要請が決まってくるのである。実際、本書の記述もそのように進められている。だとすれば、「患者の気づき」の文脈を「場面」に置き換えてもかなり同様のことが言えそうである。

もっともシンボリック相互作用論者は、ゴッフマンの影響をストラウスの議論に認めること自体はやぶさかではなからうが、「意識」と「規範」に準拠することの違いを過小に扱うことは断固として拒否するであろう。たとえば、ストラウスが問題にするのは、ゴッフマンとは違って、どこまでも「関与」(involvement)であって「関与表現」ではない。しかし、現

実は「関与」は表に現れてくるし、必要とあれば隠されなければならない。ストラウスにも「社交シールド」といった表現が見られる。ストラウスにとって、個人とは関与も含めて規則に拘束されない自由な存在であることが出発点になるが、ゴッフマンの場合、関与をどう表現するかも含めて、個人は規範に依拠して行動する存在として見られている。それどころか、一昔前なら、ゴッフマンの議論を同調過剰として批判する議論はそれほど珍しいものではなかった。

しかし、ゴッフマンにあっては、そもそも相互行為から離れた個人が「自由」であるとは考えられていない。選択し、それを示すということが、一義的には、人間同士の相互行為でしか意味をもたないからである。言い換えれば、相互行為のなかではじめて互いに選択の余地が生じ、選択能力をそなえた人格として互いを扱うことができるようになるし、そこで個人は初めて自由になる⁽⁸⁾。現に互いの処遇を決める規範を初めとして、一定の場面で何事かを達成するために個人に選択肢を提供する規範がある。

ところで、『死ぬことに気づく』（『死のアウェアネス理論』）では、その都度の文脈でも医療スタッフ、あるいは患者や家族がどうふるまうべきか規範的判断に迫られる。しかも、その構造が類型論的として取り出されており、各人には規範的判断に関する選択の局面がある。どう考えても、ここにあるのは一定の社会構造化に基づく選択の自由であって、無制約の自由ではない。また、規範から逸脱する自由は、「役割距離」のように、一定の規範を想定して初めて対応可能になる。そもそも、ストラウスのシンボリック相互作用論の特徴の一つは相互作用が構造化されているということにある。

このように考えるとき、参照する規範を考慮することなく個人の意識に準拠するだけで物事が説明できるとは私にはとうてい思えない。と、述べても、シンボリック相互作用論者は納得しないかもしれないが、私は以上のような観点から二つの分析手法にかなりの等価性を見ている。そこで、ここではゴッフマンの概念との互換性がどの程度のものかをも意識しなが

ら本書の紹介を試みてみよう。

3-1、「気づき (awareness)」の理論

「死の告知」の問題や「ターミナル・ケア」といったことがこの国でも盛んに言われるようになって随分と立つが、それでも「死の告知」以前にまず「ガン告知」が問題になりかねないようにやはり告知の問題は大きい。変わりつつあるとはいえ、そもそも終末期患者をケアする医者や看護婦らにとって問題なのはまず患者の身体であり、それに対処する機械なり技術はいろいろと整備されている。が、精神的状態（あるいは患者の人格）についてはもともと専門外であり、実態は、医者や看護師らに個人任せ、ないしは病院の方針任せという部分も大きい。

あるいは、決められたマニュアルのようなものがあるとすれば、それは死期の近い患者とは極力接触をさけるというようなものになりやすい。しかし、死期が近いと思われる患者ほど自分の死の問題に向き合えないことにストレスを感じやすいし、その相手をしなければならぬ医療スタッフにしても死の問題をめぐるケアができないストレスを抱え込みやすくなるのも似たようなものである。ここに一つのディレンマが生じる。

実際、終末への「気づき」は、患者、医療スタッフの互いのあいだで起こることに影響を与える。医療スタッフは、受け持ちの患者の先がそう長くはないと「気づく」とき、患者の方もそれに気づいたり、疑ったりするものだと思っているのがふつうであり（「パースペクティヴの互換性」）、医師が間接的に「気づく」ように仕向けることもある。そして、自らの終わりに気づいたり疑いを抱くようになった患者は、気づかない患者とは態度や行為がまったく異なってくる。

そして、患者のこうした「気づき」は患者のパーソナル・アイデンティティに影響を与えるといつてよい。自分の終末に気づいてしまった患者は、退院して再び自分が職場へ戻ることなどかなわないと悟り、人生の別の期間に突入せざるをえない。そして、この「気づき」の問題が患者と医

療スタッフの相互作用に大きな影響を与えることになる。しかも、家から離れて慢性疾患で死を迎える患者が増えれば増えるほどこの問題は常態化する。「気づき」は強力な説明変数なのである」(Glaser & Strauss [1965] 8=8頁 [1988])。

さて、そこで「気づき」についてまず問題になるのは、相互作用に関与する 個々人が患者の医学的に規定された地位について実際に何を知っているのか、また、周囲にどこまで知っていると思われるのかである。これが「気づき」の文脈(場面)と呼ばれる。なお、ここでは各人の知識状態を実際につきあわせるわけではないから「相互知識問題」のようなものは発生しない。

こうなれば医療スタッフには患者との相互作用で「気づき」の有無や範囲をどのように利用できるかという戦略的な問題が生じる。たとえば、スタッフだけが「気づき」を共有して患者を無知の状態におくのであれば「気づき」の文脈(場面)は「閉じた」(封じ込められた)ものになる(「閉じた気づき」closed awareness)。そういうスタッフに疑念を抱きはじめれば「閉じた気づき」に疑問符がつくことになり「死を疑う」(suspected awareness) 文脈に移行するが、それでも互いに目を向けまいとするのであれば「互いに気づいていないフリ」(mutual pretence)をする文脈(場面)に移行する。そして、「気づき」が関係者に知られていることを認め合ってしまうえば「気づき」は「開かれた」ものになる(「開かれた気づき」open awareness)。こうして気づきの状態に応じて採用できる戦略が想定できるようになり、こうした類型をベースに「気づき(アウェアネス)の理論」と呼ばれるフィールドワークの成果が提示される。

患者はまず診断を受けることになるが、ここで終末期患者であると見立てられるにあたって、「死の蓋然性」(高い/低い)ならびに「死の時期」(いつ死ぬか)という二つの変数の組み合わせで「死の予期」が形成される。この予期を確定する権限を持っているのは医者であるが、経験豊かな看護婦は医者よりも正確に予期することができることがある。というのも、看

看護婦は医者、患者それぞれよりも、医者、患者双方と接する時間が長く、引き継ぎ等スタッフ同士のコミュニケーションも密だからである。他方、患者は医療スタッフから自分の身体を手掛かりに情報を得ようとする。

看護婦の患者に抱く予期や行動は、患者の病状地位 (illness status) の定義に由来する。もっとも、このとき医師の判断と看護婦の判断は必ずしも一致しないかもしれない。また、医者や看護婦が患者への予期を変えて行くにつれて、患者の「地位移行 (status passage)」が生じる。死に至るパターンも「予期された時期に死亡する患者」から「一進一退型」、「長引く患者」といった具合にいろいろ考えられるが、病状の急変は看護婦にストレスを与える。家族に連絡を入れる必要が出てくるからである。

こうして、死にゆくプロセスでは医者、看護婦、患者、家族らがそれぞれ異なる情報源から異なる予期を抱いており、それが「気づきの文脈」の内訳に幅を与えている。そして、話の中身も「気づき」のステップにあわせて進んで行くことは予想がつくであろう。

最後に、ここであらかじめ注意を促しておきたいのは、「気づきの文脈」の移行に当たって、医者をはじめとする医療スタッフは広い意味での患者の「人格評価 (パーソナル・アイデンティフィケーション)」に基づいた類型化に依拠しているということである。そもそも個別の人物の病状等々を診なければ、患者としてどこかに位置づけることはできない。だから、医者や医療スタッフは素朴に患者を診ているわけではなく、実際には患者扱いされている「人物」を見ているのである。

3-2, 患者が踏んでいく「気づき」のステップ

まず、多くの場合、医療スタッフが患者の状態について承知していたとしても主治医がそれを伏せておくように指示すれば患者に知られることはない。いわばスタッフの「気づき」が患者に対して「閉じて」いるのである（「閉じた気づき」の文脈）。

当然、「閉じた気づき」が成立しやすい条件というものが考えられる。

①切迫した死の徴候が見られない、②医者が不治であることを患者に明確に宣告しない、③家族も秘密を守ろうとする、④病院組織とその内部で働く職員の職務意識、⑤患者がスタッフから情報を得るための味方がいない(共謀関係の欠如)。

というわけで、ここでなされているのは、医師による患者の診断①とそこから可能になる各関係者の行動様式の幅②～⑤という素朴な類型論である。実際の相互作用では注意を向けられるべき事柄がこのなかですべて収まりきれぬのは疑問もあるが、ひとまずこの点はおくとして、最初に医者のくださった診断は院内での患者の位置づけを規定し、「閉じた気づき」を構成するように関係者を動機づけるのであり、これが相互作用の幅を左右することになる。だから、このアイデンティフィケーションが変化すれば、当然「気づきの文脈」も変化することになる。この点を押さえれば、本書の内容の展開は極めて見通しのよいものになる。

さて、こうした条件下で、入院した患者は当然自分の病についての見通しを知りたいが、医療スタッフはこれを知らせるわけにはいかない。患者に終末を知られまいとすれば「フィクション」としての見通しを作り上げなければならない(「パッシング」)。そのためにスタッフは「チーム」を組む。とはいえ、時間がたてば患者にも疑念が湧いてくる。スタッフはしばしば先回りして、余計な疑念(不安)を与えないよう、これから起こることを説明しておく。あるいは、状況はすべて正常に進行しており、楽観的であるかのような見通しを与えるように語る(「社交シールド」*sociability shield*)。患者の多くは協力的である。また、院内は患者の立ち入ることのできる場所と立ち入ることのできない場所を区別しておくのがふつうである(「表局域／裏局域」)。

ただ、基本的に「閉じた気づき」の文脈は不安定である。うっかり話してしまうようなことも起こりうるし、病状の変化や新しい治療法を始めることは患者に不安を与える。これを放置すれば看護の原則を逸脱してしまうことにもなりかねない。これはスタッフにとっても重荷になる。家族も

患者が終末を知らない方が接しやすいが、それも長期化すればかえって苦行になる。そして、患者がスタッフの行動の意味にどのように気づくかによって他の文脈（場面）への移行にも影響する。

いずれにせよ、患者の疑念が強くなり、スタッフと相互作用しながら「根比べ」(contest)をはじめると「死の疑いに気づく」文脈（場面）に移行する^⑨。もっとも、すでに見てきた「閉じた気づき」の文脈（場面）は「死の疑いに気づく」文脈（場面）であった可能性もあるし、患者が疑念を抱いていることに医療スタッフがちっとも気づいていないという極端なケース（「閉じた疑い」）も考えられる。だが、ここで問題にするのは患者が疑念を抱いていることに医療スタッフが気づいている「死を疑う」文脈（場面）である。

自分が終末期にあるのではないかと疑い始めた患者はたいていそれを確かめようとする。とはいえ、患者を手引きしてくれるような人物がいるわけではない。だから、患者は医療スタッフらと「根比べ」をしなければならない。直接、問いかけてもまず否定的な答えが返ってくるので、かまをかけたり、カルテをのぞく・スタッフの話の盗み聞きするなどを試みるが、むしろたまたま耳する話などの手掛かりの方が役に立つ。病院の環境は潜在的な手掛かりを絶えず作り出しており、一度疑念を抱けばそれは増幅する方向に働きやすい。ただし、患者の限界はこの手掛かりを解釈しなければならないということである。この点で、医療スタッフはより多くの資源を持ち合わせている。

とはいえ、患者が疑っているらしいとなれば医療スタッフの対応はよりデリケートになり、チームワークが重要になってくる。そのなかで主治医を引き合いにしたり、雑用や患者のケアに専念する。つまり、医療スタッフはそれだけ自分の仕事に専念するようになり、患者は患者としてスタッフの作業を尊重することを強られるようになる。こうして医療スタッフはスタッフ—患者という権利—義務関係を患者が承認するように相互行為をコントロールする。この「根比べ」でスタッフは患者に専門的地位の受

け入れを求める（クレーム）ため、患者の求め（クレーム）を拒否する。患者はスタッフの求め（クレーム）を受け入れるか拒否するしかない⁽¹⁰⁾。新人のナースや学生ならこれはちょっとした試練（testing）になるだろう。

ストラウスも確認しているように「死を疑う」文脈（場面）の相互作用で問われているのはパーソナル・アイデンティティであり、医療スタッフが職業上のアイデンティティを貫き通せるかは、その人の人物にかかわっている。だからこそ、かなりのストレスを伴うものになる。「このゲームで賭けられているのは病院という舞台での情報や地位ではなく、パーソナル・アイデンティティであり、専門職としてのアイデンティティである」(Glaser & Strauss [1965] 59=60 頁 [1988])。

しかし、患者はそうした医療スタッフの態度そのものをもさらなる疑念の種にできる。といった具合にこの文脈（場面）は不安定であり、現状維持がせいぜいといったところである。そして、患者の疑念がある敷居を超えてしまえば、「気づき」の場面（文脈）は容易に変化していく。あるいは、医療スタッフによる間接的な告知がしばしば見られることにもなる。実際にも、患者には、遺書を書いたり、生前に会っておきたい人物がいる等、死期を知ろうとする十分な動機付けがあることが多い。疑念の状態に留めておけばそれだけ困惑する場面に直面しないですむが、それだけ最後の対応は難しくなる。

さて、患者が、疑念を強め自らの死が避けられないと確信する一方で、相変わらず疑念を否定してかかる医療スタッフをそのままにして扱うとき「互いに気づいていないフリ」をする文脈（場面）が成立することになる。あるいは、患者自身が自らの死と向き合いたくないこともあるだろう。こうした文脈は、患者が死についての話題を避けていることが分かるだけでも成立するし、医療スタッフが患者の死にかかわる話を少しでもふった時、患者がそれを嫌がっていることを察するだけでも成立する。医療スタッフが患者にあわせて気づかないふりをする動機付けは十分にある。という

のも、それが患者の望んでいることであり、既に述べておいたように患者の死に触れずに済ませる方が医療サービスを提供しやすいからである。

このときの相互作用の戦略は互いにおおよそ一致する。まず、危険な話題は避ける(「回避儀礼」、危険な話題に触れざるを得なくなっても限度をわきまえる、基本的には無難な話題に終始し(「呈示儀礼」、矩を越えても越えなかったようにふるまう。こうした状態を維持するために互いが必要に応じてその責任を負う。いわば病棟での「相互行為儀礼」である。

といっても、患者の激しい苦痛など、もうこれ以上知らないふりをしていることができなくなるとき「開かれた気づき」の文脈(場面)へ移行せざるを得ない。それでも片方がふりにこだわるなら、再度「根比べ」がはじまり、文脈(場面)が行ったり来たりして緊張が生じる。「互いに気づいていないフリ」をする文脈(場面)は患者の「尊厳」やプライバシーを確保するが、死を受け入れれば得られるであろうスタッフや家族との率直で豊かな関係を閉ざしてしまう。そうした意味で「互いに気づいていないフリ」をする文脈(場面)の持続は好ましいものではない。

患者の死が避けられないことを、スタッフ、患者双方が認めるとき、「開かれた気づき」が生まれる。もっとも、それで問題がなくなるかというと、そういうわけではない。というのも、まず「死期」、「死の迎え方」の問題がある。医療スタッフが患者の死にたいして「開かれた態度」をとっても、そこまでの情報を明らかにすることはまれである。こうした副次的な「気づき」の文脈は、死へ「開かれた気づき」が安定しているのと対照的に不安定である。また、さらに深く話すことができたとしても、「望ましい死」についての考え方が一致するとは限らない。しかし、だからこそ死の迎え方について話すことができるのである。

自分がやがては死ぬということに気づけば患者は「死にゆく人間」として責任を持たなければならなくなるし、医療スタッフも終末期患者を前に専門家として適切に行動しなければならない。たとえば、どこまで延命措置を続けるかといった判断は単なる医学的な判断ではなく、倫理的、社会

的判断も伴う。つまり、ここでも役割を超えた「人格」が問題になる。そこで適切にふるまう患者と振る舞わない患者ではケアにも違いが出てきてしまう。また、適切な振る舞いをしない患者は、なにか理由があつてのことではないかと疑われやすい。逆に、行き倒れや自殺者、手遅れ、場合によっては人種に左右されて「不適切な」患者扱いされてしまうこともある。「無理をいう」患者も「不適切な」患者と見なされる（「非・人物」non-person）。スタッフにしてみれば、勇気と感謝の気持ちを残して亡くなっていく患者（の人格）を高く評価するのである。

だとすれば、医療スタッフが相互行為を介して患者に適切な死を迎えるように仕向けていくというのもよくわかる話である。逆に、それを引き受けてくれない患者には否定的な意味をもつ戦術を採用せざるをえなくなる。あるいは、上司や同僚、家族に協力を求めることもあるし、病院に見舞いにくる家族らも適切にふるまうよう期待される。

他方、自分が死ぬと分かっている患者は自らの死の迎え方についてスタッフと「交渉」（negotiations）しようとする⁽¹¹⁾。これらの大半は日常の看護業務にかかわることであるが、会話の量や臨終の場面も対象となる。もっとも、それが容認される範囲を超える場合、患者は交渉にあたっていろいろと困難にぶつかることになる。また、医師や医療スタッフは患者の病変により気づきやすく、ここまでくると隠すのも難しいのだが、患者が疑念を抱いても、それにふれまいとすることがある。「開かれた気づき」の文脈（場面）は相互作用で容易に他の文脈へ変化する。交渉にうまく答えられるかはスタッフの使命感（人物）に関わってくるので、望みに応じられれば充実感や誇りが、失敗したと思えば非医療的な「悔い」が残る。

もっとも、こうした「終末への気づき」が不完全なままの患者もいる。未熟児や、昏睡状態の患者、老衰患者、先にも少し触れたスタッフがその「終末への気づき」に関心を払わなくなる人々（「非・人物」）、自殺者や下層階級などがそれにあたる。患者の「終末への気づき」を不完全にするには、病院の局域区分を意識的に分けて「気づき」の文脈の変化を防止する。

己の終末を知っている患者が死の話題を控えてくれる。あるいは、集中治療室での緊急事態ではそもそも「終末への気づき」に関わり合っている余裕がない。

他方、皮肉なことに、患者の「終末への気づき」を問題にせざるをえなくなるのは、患者が亡くなった直後である。このとき、医療スタッフが患者の関係者と接する場合、患者がまだかろうじて生きているかのようにふるまうことがある⁽¹²⁾。関係者が死を受け止めきれない態度を先取りするようにスタッフがふるまおうとすると、逆に死んでしまった患者の「終末への気づき」を援用せざるをえなくなってしまうのである。

4, 患者を死に直面させる—「気づき」を開く

医師は患者の意思ほかを考慮しつつ死の告知したものを考えるが、ほとんどの場合「告知すべきでない」と結論する一般的基準をもちあわせているように見える。とはいえ、患者に気づかれて信用を失うよりは、あらかじめ告知しておいた方がよいといった動機付けがはたらく余地もあり、患者に告知するケースもある。こうやって「閉じた気づき」の文脈(場面)を「開かれた」ものあるいは「死を疑う」文脈(場面)に変換しようと決心したときの関係者の「気づき」は以下のように変化する。

まず、患者は、たいてい抑鬱状態に陥る。告知は受容するか、否認するかできるわけだが多くはそのまま否認しやすい。とはいえ、否認していたのでは、その後の自分の病状の変化を知ることができない。間近な死を暗示するような出来事が続けば受容へと向かって行かざるを得ない。もっとも、病状の変化によっては否認に遡ることもある。自分の一生を意味あるものにしようと積極的に受け入れる場合もあれば、淡々と死を消極的に受け入れる患者もいる。

医療スタッフにとっては、患者の相手をしなければならないという意味では消極的に死を受け入れてくれた方が扱いやすい。一方で、病と闘おうとする人もいる。他方、最後まで否認を貫こうとする患者は、気づきに開

かせようとする医療スタッフや家族と「根比べ」が始まり、孤独になりがちである。もっとも、死を知らされていない患者と比べれば、死を否認した患者はまがりなりにも死への準備にそなえることはできる。

次に、家族は、医療スタッフにとってやっかいな存在である。一家族の相手をしているのであれば、その要望に応じて患者のケアで協力をあてにすることもできるが、医療スタッフは、入れ替わり立ち替わり、複数の家族に対応しなければならない。もっとも、その対応の仕方はかなり単純化されている。家族は患者の死の気づきに気づいているか（家族だけが「開かれた気づき」の文脈（場面）にいる）、気づいていないかのどちらかである（家族も患者も「閉じた気づき」の文脈（場面）にいる）。早い段階で家族に知らせれば患者にストレスを与えるし、それだけ患者をコントロールするのが難しくなる。また、家族が疑念を抱き始めたら、それを患者に悟られないようにコントロールしなければならなくなる。

家族が疑念を表に出さなければ、それまで通りに扱ってあげればよいが、一方で、疑念を封じ込めるように努めなければならない。そして、この点で医療スタッフは家族の反応に先回りできるだけの患者の状態にかかわる知識をいちばんそなえている。もっとも、それ故に、疑念を抱いた家族とのあいだでディレンマを抱え込むこともなる。こうしたケースでは、より専門的な知識を持つとみなされている医者に「役割を振る」(role switching) こともある。場合によっては、一番頼りになりそうな家族の一人にだけ告知して共謀関係をつくるといったこともありうる。しかし、こうした手法は家族の疑念が深まるにつれてどんとん役に立たなくなっていく。

そして、家族に告知しようとするれば、家族の誰か中心人物に直接告知していくか、患者に本人に告知してそれが家族にも伝わっていくかのいずれかになる。また、家族は告知を受けることによってターミナル・ケアに積極的にかかわり、患者と死を迎えることを分かち合うことが期待されている。

家族へ告知したときに生じるショックを和らげるために告知の手順は定式化されている。たとえば、重篤であることをあらかじめ電話で伝えておけば、来院した家族は詳細な説明が聞けるものと期待しており、丁寧な告知 (gentle discloser) を受ける。死に至る早さが十分緩やかな場合は、家族への告知は看護婦からにせよ、医者からにせよ「丁寧な告知」が望ましい。あらかじめ、家族が受け入れる用意ができるよう、最初はおおざっぱに伝えるようにする。一番やりやすいのが迫り来る死の時期を曖昧にすることである。もちろん、かえってそれが徒になることもある。

逆に、事故、自殺未遂、致命的疾患のようにすぐに死亡する可能性が高いときは驚くくらい「どぎつい告知」(harscher discloser)が必要になる。電話ならすぐ駆けつけるよう連絡をとる。その場にいなければ少しは最悪の事態を受け入れる用意ができていだろう。しかし、現実には患者に心の準備をしてもらう余裕がないことが多い。それでも看護婦は「死が目前に迫っている」という体裁をとりたい。告知すらできないとき関係者すべてが「終末の気づきのない文脈」(non-awareness context) で立ち会うことになる。こうなるとスタッフですら我を忘れることがある。

こんな次第であるから、家族に告知をする場所は選ぶ必要がある。プライバシーを確保できる個室が望ましいが、時間的な余裕がないときはオフィスではなく廊下で告げるだろう。臨終が明らかに間際であるときは告知しない手もある。患者をめぐる動きが目に見えるのであれば、説明を求められるのをまっていればよい。しかし、大抵の病院では患者は隔離され、スタッフは家族に心の準備をする機会を与えるのである。

患者が助からないと知った家族に対してスタッフは相互行為上の戦術を変えていく。面会の規則は緩和される。面会の規則が緩和されると、スタッフは患者をとりまく環境をよりコントロールする必要に迫られることになる。たとえば、病室が社交場になりかねないとか、患者に伝えていないことを家族がつい口走ってしまったりしないか。また、家族から出てくる無理筋の注文のせいで患者に無理をさせないようにコントロールするなどであ

る。こうなるとスタッフは配慮の対象を患者から家族に切り換えて、自分の業務に意味付けを与えるようにする」(「対象の切り換え」object switching)。

一方、面会規則が守られるかぎりスタッフは患者と家族のプライバシーを尊重することができるが、そうもいかなければスタッフは相互行為上の戦術を採用せざるをえなくなる。家族同伴ではできない業務もあるし、相部屋の場合はどうするかなど、空間管理の問題が生じてくる。こうしたときは、局域区分の確保のために一時的に面会規則が復活する。それでも待合室を抜け出して患者に会いに行こうと「漂流活動」(drift routes)を始める家族もいる。

家族や親族が病室に長く居座るようになると、素朴に「家族」や「親族」ではいられなくなってくる。スタッフの業務の妨げにならないように「介護者」ないしは「患者」扱いされるようになる(家族に対する「地位強要」Status-Forcing)。子どもやお年寄りの場合は「非・人物」扱いして業務の妨げにならないようにしてしまうこともないわけではない。

死の告知を受ければそのための準備ができるので家族・親族もスタッフも便益を受ける。ただ、ここで問題になるのは家族がどのように死の予期を抱くかである。患者の病状が悪化すると医療スタッフは余命を考慮しながら家族や親族の死期に見通しを変化させるよう働きかける。また、家族の死を受け入れる準備を整えるための支援者がいた方がよい(cf. シスター)。

しかし、家族のために医者や看護婦が時間を割かない病院の方が大多数である。先回りして家族が悲しみにうちひしがれないように細心の注意を払っておけば十分だからである。必要ならば近親者からスタッフに話しかけてくるし、悲嘆にいけない者として扱った方が家族も張り詰めた気分で居られるからである。

これが、死期の如何にかかわらず「もうすることがない」段階に移行すると「終末に気づいている」文脈がとりわけ重要になる。それまでの医療

スタッフの目標が患者の「回復」にあったものが、患者に「安らぎ」を与えることに変化するからである。患者はそれまでの病棟を追い出され、どこまで延命治療をするかを考えなければならなくなる。

ところが、医療スタッフにせよ、患者にせよ、家族にせよ、これほど異なる場面に直面しなければならないにもかかわらず、ストラウスはこれを文脈の重みの変化と考え、文脈の変化と考えることはしない。というのも、それまでなら、たとえ「開かれた気づき」の文脈に移行しても、他の文脈が帰帰してくる可能性があったが、「もうすることがない」段階に移行すると、とりわけ医師、あるいは不治を知らされた看護婦は、そうした文脈のゆれにつきあう動機付けを失ってしまうからである⁽¹³⁾。もっとも「開かれた気づき」の文脈だけが問題になる場面は、次節で確認するように医療スタッフの行動の組織上の大きな転換点となる。

と、同時にそれは新たな問題を引き起こす。「もうすることがない」患者をどうするか？優先度の高い標準的方法は可能なら患者を家に帰してしまふことである。実際、帰る家があれば患者は大抵帰りたがる。こうして「追い払う」ことができないとなると、看護婦は「もうすることのなくなった」患者に「特別待遇」を許可したり、ちょっとした「善意」を向けることがある。「閉ざされた気づき」のもとでは患者はそうした息抜きを素直に喜ぶが、「開かれた気づき」の文脈では、患者が死をどう受け止めているかで事態が変わってくる。単に歓迎したり、それを偽善と受け止めることもあるが、とりわけ死を受け入れられない患者はいかなる特別な配慮も受け入れられず自分に「ひきこもって」しまう。

いずれにせよ、ここまでくると看護婦は患者の痛みをうまくコントロールすることが重要になる。最終的に判断をするのは医者であり、投薬の指示も医者から出るが、「もうすることのなくなった」状態に気づくのは看護婦が先であることの方が多い。だから、いかなるときであれ、必要とあれば医者に連絡をつけ「気づき」の状態を共有し、投薬等の指示を受けようとする。そして、こうした指示を受けた看護婦は今度は「終末に気づい

ている」患者と鎮痛剤の投与の量等をめぐって「根比べ」を始める。そして、患者が過度に薬漬けになると患者は話すことができなくなりこの「根比べ」は終了する。

こうしたなかで延命すべしという医療理念と安らかに死を迎えさせることはしばしば相反する。「死なせてあげたい」という思いが看護婦に到来する。それはたいてい家族の苦悩とも一致する。「閉ざされた気づき」の場合だととりわけこうした思いに流されやすい。ここで採用されるのが「助けられない戦術」であるが、医療スタッフの使命が本来的に「延命」にある以上、死なせた方がいいと思っても助けてしまうことがある。さらに、「速やかな死」が望ましいと考えられる場合には、生命維持装置を外したり、致死量の鎮痛剤の投与が「医療行為」として行われることになる。そして「安楽死」は「開かれた気づき」の文脈のもとでのみ可能になる。

4-2, 死にゆく患者（ヒト）の前での看護婦の関与配分

さて、こうしてヒトが死にゆく状況でヒト（人物）は冷静さを失う事情がいくらかもあるものだが、「終末に気づいた」看護婦が落ち着いていられるかどうか、本人のみならず周囲のスタッフにも影響を及ぼす。このとき看護婦が用いる一般的戦略は、患者への心情的関与（*emotional involvement*）を調節することであり、これは発展的プロセスをとる。つまり、次第に関与を減らしていく。その必要が感じられてくるのは、死にゆくプロセスの最終段階になるときであるのは見やすい。だから、看護婦が把握している病棟の死亡率にあわせて情緒的秩序が形成されやすい。

患者への関与を減らしていくために使えるのは、「熱心なケア」（ただし、未熟児病棟ではこれが難しい）、患者への適切な対応、患者との会話を極力避ける、とりわけ死の話題を避けるようにする。患者の死をめぐる問題に関与しないで済むように、関与配分を調節するわけである。だから、患者の病態が変化し、死の確実性が不安定になる場合、看護婦はどう関与配分すればいいか分からなくなり、時に投げやりな調子になる。

また、死期がわからないときも、関与の調整のための戦略を新しく編み出さなければならなくなる。まず、患者には「もうすることがない」のだから、思いやりの気持ちを伝え「安らぎのケア」に熱心にいそしむことになる。また家族からの批判を避けるために、面会を避けたり、都合のよい話題だけを選び、場合によっては他のスタッフに「役割を振ったり」する。

とはいえ、安らぎの提供はたやすいことではないので鎮痛剤を過剰投与することもある。だから、医者^の投薬の指示が厳しいと看護婦は苦しむ。「あるいは、逆に、患者と向き合うことを「心理的に回避し」、患者をただの身体扱いし、丁寧なケアをしてみせることもある。鎮痛剤が効いて痛みが最小になれば看護婦は落ち着きをたもてるようになるのだが、患者に関する悩みはつきない。自分や知り合いに同じような病を抱えていると深入りし安くなるし、家族がほとんど面会に訪れない患者や「長引く患者」にも心を痛めやすい。だから、一種の分業体制を引いて同僚を守ることも必要になる。この段階で病棟の精神的秩序を維持するのに重要なのは看護婦の(人格的な)士気の高さなのである。

これが、医師から予想される患者の死期を伝えられるようになると、その時期に対応した行動を考え始めるようになる。当然、看護婦はまず死を警戒する。それも担当の看護婦だけでなく病棟すべての看護婦が警戒する。「死の警戒」のもとで看護婦が落ち着きを維持するために、できることは、主治医に鎮痛剤の処方について「ゆるやかな指示」を依頼することである。さらに、病室を離れる口実を作って、同室の患者や家族に肩代わりを頼むこともある(「役割を振る」role switching)。また死が近くに連れ一連の事前通告をしなければならぬが(cf. 神父を呼ぶ等)、医者^の適切な助言がなければ看護婦は動揺しやすくなる。

死期を知らされると、看護婦はその場に居合わせないような手立てを考え始める。休暇や担当替え。しかし、なかには最後までつきそわないと気の済まない看護婦がいて、他の看護婦が関わらないで済むこともある。しかし、大抵は多くの看護婦が臨終の席に立ち会わざるをえず、患者の死亡

率が高い病棟では看護婦もなれたもので、関与対象を家族や医師、他の患者に切り換えようとする（「関与対象の切り換え」）。患者の死に際に、事情を知らない家族がいきなり訪問して来たり、患者自身の予期せぬ死が起こりうる。患者に死を宣告するのは通常は医師の役割だが、こうした場合は看護婦がなんとか落ち着きを取り戻して家族に患者の死を告げなければならない。

患者が死亡すると亡くなった患者のことを忘れようという気分が支配する。場合によっては配置換えも行われる。ところが、患者の予期せぬ死に出くわしてしまったときには看護婦は無防備な状態に置かれる。ストラウスは看護婦が会おう予期せぬ死の類型を書き出しているが、そもそも予期に過ぎない以上、いずれにせよ外れるときは外れる。予期せぬ死に出会った看護婦は、判断する立場にあったはずの医者を責めがちである。また、看護婦は自分たちの誰かに落ち度がなかったか吟味し始める（「自己の役割取得」の吟味）。そして過失に関する疑問が解消するまでは「患者のことを忘れる」わけにはいなくなる。そして、この段階をクリアしても患者のことがしばしば思い出され、忘れるのが困難になる。

また、その時期が来ても亡くならない患者はしばしばその存在を忘れられることもある一方、実はまだできることがあったのではいかという疑念を残すこともありうるのでなかなか忘れられないこともある。

このように看護婦は患者の死の過程で適切な関与配分を行い、落ち着きを維持していかなければならないのだが、一番遭遇したくないのが患者の予期せざる死であることから分かるように、看護婦は悲観的になりやすく、悲観主義は死の予期がズレるちょっとした原因になりうる。また、看護婦の悲観主義は、患者を必要な段階よりも早く「閉じこもり」がちにすることにもしやすい。

というわけで、ストラウスの議論にしたがって「閉じた気づき」の文脈（場面）から「開かれた気づき」の文脈（場面）の各ステップをたどる形で議論を整理し直してみた。ストラウスとゴッフマンの議論を比較するに

あたって、患者に準拠して「気づきの文脈」の転換を見ていけば、これが「気づきの場面」とほぼ等価なものに相当するのではないかという見通しに立ちStraussの議論をたどってきたのである。あわせて、双方の概念の互換性を意識しながら、ゴッフマンの概念も補足的に示しておいた。字面を追うかぎり、さしたる違和感はないように思える。

ただ、Strauss自身、明示的に述べてはいないが、患者の死がほぼ確定的になった時点で、医療スタッフは行動を組織する準拠点を転換させている。実際、Ⅲ部とⅣ部の切れ目に「開かれた気づき」がくる。行論で確認したように患者の死が確定的（「開かれた気づき」）にならないかぎり、「気づき」の在り様に基づいて医療スタッフが文脈（場面）ごとにその対応に当たることになる。しかし、「死への気づき」が開いて患者の死がほぼ確定的になってしまえば、もう医療スタッフにできることは決まってしまう。「何もすることがない」。ただどう看取るか。患者の態度で局面が多少変わったところでこの見通しは変わらない。何をしたところで「開かれた気づき」の文脈の下にある。

とはいえ、「何もすることがない」ない患者に対してもまだやるべきことがある。患者はまだ生きており、しかも、自身が間もなく死を迎えるであろうことを知っている。このとき、医療スタッフには、延命治療に加えて、患者にどう死を迎えさせるか、より具体的には、どう痛みを和らげるか、家族との関係をどうするか等々の戦略が浮上してくる。しかも、それは医療スタッフがなるべく患者の死に直面せず、苦しむ姿を見ずに済ませようとする自己防衛戦略でもあった。

つまり、「死への気づき」に開かれると、患者も看護婦を始めとする医療スタッフも立場（カテゴリー）を更新して、来たるべき「患者の死」に準拠して行動を組織している。たとえStraussのいう「文脈」は固定しているとしても、そのなかには多様な「気づき」があり、看護婦や医療スタッフに様々なことが期待される場面がある。「開かれた気づき」の文脈は「なにもすることがない」文脈でありながら、そう言い切るにはあまり

に多様な事象に開かれているのだ。

しかも、すでに見たようにもう長くはないとわかっている患者相手に仕事を続けるにあたって、看護婦や医療スタッフはしばしば延命治療と安らかな死を迎えさせるという必ずしも相容れない要請の板挟みになって苦しむことになる。「もう死なせてあげたい」。言い換えるなら、彼女ら彼らは職業上のアイデンティティとパーソナル・アイデンティティのあいだで葛藤を覚える。もうここらから、ゴッフマンはストラウスにつきあう必要はあるまい、というより、ストラウス自身が「気づき」の理論からズレたところで作業を始めている。

「間もなく死ぬはずの患者」という形容矛盾に近い物言いにもかわからず、一連の「医療行為」は無意味なものとは見なされていない。「間もなく死ぬはずの患者」は非・人格（ノン・パーソン）扱いもされない。すでに見たように、非・人格（ノン・パーソン）扱いされる患者のカテゴリーはかなり固定されている。そうならないのは、たとえ「死にゆく患者」として何もできなくとも医療スタッフが「患者」を一個の人格として扱おうとするからだ。また、だからこそ、時にその対応に苦しんだり悩んだりするわけだ。医療スタッフの内的葛藤は死を目前にした患者を人格として扱うことに由来している。

一見すると、こうした葛藤は患者を前にして一人一人にわき起こる感情（意識）からくるように見えるし、そのための関与配分の戦略も用意されている。しかし、それはすでに相手をそれに値する人格と見なしているからである。ゴッフマンによれば誰かを「人格」として扱うかどうかは相互行為の作法上の問題であり、処遇次第で非・人格（ノン・パーソン）扱いにもなる。

ストラウスの場合、もともと評価の問題を言語の特性から導いており、ふだん互いを人格として扱う場合と、相手を「非・人格」（ノン・パーソン）として格下げする場合に、とりたてて大きな手続き上の違いがあるとは見なしていないようだ。しかし、そもそもミード／ブルーマーに由来す

る「他者(あるいは自己)の役割取得」によって「人格/非・人格(ノン・パーソン)」を区別することはできない。というのも、この区別はむしろ発達過程で分化する「他者の態度取得」と「物的態度の取得」それぞれに由来すると考えざるを得ないからである。といて、この二つの態度取得の違いが「人格」と結びつけられているわけではない。しかし、こうした振り分けが二つの異なる態度取得のいわば暗黙の条件をなしていると考えなければ、発達理論とこうした用法の整合性がつかない(なお、「他者の態度取得」が循環論法ではないかと指摘されるのは、発達段階ですでにこの二つの区別を前提にしてしまっているからではないか)。しかも、この二つの境界はモードが考えるように社会に相対的に変わるばかりではなく(cf. 自然現象の擬人化)、場面に相対的に変わる(「非・人格(ノン・パーソン)」扱い)。

誰かを何者か(役割)として意識し、何らかの感情を抱くためには、一定の場面でその人間(でなくてもよい場合もあるが)を人格として扱う用意ができていなければならない。ストラウスとゴッフマンの違いは準拠点を意識に訴えるか、規範に訴えるかに帰着すると述べておいたが、いずれにしても、相手を人格として扱う作法が先行しなければ、役割をその都度見合ったものに切り換え、相手に感情移入したり、何かを期待するというようなことは不可能である。ゴッフマンの「相互行為儀礼」論はまさにそこを問題にしていたのである。

以上、本稿の主たる目的は、ストラウスの理論的主著である『鏡と仮面』とグラウンデッドセオリーの最初期のフィールドワークの成果とされる『死ぬことに気づく』(『死の Awareness 理論』)の記述がどれだけ連続した関係にあるのかを吟味することであり、さらに、それがゴッフマンとどれほどかぶるのかを明らかにすることであった。

まず、一貫してストラウスが「パーソナル・アイデンティティ」をめぐる諸問題を扱っていることがわかるように、この点を意識的に記述してきた。また「パーソナル・アイデンティティ」に加えて、ゴッフマンにとっ

て重要な概念である「人格（人物）」(person) が問題なることも分かるように意識的に記述してきた。実際、翻訳ではわかりにくいかもしれないが、原著では「person」という語がいずれの著書でも頻出する。

これは考えてみれば当たり前のことであろう。個別の患者は患者である以前に、多様な症状を抱え病棟でわがまま言えば素直にもなる一つの人物であり、たとえ病棟にいる患者であれ、人格として尊厳をもって扱われるのが本来の姿である。

また、「地位強要」のように「鏡と仮面」で展開されている概念もあれば、「役割を振る」「対象の切り換え」といったその延長上にある概念が『死ぬことに気づく』で採用されていることも確認できた。また、実質ゴッフマンの概念で説明できるような事象も確認できた。そして、何よりも、中期ゴッフマンの中核的な概念である「関与配分の問題」が、表現ではなく感情の問題として、主題的に扱われている。このように見ていけば、『死ぬことに気づく』（『死の Awareness 理論』）が理論的主著である『鏡と仮面』の議論を具体的に深化させ、ゴッフマンの「相互行為儀礼」や『集まりの構造』といった著書のある種の応用になっていることがわかる。

また、本書でストラウスは、後に「グラウンデッド・セオリー」でも採用することになる「実態理論」(substantive theory)と「公式理論」(formal theory)の区別を採用し、自らの分析を経験的状况に忠実な「実態理論」に位置づける一方で、より抽象度の高い「公式理論」のなかにゴッフマンの議論すら含めている。とはいえ、ストラウスの理論も基本的にはある文脈に典型的に生じる事柄の類型論の組み合わせである。ならば、ゴッフマンが「役割距離」や『アサイラム』の中で概念とあわせて例示するようなかなか個別ケースの説明は「実態理論」に相当することにはならないだろうか？ また、ここでの知見も多くの事例の積み重ねのうえ得られたものであろう。しかも、ゴッフマンの「関与」概念の採用はすでにここでの説明が「公式理論」に片足を突っ込んでいることにならないか。そして、ここで展開されている議論を参照してさらなる「公式理論」を展開できる

かもしれない。というより、それが『鏡と仮面』なのである。

とみていくと、私はストラウスがいうように、この二つの理論を彼らがそうするように明晰に区別できるものかどうかには懐疑的である。もっとも、ストラウスはグレイザーとともにさらにこれからグラウンデッド・セオリーを展開していくのであり、この点の詳細はグラウンデッド・セオリーに踏み込んだ続編でなされるべきであろう。ということで、とりあえず、当初の目的を果たしたところで本稿を閉じることとしたい。

注

- (1) A・ストラウスとB・グレイザーが、グラウンデッド・セオリーの最初の成果として挙げるのは、本書をはじめとする三つのフィールドワーク研究とその理論書である。すなわち、本書『死ぬことに気づく（『死のアウェアネス理論』）』（Glaser & Strauss [1965]）、『看護婦と患者の死』（Quint [1967]）、『グラウンデッド・セオリーの発見（データ対話型理論の発見）』（Glaser & Strauss [1965]）、『死にゆくとき』（Glaser & Strauss [1968]）である。
- (2) A・ストラウスの業績全体を知るうえででは、主要な論文と著書の抜粋からなる Strauss [1991] が出ており、ストラウスの伝記的な事実から業績にいたるまでトータルに見渡した論文としては Baszanger [1998] がある。また、ストラウスの業績を顕彰した (Maines [1991]) という論文集が出ており、*Symbolic Interaction* (21) 4, 1998 ならびに、*Sociological Perspectives* 43 (4), 2000 それぞれで、やはりストラウスを顕彰する特集が組まれている。自らをはじめ、ゴッフマンやストラウスなど「第二期シカゴ学派」をめぐって回想した論考としては H・ベッカーの Becker [1999] がある。
- 一方、これまで刊行されている翻訳書につけられた業績一覧はいずれも不十分なもので、理論書系列、医療者社会学系列いずれも関連する著作を網羅することすらできていないのが実情である。実際には、ほかに都市社会学や産業社会論の業績もある。管見の及ぶかぎりではストラウスの医療社会学系の業績はかなりドイツ、フランスでも紹介されている。これはゴッフマンがフランスで『アサイラム』中心にかなりの著作が翻訳され、議論の対象とされていることとならべてみると興味深い。なお、UCSF School of Nursing のサイトに、ストラウスの業績を顕彰したサイトがあり (<http://dne2.ucsf.edu/public/anselmstrauss/index.html>)、ここでストラウスの全業績を一覧することができる。
- (3) E・ゴッフマンがパーソナル・アイデンティティをかなり主題的に取り上げている書物として『スティグマ』（1963b）、『アサイラム』（1961）をあげておく。また、人格を主題的に取り上げている書物として『相互行為儀礼』（1967）

もあわせてあげておく。『相互行為儀礼』『アサイラム』は1960年代になってからの公刊であるが、収録論文は「アクションのあるところ」をのぞいてすべて50年代に刊行されている。『鏡と仮面』で言及されているガーフィンケル最初期の「降格儀礼」論文(1957)でも人格について言及されている。

- (4) 「物語的」な自己論については拙稿(2017b)
- (5) 青年期の移行過程の調整についてはColeman [1999]を参照のこと。
- (6) ストラウス自身、ミクローマクロ的な論争を回避するために本書が書かれたと述べているように、ゴッフマンの議論と同じく、こうした議論に拠るかぎり一定の地点から振り返られた眺望としてしか歴史を描き出すことはできないであろう。これがブルーマーの『産業化論考』とは決定的に異なる点である。

ストラウスには社会移動について著書『社会移動の文脈』(1971)があるが、本書にしたがうなら、この本では、当然、個人が社会移動していく経路とその間に交わる人たちを介して得られる視座が問題になるはずである。そして、この本の前半でストラウスが問題にするのは社会移動をめぐるイデオロギーである。つまり、「社会移動」について人々が互いにどのように語り、どのようなイメージを抱いているかが問題にされている。そして、そうした知見をもとにより一般的な理論形成を試みるが、それは「地位移行の理論」(Status Passage Theory)だと言われる。

ハーバート・ブルーマーが、シンボリック相互作用に見いだす、内在的な因果性を元に行為を組み合わせることで、個々人の視座を越えたマクロな理論を作り出してしまったのとは対照的に、ストラウスは個々人の視座、抱いているイデオロギー、イメージをベースに理論を組み立てる。それが本書で言及されている「地位移行」をめぐる議論の発展・応用の試みになっているわけである。

- (7) ここでは一連のエスノメソドロジーによる医療場面の研究を想定している。日本語として読めるものとしてSudnow [1967]、Maynard [2003]、Heritage & Douglas [2006]。そのほか国内でもかなりの業績が公刊されている。

- (8) この点の詳細については拙稿 [2015] を参照。
- (9) 「根比べ」(contest) は本書で頻出する概念であり相互行為戦略の一つだが (Glaser & Strauss [1965] 47=47 頁 [1988])、興味深いことに、『交渉』(1978) ではそうではない。訳書では「かけひき」とあるが十分ニュアンスを引き出せた訳語だとは思えない。
- (10) なお、本訳書では、この「根比べ」(contest)を扱った部分で、期待(expectation) に対比される概念として「要求」(demand) が挙げられている。しかし、『死ぬことに気づく』原書(第9版)では、「要求」(demand) の代わりに「求め・クレーム」(claim) が用いられている。また、本文中でも言及したが『鏡と仮面』でも、異議(クレーム)が期待(expectation)に対比される形で用いられている。そう考えると、版を重ねる過程で採用する概念を変更したとは考えにくい。ちなみに、「クレーム」が相手に受け入れを強要するより強い概念であることに注意。
- (11) 後にストラウスは『交渉』(Negotiations) という書物を公刊し、簡単な学説史と多様な交渉形態のケーススタディを試みている。本書もそのひとつとして見ることもできるであろう。『交渉』の冒頭をよれば、社会秩序とは「交渉の秩序」であり、交渉の議論の先達は相互作用論者、それもシカゴ社会学のパーク、トーマス、ミードであり、この三人はいずれも「非決定論者」であるとされる。その後、交渉と関連する研究者の議論が検討に付されたうえで、ケーススタディに移ることになるが、その冒頭でゴッフマンの主として『アサイラム』の議論を取り上げ、ゴッフマンの議論にはあってよいはずの「交渉」の議論が欠如しており、「社会決定論的要素が強い」と批判されている。

本論(3節)や文献にあげておいた別稿から確認できるように私はこうした区別の仕方そのものが的外れであるように思う。ちなみに、この書物では序で交渉の一例としてトマス・シェリングのゲーム理論を挙げており、ゴッフマンはシェリングを参照して戦略的相互行為の分析も行っており、成果としては『戦略的相互行為』(1969)や「ゲームの面白さ」(1961)「アクションのあるところ」(1967)などがあげられる。しかし、ゴッフマンの議論は『交渉』

のなかで社会決定論的色彩が強すぎると批判されるように、ストラウスの観点からするとモデル・ケースにはなり得ない。

さらに後にストラウスは『行為の継続な組み合わせ』(1993)という行為論の著作を公刊する。ここで「交渉の秩序」を作り上げる「シンボリック相互作用の順列」の理論が提示されている。ストラウスの理論的發展を跡づけようとするばここまで吟味する必要がでてくるが、管見の及ぶかぎり日本でその手の業績は見当たらない。そもそも最初の理論書が訳されたのも比較的近年のことである。ストラウスの議論は、いまやグラウンデッド・セオリーばかりが注目されており、並行して進められてきたシンボリック相互作用理論は日本の研究者に過小評価されてきたように思える。私としては、ミードやブルーマーよりも魅力的に映る一方で、間違いなく、私には受け入れがたい仮定にのっとったストラウス理論の包括的研究については期限を切らないこの先の課題としておきたい。

(12) 同様の指摘はSudnow [1967]に見られる。

(13) といっても、行論を見れば「気づき」の文脈とは独立に多様な動機付けが働く契機があることがわかる。しかし、文脈上は「何もすることがない」のであるから、この部分をとりわけ「気づき」の文脈の問題として扱うのは苦しいように思える。

[参考文献]

- 浅野智彦 2001『自己への物語論的接近—家族療法から社会学へ—』勁草書房
- 芦川 晋 2015「自己に生まれてくる隙間—ゴッフマン理論から読み解く自己の構成—」『触発するゴッフマン』新曜社
- 芦川 晋 2017a「ブルーマーにおける相互作用の「内在性」について—初期シカゴ学派の系譜にハーバート・ブルーマーはどのように連なるのか?」『現代社会学部紀要』第10巻 第2号:161-197
- 芦川 晋 2017b「『自己』の「社会的構築」～昔から社会学者は「自己の構成」について語り続けているが一体どこが変わったのか?」『社会学評論』(269)

68: 102-117

- Baszanger, Isabelle (1998) "The Work Sites of an American Interactionist: Anselm L. Strauss, 1917-1996", *Symbolic Interaction*, 21 (4), 353-377
- Becker, Howard, 1963, *Outsiders: Studies in the Sociology of Deviance*, Free Press. (=2011 村上直之訳『完訳 アウトサイダーズ—ラベリング理論再考—』現代人文社)
- Becker, Howard S. (1999) "The Chicago School, So-Called", *Qualitative Sociology*, 22 (1), 3-12.
- Blumer, Herbert, 1969, *Symbolic Interaction*, Prentice-Hall. (=1991 後藤将之訳『シンボリック相互作用論』勁草書房)
- Blumer, Herbert, 1990, *Industrialization as an Agent of Social Change*, Walter de Gruyter. (=1995 片桐雅隆他訳『産業化論考—シンボリック相互作用論の視点から—』勁草書房)
- Blumer, Martin, 1984, *The Chicago School of Sociology: Institutionalization, Diversity, and the Rise of Sociological Research*, University of Chicago Press.
- Bourdieu, Pierre et Jean-Claude Passeron, *La reproduction : Éléments d'une théorie du système d'enseignement*, Les Éditions de Minuit, coll. (=1991 宮島喬訳『再生産—教育・社会・文化』藤原書店)
- Clarke, Adele E. & Susan Leigh Star (eds.), 1998, *Legacies of Research from Anselm Strauss*, *Legacies of Research from Anselm Strauss* 21(4): 341-463
- Corbin, Juliet & Anselm Strauss, 2007, *Basics of Qualitative Research: Techniques and Procedures for Developing Grounded Theory (3ed.)* SAGE. (=2012 操華子・森岡崇訳『質的研究の基礎—グラウンデッド・セオリー—開発の技法と手順』医学書院)
- Coleman, John and Leo B. Hendy, 1999, *The Nature of Adolescence (3ed.)*, Routledge. (=2003 白井利明他訳、『青年期の本質』、ミネルヴァ書房)

- Erikson, Erik, 1959, *Psychological Issues: Identity and Life Circle*, New York: International Universities Press. (=1973 小此木啓吾訳編『自我同一性? アイデンティティとライフサイクル』誠信書房)
- 藤澤三佳 1988-1989 「A・ストラウスの多元的相互作用論検討」『ソシオロジ』104号 Vol. 33: 79-94s
- 船津 衛 1976『シンボリック相互作用論』恒星社厚生閣
- 船津 衛 1983『自我の社会理論』(社会学叢書) 恒星社厚生閣
- 船津 衛 2012『社会的自我論の現代的展開』東信堂
- 船津 衛・宝月誠(編) 1995『シンボリック相互作用論の世界』恒星社厚生閣
- 船津 衛・徳川直人編訳『社会的自我』恒星社厚生閣
- Garfinkel, Harold, 1956, Conditions of successful degradation ceremonies. *American Journal of Sociology*, 61: 420-424.
- Giddens, Anthony, 1991, *Modernity and Self-Identity: Self and Society in the Late Modern Age*, Oxford: Blackwell. (=2005 秋吉美都・安藤太郎・筒井淳也訳『モダニティと自己アイデンティティ? 後期近代における自己と社会』ハーベスト社)
- Glaser, Barney G. & Anselm L. Strauss, 1967, *Awareness of Dying*, Chicago: Aldine Transaction. (=1988 木下康仁訳『死の Awareness 理論—死の認識と終末期ケア』医学書院)
- Glaser, Barney G. & Anselm L. Strauss, 1967, *The Discovery of Grounded Theory: Strategies for Qualitative Research*, Chicago: Aldine Transaction. (=1996, 後藤隆・水野節夫・大出春江訳『データ対話型理論の発見—調査からいかに理論をうみだすか』新陽社)
- Glaser, Barney G. & Anselm L. Strauss, 1968. *Time for Dying*. Chicago: Aldine.
- Goffman, Erving, 1959, *The Presentation of the Self*, Doubleday. (=1973 石黒毅訳『行為と演技—日常生活における自己呈示—』誠信書房)
- Goffman, Erving, 1961, *Encounters: Two Studies in the Sociology of*

- Interaction*, Bobbs-Merrill. (=1985 佐藤毅・折橋徹彦訳『出会い—相互行為の社会学—』誠信書房)
- Goffman, Erving, 1961, *Asylum: Essays on the Social Situation of Mental Hospital and other Inmates*, Doubleday. (=1983 石黒毅役『アサイラム—施設収容者の日常世界—』誠信書房)
- Goffman, Erving, 1963 a, *Behavior in Public Places: Note on the Social Organization of Gatherings*. Free Press. (=1980 丸木恵祐・本名信行訳『集まりの構造—新しい日常行動論を求めて—』誠信書房)
- Goffman, Erving, 1963b, *Stigma: Notes on the Management of Spoiled Identity*, Prentice-Hall. (=2009 石黒毅訳『改訂版スティグマ—烙印を押されたアイデンティティー—』せりか書房)
- Goffman, Erving, 1964, The Neglected Situation, *American Anthropologist* 66-6 (2), now in Pier Paolo Giglioli(ed), *Language and Social Context*, Penguin.
- Goffman, Erving, 1967, *Interaction Rituals: Essays on Face-to-Face Behavior*, Doubleday(now by Pantheon). (=2002 浅野敏夫『儀礼としての相互行為—対面行動の社会学—』(新訳版)法政大学出版会)
- Goffman, Erving, 1969, *Strategic Interaction*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Goodwin, Marjolie Harness, 1990, "He - Said - She - Said: Talk as Social Organization among Black Children" Indiana University Press.
- Goodwin, Charles & Marjolie Harness Goodwin, 2004, Participation, in *A Companion to Linguistic Anthropology*. A. Duranti, ed., pp. 222-244. Oxford: Basil Blackwell.
- Heritage, John & Douglas W. Maynard., 2006, *Communication in Medical Care: Interaction between Primary Care Physicians and Patients* (Studies in Interactional Sociolinguistics), Cambridge University Press. (=2015 川島理恵・樫田美雄・岡田光弘・黒嶋智美訳『診療場面のコミュニケーション: 会話分析からわかること』勁草書房)

- Holstein, James A. & Jaber F. Gubrium, 2000, *The Self We Live by*, Oxford University Press.
- Karpf, Fay Berger, 1932, *American Social Psychology : Its Origin, Development, and European Background*, Russell & Russell. (=1987 大橋英寿監訳『社会心理学の源流と展開』勁草書房)
- 片桐雅隆 1987 「親密な相互作用と匿名的な相互作用—シンボリック相互作用論の基本枠組の再考をめざして」『人文研究：大阪市立大学大学院文学研究科紀要』39 (9) : 637~656
- 片桐雅隆 2000『自己と「語り」の社会学—構築主義的展開—』世界思想社
- 片桐雅隆(編)1989『意味と日常世界—シンボリック・インタラクショニズムの社会学—』世界思想社
- Lessor, Roberta, 2000, In A Tribute to Anselm Strauss : Special Issue, *Sociological Perspectives* Supplement to 43(4) : S1-S6.
- Maines, David(ed.), 1991, *Social Organization and Social Process : Essays in Honor of Anselm Strauss*(Communication and Social Order), Chicago : Aldine Transaction.
- Maynard, Douglas W., 2003, *Bad News, Good News : Conversational Order in Everyday Talk and Clinical Settings*(ed.), University of Chicago Press.
(=2004 樫田美雄・岡田光弘訳『医療現場の会話分析—悪いニュースをどう伝えるか』勁草書房)
- 中野正大・宝月誠(編)2003『シカゴ学派の社会学』世界思想社
- Plummer, Ken., 2000, "A World in the Making : Symbolic Interactionism in the Twentieth Century." In Bryan S. Turner (ed.), *The Blackwell Companion to Social Theory*. Blackwell. pp. 193--222
- Quint, Jeanne C., 1967, *The Nurse and the Dying Patient*, New York : Macmillan. (=1968 武山満智子訳『看護婦と患者の死』医学書院)
- Sacks, Harvey, 1972, On the analyzability of stories by children. in J.J. Gumperz and D. Hymes (Eds.) *Directions in sociolinguistics : The*

- ethnography of communication* (pp. 329–345). New York, NY : Holt, Reinhart and Winston.
- Schatzman, Leonard & Anselm L. Strauss, 1972, *Field Research : Strategies for a Natural Sociology* (Prentice Hall Methods of Social Science Series) Prentice-Hall. (=1999 川合隆男訳『フィールド・リサーチ—現地調査の方法と調査者の戦略』慶応義塾大学出版会)
- Schutz, Alfred, 1932, *Der Sinn Aufbau der Sozial Welt : Eine Einleitung in der verstehende Soziologie*, Springer. (=2006 (1982) 佐藤嘉一訳『社会的世界の意味構成—理解社会学入門—』(改訳版) 木鐸社)
- Strauss, Anselm Leonard, 1959, *Mirrors and Masks : The Search for Identity*, New Jersey : Free Press. (=1997 片桐雅隆訳『鏡と仮面—アイデンティティの社会心理学』世界思想社)
- Strauss, Anselm Leonard, 1971, *The Context of Social Mobility : Ideology & Theory*, Chicago : Aldine
- Strauss, Anselm Leonard, 1978, *Negotiations : Varieties, Processes, Contexts, and Social Order*. San Francisco : Jossey-Bass.
- Strauss, Anselm Leonard, 1991, *Creating Sociological Awareness : Collective Images and Symbolic Representations*. New Brunswick, NJ : Transaction Books.
- Strauss, Anselm Leonard, 1993, *Continual Permutations of Action*. NY : Aldine de Gruyter
- Strauss, Anselm Leonard et al, 1984, *Chronic Illness and the Quality of Life* (2ed.) Saint Louis : Mosby. (=1987 南裕子監訳『慢性疾患を生きる—ケアとクォリティ・オブ・ライフの接点』医学書院)
- Sudnow, David, 1967, *Passing on : The social organization of dying*, Englewood Cliffs, N.J., Prentice-Hall, (=1992 岩田啓靖・山田富秋・志村哲郎『病院でつくられる死—「死」と「死につつあること」の社会学』せりか書房)
- Tanner Mattheus, Dagda, 2012, *Anselm L. Strauss*, Vent.

【付録】

アンセルム・L・ストラウス (Anselm Leonard Strauss)

1916-1996 業績一覧

THESES

1942

“Critical Analysis of the Concept of Attitude.” Master’s thesis, Department of Sociology, University of Chicago (Herbert Blumer, advisor).

1945

“A Study of Three Psychological Factors Affecting Choice of Mate in a College-Metropolitan Population.” Ph.D. dissertation, Department of Sociology, University of Chicago (Ernest Burgess, advisor).

BOOKS

1949

Alfred Lindesmith and Anselm Strauss (Eds.) Social Psychology. New York: Dryden, (1999, Eighth edition.)

1956

(Ed.) George Herbert Mead on Social Psychology. Chicago: University of Chicago Press, (1964, Second edition, with a new introduction)

1959

Mirrors and Masks: The Search for Identity. Glencoe, IL: Free Press. (1997, Reprinted with a new introduction, Transaction Press.)

1961

Howard Becker, Blanche Geer, Everett Hughes, and Anselm L. Strauss. Boys in White: Student Culture in Medical School. Chicago: University of Chicago Press.

1961

Images of the American City. New York: Free Press..

1964

Lee Rainwater and Anselm L. Strauss. *The Professional Scientist*. Chicago: Aldine.

1964

Anselm Strauss, Leonard Schatzman, Rue Bucher, Danuta Ehrlich, and Melvin Sabshin. *Psychiatric Ideologies and Institutions*. Glencoe, IL: The Free Press. (1981, Reprinted, with new introduction. New Brunswick, NJ: Transaction Books.)

1965

Barney Glaser and Anselm Strauss. *Awareness of Dying*. Chicago: Aldine; London: Weidenfeld and Nicolson.

1967

Barney Glaser and Anselm Strauss. *The Discovery of Grounded Theory*. Chicago: Aldine; London: Weidenfeld and Nicholson.

1968

Barney Glaser and Anselm Strauss. *Time for Dying*. Chicago: Aldine. London: Weidenfeld and Nicholson

1968

(Ed.) *The American City: A Sourcebook of Urban Imagery*. Chicago: Aldine.

1969

Alfred Lindesmith and Anselm L. Strauss (Eds.) *Readings in Social Psychology*. New York: Holt, Rinehart & Winston.

1970

Anselm Strauss and Barney Glaser. *Anguish*. San Francisco: Sociology Press.

1970

(Ed.) *Where Medicine Fails*. New Brunswick, NJ: Transaction Books. (1997 Carolyn Wiener and Anselm L. Strauss (Eds.) Fifth edition.)

1971

Barney Glaser and Anselm Strauss. Status Passage. Chicago: Aldine; London: Weidenfeld and Nicholson.

1971

The Context of Social Mobility. Chicago: Aldine

1971

Professions, Work and Careers. San Francisco: Sociology Press.

1973

Leonard Schatzman and Anselm L. Strauss. Field Research: Strategies for a Natural Sociology. Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall.

1975

Jan Howard and Anselm L. Strauss (Eds.) Humanizing Health Care. New York: Wiley.

1975

Marcella Davis, Marilyn Kramer, and Anselm L. Strauss (Eds.) Nurses in Practice. St. Louis: C.V. Mosby.

1975

Anselm L. Strauss and Barney Glaser (Eds.) Chronic Illness and the Quality of Life. St. Louis: C.V. Mosby. (1984 Anselm L. Strauss, Juliet Corbin, Shizuko Fagerhaugh, Barney Glaser, David Maines, Barbara Suczek, and Carolyn Wiener (Eds.) Second edition.)

1977

Shizuko Fagerhaugh and Anselm L. Strauss. The Politics of Pain Management. Menlo Park, CA: Addison Wesley.

1978

Negotiations: Varieties, Processes, Contexts, and Social Order. San Francisco: Jossey-Bass.

1984

Feldtheorie-Grundzüge der Grounded Theory. Hagen: University of Hagen.

1985

Anselm Strauss, Shizuko Fagerhaugh, Barbara Suczek, and Carolyn Wiener. *The Social Organization of Medical Work*. Chicago : University of Chicago Press. (1997 New edition with a new introduction by Anselm L. Strauss. New Brunswick, NJ : Transaction Publishers.)

1987

Qualitative Analysis for Social Scientists. New York : Cambridge University Press.

1987

Fagerhaugh, Shizuko Y., Anselm Strauss, Barbara Suczek and Carolyn L. Weiner. *Hazards in Health Care: Ensuring Patient Safety*. San Francisco: Jossey-Bass.

1988

Juliet Corbin and Anselm L. Strauss. *Unending Work and Care : Managing Chronic Illness at Home*. San Francisco: Jossey-Bass.

1988

Anselm L. Strauss and Juliet Corbin. *Shaping a New Health Care System: The Explosion of Chronic Illness as a Catalyst for Change*. San Francisco: Jossey-Bass.

1990

Anselm L. Strauss and Juliet Corbin. *Basics of Qualitative Research : Grounded Theory Procedures and Techniques*. Newbury Park, CA : Sage.

1991

Creating Sociological Awareness : Collective Images and Symbolic Representations. New Brunswick, NJ : Transaction Books.

1992

La Trame de la Negociation : Sociologie Qualitative et Interactionnisme. [The Web of Negotiation: Qualitative Sociology and Interactionism.] Edited by Isabelle Baszanger. Paris: L'Harmattan.

1993

Continual Permutations of Action. NY: Aldine de Gruyter.

1997

Anselm L. Strauss and Juliet Corbin (Eds.) Grounded Theory in Practice. Thousand Oaks, CA: Sage.

ARTICLES

1944

"The Literature on Panic." Journal of Abnormal and Social Psychology 39: 317-28.

1945

"The Concept of Attitude in Social Psychology." Journal of Psychology 19: 329-39.

1946

"The Ideal and the Chosen Mate." American Journal of Sociology 52: 204-8

1946

"The Influence of Parent-Images upon Marital Choices." American Sociological Review 11: 554-59.

1947

"Personality Needs and Marital Choice." Social Forces 25: 332-35.

1947

"Research in Collective Behavior: Research and Need." American Sociology Review 12: 352-54.

1950

"A Critique of Culture-Personality Writing." American Sociological Review 15: 587-600 (with Alfred Lindesmith).

1950

"A Study of the Concept of Learning by Scale Analysis." American Sociological Review 15: 587-600 (with Karl Schuessler).

1951

“Socialization, Logical Reasoning and Concept Development in the Child.” *American Sociological Review* 16 : 514 – 23 (with Karl Schuessler).

1951

“The Animism Controversy : Re-examination of Huang-Lee Date.” *Journal of Genetic Psychology* 78 : 105–13.

1952

Alfred Lindesmith and Anselm L. Strauss.

“Comparative Psychology and Social Psychology.” *American Journal of Sociology* 58 : 272–79.

1952

“The Development of Transformation of Monetary Meanings in the Child.” *American Sociological Review* 17 : 275–86.

1953

“Concepts, Communication, and Groups.” pp. 99 – 119 in *Group Relations at the Crossroads*, edited by Muzafer Sherif and M.O. Wilson. New York : Harper.

1954

“The Development of Conceptions of Rules in Children.” *Child Development* 25 : 193–208.

1954

“Strain and Harmony in American–Japanese War Bride Marriages.” *Marriage and Family Living* 16 : 99–106.

1955

“Social Class and Modes of Communication.” *American Journal of Sociology* 60 : 329–38 (with Leonard Schatzman).

1955

“Cross – Class Interviewing : An Analysis of Interaction and Communication Styles.” *Human Organization* 14 : 28–31 (with Leonard Schatzman).

1956

Howard S. Becker and Anselm L. Strauss.
“Careers, Personality, and Adult Socialization.” *American Journal of Sociology* 62: 253-63.

1956

“Patterns of Mobility within Industrial Organizations.” *Journal of Business of the University of Chicago* 29: 101-10 (with Norman H. Martin).

1956

“The Learning of Roles and of Concepts as Twin Processes.” *Journal of Genetic Psychology* 88: 211-17.

1956

Anselm L. Strauss and Norman H. Martin.
“Funktion und Folgen des Versagen für die vertikale Mobilität.”
Kölner Zeitschrift für Soziologie und Sozialpsychologie 8 (4) : 595-607.

1957

Donald Horton and Anselm Strauss.
“Interaction in Audience Participation Shows.” *American Journal of Sociology* 62: 579-587.

1957

“A Sociological Approach to Education Organizations.” *School Review* 65: 330-38.

1958

R. Richard Wohl and Anselm L. Strauss.
“Symbolic Representation and the Urban Milieu.” *American Journal of Sociology* 63: 523-32.

1959

“Patterns of Mobility within Industrial Organizations.” pp. 85-101 in *Industrial Man: Businessmen and Business Organizations*, edited by W. Lloyd Warner and Norman H. Martin. New York: Harper.

1960

"The Changing Imagery of American City and Suburbs." *Sociological Quarterly* 1:15–24.

1961

Rue Bucher and Anselm Strauss.

"Professions in Process." *American Journal of Sociology* 66:325–34.

1961

"Large State Hospitals: Social Values and Societal Resources." *Archives of General Psychiatry* 5:565–77 (with Melvin Sabshin).

1962

"Transformations of Identity." pp. 63–85 in *Human Behavior and Social Processes*, edited by Arnold Rose. Boston: Houghton–Mifflin.

1963

Anselm L. Strauss, Leonard Schatzman, Rue Bucher, Danuta Ehrlich, and Melvin Sabshin.

"The Hospital and Its Negotiated Order." pp. 147–68 in *The Hospital in Modern Society*, edited by Eliot Freidson. New York: The Free Press.

1964

Barney G. Glaser and Anselm L. Strauss.

"Awareness Contexts and Social Interaction." *American Sociological Review* 29:669–79.

1964

"The Social Loss of Dying Patients." *American Journal of Nursing* 64:119–21 (with Barney Glaser).

1964

"Nursing Students, Assignments, and Dying Patients." *Nursing Outlook* 12:24–27 (with Jeanne Quint).

1964

"Nonaccountability of Terminal Care – an Aspect of Hospital Organization." *Hospitals* 38:73–87 (with Jeanne Quint and Barney Glaser).

1965

“Dying on Time.” *Trans-Action* 3 (May/June) : 27-31 (with Barney Glaser.).

1965

Barney G. Glaser and Anselm L. Strauss.

“Discovery of Substantive Theory : A Basic Strategy Underlying Qualitative Research.” *American Behavioral Sciences* 8:5-12.

1965

“Reply to Abrahamson.” *American Sociological Review* 30:779-80 (with Barney Glaser).

1966

Barney G. Glaser and Anselm L. Strauss.

“The Purpose and Credibility of Qualitative Research.” *Nursing Research* 15:56-61.

1966

Schatzman, L. and Strauss, A.

“A Sociology of Psychiatry : A Perspective and Some Organizing Foci.” *Social Problems* 14:3-6.

1966

“Structure and Ideology of the Nursing Profession.” pp. 60-140 in *The Nursing Profession, Five Sociological Essays*, edited by Fred Davis. New York: Wiley.

1967

“Medical Ghettos.” *Trans-Action* 5:7-15, 62.

1967

“A Sociological View of Normality.” *Archives of General Psychiatry* 17 (Sept) : 265-70.

1967

“Strategies for Discovering Urban Theory.” pp. 79-98 in *Urban Research and Policy Planning*, edited by Leo Schnore and Henry Fagin. Beverly Hills: Sage.

1968

"The Intensive Care Unit : Its Characteristics and Social Relationships." *Nursing Clinics of North America* 3:7-15.

1968

"Problems of Death and Dying." *Psychiatric Research Report* 23 : 198-206.

1968

"Some Neglected Properties of Status Passage." pp. 262-71 in *Institutions and the Person: Papers Presented to Everett C. Hughes*, edited by Howard S. Becker, Blanche Geer, David Riesman, and Roberts S. Weiss. Chicago: Aldine.

1969

"Medical Organization, Medical Care and Lower Income Groups." *Social Science and Medicine* 3:143-77

1970

"Discovering New Theory from Previous Theory." pp. 46-53 in *Human Nature and Collective Behavior: Papers in Honor of Herbert Blumer*, edited by Tamotsu Shibutani. Englewood Cliffs, NJ : Prentice-Hall.

1970

Anselm L. Strauss and Barney G. Glaser.

"Patterns of Dying." pp. 129-155 in *The Dying Patient*, edited by Orville Brim, Howard Freeman, Sol Levine, and Norman Scotch. New York: Basic Books.

1973

"Chronic Illness." *Society* 10 (Sept.) : 33-39.

1974

"Pain : An Organizational-Work-Interactional Perspective." *Nursing Outlook* 22:560-566 (with Shizuko Fagerhaugh, and Barney Glaser).

1974

"Research Issues : A Sociologist's Perspective." pp. 277-85 in *Humanizing Health Care*, edited by Jan Howard and Anselm Strauss. New York: Wiley.

1977

“Sociological Theories of Personality.” pp. 207–231 in *Current Personality Theories*, edited by Ralph Corsini. Itasca, IL: Peacock.

1978

Fisher, Berenice and Anselm L. Strauss.

“The Chicago Tradition: Thomas, Park, and Their Successors.” *Symbolic Interaction* 1:5–23.

1978

Fisher, Berenice and Anselm L. Strauss.

“Interactionism.” pp. 457–98 in *A History of Sociological Analysis*, edited by Tom Bottomore and Robert Nisbet. New York: Basic Books.

1978

Anselm L. Strauss and Elihu Gerson.

“Chronic Care.” P. 288 in *Bioethics*, edited by William T. Reich. New York: Free Press.

1978

“A Social World Perspective.” pp. 119–28 in *Studies in Symbolic Interaction*, Volume 1, edited by Norman Denzin. Greenwich, CT: JAI Press.

1979

Fisher, Berenice and Anselm L. Strauss.

“George Herbert Mead and the Chicago Tradition of Sociology.” Parts I and II. *Symbolic Interaction* 2 (1) : 9–26 and 2 (2) : 9–20.

1979

Carolyn Wiener, Shizuko Fagerhaugh, Anselm Strauss and Barbara Suczek.

“Trajectories, Biographies, and the Evolving Medical Scene: Labor and Delivery and the Intensive Care Nursery.” *Sociology of Health and Illness* 1:261–83.

1980

Shizuko Fagerhaugh, Anselm Strauss, Barbara Suczek and Carolyn Wiener.

“The Impact of Technology on Patients, Providers, and Care Patterns.” *Nursing Outlook* 28 : 666–72.

1980

“Chronic Illness (Editorial Comment).” *Social Science and Medicine, Medical Geography* 14D : 351–53.

1980

Anselm Strauss, Shizuko Fagerhaugh, Barbara Suczek, and Carolyn Wiener.

“Gefühlsarbeit : Ein Beitrag zur Arbeits und Berufssoziologie.” *Kölner Zeitschrift für Soziologie und Sozialpsychologie* 32 : 629–51.

1980

Carolyn Wiener, Shizuko Fagerhaugh, Anselm Strauss, and Barbara Suczek.

“Patient Power : Complex Issues Need Complex Answers.” *Social Policy* 11 : 31–38.

1981

Anselm Strauss, Shizuko Fagerhaugh, Barbara Suczek, and Carolyn Wiener.

“Patient’s Work in the Technologized Hospital.” *Nursing Outlook* 29 : 404–412.

1981

Anselm L. Strauss, Shizuko Fagerhaugh, Barbara Suczek, and Carolyn Wiener.

“The Work of Hospitalized Patients.” *Social Science and Medicine* 16 : 977–86.

1981

Carolyn Wiener, Shizuko Fagerhaugh, Anselm Strauss, and Barbara Suczek.

“What Price Chronic Illness?” *Society* 19 : 22–30.

1982

“Social Worlds and Legitimization Processes.” pp. 171–190 in *Studies in Symbolic Interaction* 4, edited by Norman Denzin. Greenwich, CT: JAI Press.

1982

Anselm Strauss, Shizuko Fagerhaugh, Barbara Suczek, and Carolyn Wiener.

“Sentimental Work in the Technologized Hospital.” *Sociology of Health and Illness*. 4:254–78).

1982

“Interorganizational Negotiation.” *Urban Life* 11 (3) : 350–367.

1983

Shizuko Fagerhaugh, Anselm Strauss, Barbara Suczek, and Carolyn Wiener.

“Chronic Illness, Medical Technology, and Clinical Safety in the Hospital.” pp. 237–70 in *Research in the Sociology of Health Care*, Volume 4, edited by Julius K. Roth. Greenwich, CT: JAI Press.

1984

Juliet Corbin and Anselm L. Strauss.

“Collaboration : Couples Working Together to Manage Chronic Illness.” *Image* 16:109–115.

1984

“Social Worlds and Their Segmentation Processes.” pp. 123–39 in *Studies in Symbolic Interaction*, Volume 5, edited by Norman Denzin. Greenwich, CT: JAI Press.

1985

“Work and the Division of Labor.” *Sociological Quarterly* 26:1–19.

1985

Juliet Corbin and Anselm L. Strauss.

“Managing Chronic Illness at Home : Three Lines of Work : ” *Qualitative Sociology* 8 (3) : 224–27.

1985

Juliet Corbin and Anselm L. Strauss.

“Issues Concerning Regimen Management in the Home.” *Aging and Society* 5:249–265.

1986

“Attitudes of Parents Living in Switzerland about Cancer and its Treatment.” *Cancer Nursing* 9:77–85 (with Anne Marie Kesselring, Marilyn Dodd, and Ada Lindsey).

1986

“Three Related Frameworks for Studying Artistic Production” pp. 183–90 in *Sociologie de l’Art*, edited by Raymonde Moulin. Paris: La Documentation Francaise.

1987

Juliet Corbin and Anselm L. Strauss.

“Accompaniment of Chronic Illness : Changes in Body, Self, Biography, and Biographical Time.” pp. 249–81 in *Research in the Sociology of Health Care, Volume 5* edited by Julius K. Roth and Peter Conrad. Greenwich, CT: JAI Press.

1987

“Health Policy and Chronic Illness.” *Society* 25:33–39.

1987

“Illness Trajectories” pp.9–26 in *Folia Sociologica, Volume 13, Approaches to the Study of Face-to-Face Interaction*. Lodz, Poland: Wydawnictwo Uniwersytetu Lodzkiego.

1988

“The Articulation of Project Work : An Organizational Process.” *Sociological Quarterly* 29:163–78.

1988

“Körperliche Störungen und Alltagsleben? oder Körper, Handlung/ Leistung und Alltagsleben?” pp. 93–101 in *Kultur und Alltag*, edited by Hans-Georg Soeffner. Göttingen: Otto Schwartz.

1988

“Teaching Qualitative Research Methods Courses : A Conversation with Anselm Strauss.” *International Journal of Qualitative Studies in Education* 1 :91-100.

1990

Anselm L. Strauss and Alexandre Metreaux.

“Again on Mead and Vygotsky (Reply to Vari-Szilagyi).” *Activity Theory* 5/6 :52-54.

1990

Juliet Corbin and Anselm Strauss.

“Grounded Theory Research : Procedures, Canons, and Evaluative Criteria.” *Qualitative Sociology* 13 (1) : 3-21.

1990

Juliet Corbin and Anselm L. Strauss.

“Grounded Theory Research : Procedures, Canons, and Evaluative Criteria.” *Zeitschrift für Soziologie* 19 (6) : 418-27.

1990

Juliet Corbin and Anselm L. Strauss.

“Making Arrangements : The Key to Home Care.” pp. 59-73 in *The Home Care Experience : Ethnography and Policy*, edited by Jaber Gubrium and Andrea Sanker. Newbury Park, CA : Sage.

1991

Juliet Corbin and Anselm L. Strauss.

“Comeback : The Process of Overcoming Disability,” pp. 136-159 in *Advances in Medical Sociology, Volume 2*, edited by Gary Albrecht and Judith Levy. Greenwich, CT : JAI Press.

1991

“Component Part : AIDS and Health Care Deficiencies.” *Society* 28 (5) : 63-73.

1991

“Blumer on Industrialization and Social Change.” *Contemporary Sociology* 19 :171-172.

1991

“Der Zugriff auf Biographie in der Chicagoer Tradition der Soziologie : Implizite und explizite Aspekte.” [“Implicit and Explicit Aspects of the Chicago Sociological Tradition’s Approach to Biography.”] In *Sensibilität und Realitätsinn: Eine kritische Reanalyse des Forschungsstils der Lebenslaufuntersuchungen der Chicago – Soziologie*, edited by Ralf Bohensack, Gerhard Riemann, Fritz Schutze, and Ansgar Weymann. [See English version of this paper on this website.]

1991

Juliet Corbin and Anselm L. Strauss.

“A Nursing Model for Chronic Illness Management Based upon the Trajectory Framework.” *Scholarly Inquiry for the Nursing Practice* 4 (3) : 155–174.

1991

Juliet Corbin and Anselm L. Strauss.

“A Trajectory Model for Reorganizing the Health Care System.” In *Perspectives in Nursing 1989–1990*, edited by Pamela Maraldo and Patricia Moccia. New York : National League of Nursing.

1991

“Mead’s Multiple Conceptions of Time and Evolution : Their Contexts and Their Consequences for Theory.” *International Sociology* 6: 411–26.

1992

Juliet Corbin and Anselm L. Strauss.

“The Chronic Illness Trajectory Framework : The Corbin and Strauss Nursing Model.” pp. 9–28 in *The Chronic Illness Trajectory Framework : The Corbin and Strauss Nursing Model*, edited by Pierre Woog. New York : Springer.

1992

German translation by Regina Lorenz–Krauss.

“Ein Pflegenmodell zur Bewältigung chronischer Krankheiten.” pp. 1–30 in *Chronisch Kranke pflegen. Das Corbin–Strauss Pflegenmodell*, edited by Pierre Woog. Wiesbaden : Ullstein Medical.

1993

Juliet Corbin and Anselm L. Strauss.

"The Articulation of Work Through Interaction." *The Sociological Quarterly* 34: 71-83.

1994

Anselm L. Strauss and Juliet Corbin.

"Grounded Theory Methodology: An Overview." *Handbook of Qualitative Research*, edited by Norman Denzin and Yvonna Lincoln. Newbury Park, CA: Sage.

1994

"L'Influence reciproque de la routine et de la non routine dans l'action." ["The Interplay of Routine and Non-Routine Action."] pp. 349-366 in *L'Art de la Recherche: Essays en l'honneur de Raymonde Moulin*, edited by P. Menger and J. Passeron. Paris: Culture Francophonie.

1994

"Policy, Social Science and Action." In *The Democratic Imagination: Dialogues on the Work of Irving Louis Horowitz*, edited by Ray C. Rist. New Brunswick, NJ: Transaction Books.

1994

"An interactionist theory of action." pp. 73-94 in *Die Objektivität der Ordnungen und ihre kommunikative Konstruktion: für Thomas Luckmann - 1. Auflage*, edited by Walter M. Sprondel. Frankfurt am Main, Germany: Suhrkamp.

1994

"Chronic Illness, the Health Care System, AIDS and Dying." In *Dying, Death and Bereavement*, edited by Inge Corless, Barbara Germino, and Mary Pittman. Boston: Jones and Bartlett.

1994

"Dear Jean-Daniel." pp. 83-85 in *Variations Autour de la Regulation Sociale: Hommage Jean-Daniel Reynaud*. Paris: Presses de L'Ecole Normale Superieure.

1995

“Notes on the Nature and Development of General Theories.”
Qualitative Inquiry 1 (1) : 7–18.

1995

Barney G. Glaser and Anselm L. Strauss.

“La Production de la Theorie a Partir des Donnees.” Enquete 1 : 183–195.

1996

“A Partial Line of Descent : Blumer and I.” Studies in Symbolic Interaction 20 : 3–22.

1996

“Fred Davis : An Appreciative Analysis.” Studies in Symbolic Interaction 20 : 23–36.

1996

“Everett Hughes : Sociology’s Mission.” Symbolic Interaction 19 (4) : 271–285.

1996

Juliet M. Corbin and Anselm L. Strauss. Analytic Ordering for Theoretical Purposes. Qualitative Inquiry 2 (2), 139–150.

1999

William N. Kaghan, Anselm L. Strauss, Stephen R. Barley, Mary Yoko Brannen, and Robert J. Thomas.

“The Practice and Uses of Field Research in the 21st Century Organization.” Journal of Management Inquiry 8 (1) : 67–81.

1999

Susan Leigh Star and Anselm L. Strauss.

“Layers of Silence, Arenas of Voice : The Ecology of Visible and Invisible Work.” Computer – Supported Cooperative Work : The Journal of Collaborative Computing 8 : 9–30.

Other Contributions

1956

“Introduction,” pp. vii–xxv in George Herbert Mead on Social Psychology, edited by Anselm Strauss. Chicago : University of Chicago Press.

1980

“Foreword,” pp. vii–viii in Irving Louis Horowitz, Genocide and State Power. New Brunswick, NJ : Transaction Books.

1981

“Preface.” pp. ix–x in Carolyn Wiener, The Politics of Alcoholism. New Brunswick, NJ : Transaction Books.

1983

“Foreword.” pp. 9–10 in Invisible Lives : Social Worlds of the Aged by David R. Unruh. Beverly Hills : Sage.

1985

“Research on Chronic Illness and Its Management.” Fifth Helen Nahm Research Lecture, June 7, 1985. Privately issued by the School of Nursing, University of California, San Francisco.

1986

“Introduction.” pp. 21–23 in The Psychiatric Hospital by Henry Lennard and Alexander Galick. New York : Human Sciences Press.
(German edition 1988, pp. xiii–xiv.)

1986

“Foreword.” P. v. in Ilene Lubkin, Chronic Illness : Interventions for Health Professionals. Boston : Jones and Bartlett.

1988

“About This Book” (in English). pp. 7–8 in Nasporingen, edited by H. Coenen, P. Pennartz, and F. Webster. The Hague : CIP -- Gegevans Koninklijke.

1989

“Grounded Theory’s Applicability to Nursing Diagnostic Research.” Monograph on the invitational conference on research methods for validating nursing diagnoses, April 28–30, 1989, Palm Springs, CA. Co-sponsored by the Case Western Reserve University School of Nursing.

1990

"Foreword." Pp. vi–viii in *The Adopted Child* by Christa Hoffman–Riem. New Brunswick, NJ: Transaction Books.

1990

"Preface." Pp. v–vi in special edition on *Qualitative Research on Chronic Illness* edited by Uta Gerhard. *Social Science and Medicine* 30: v–vi.

1991

"Social Worlds and Spatial Processes: An Analytic Perspective." In *A Person – Environment Theory Series. The Center for Environmental Design Research Working Paper Series*, edited by W. Russell Ellis. Berkeley, CA: University of California, Department of Architecture.

1994

"Policy, Social Science and Action." In *The Democratic Imagination: Dialogues on the Work of Irving Louis Horowitz*, edited by Ray C. Rist. New Brunswick, NJ: Transaction Books.

1994

"Forward." *Dying*, edited by B. Clark.

1994

"Chronic Illness, the Health Care System, and AIDS. In I. Corlis, B. Geromino and M. Pitman, eds. *Dying, Death and Bereavement*. Boston: Jones and Bartlett.

1995

"Forward" to a volume on G.H. Mead's writings, edited (Bulgarian) Gallina Tasheva.

1995

"Identity, Biography, History, and Symbolic Representations." *Social Psychology Quarterly* 58 (1) : 4–12.

(付記) 本業績一覧は、<http://dne2.ucsf.edu/public/anselmstrauss/cv.html>のそれを参考にして作成したものである。なお、外国語訳は載せていない。日本語訳については本文参考文献一覧を参照にされたい。また、ストラウスの業績について取り上げた著書、雑誌特集、論文等については本文注(2)で簡単に言及した上で同じく参考文献一覧に挙げておいた。

『文化・階級・卓越化』を読む

—— 社会調査の方法として蘇り、更新されるブルデュー ——

森 田 次 朗
相 澤 真 一

1 はじめに

あなたは『『クラシック音楽が好きな人』ってどんな人』と聞かれた場合、何歳ぐらいの、どのような性別や職業の人の姿をイメージするだろうか。また、「ヘビメタ（ヘビーメタル）が好きな人」や「美術館に頻繁に行く人」、「耳にピアスをあけている人」、「ヨガにはまっている人」の場合だとどうだろうか。

本稿は、こうした様々な「文化」と人々の「社会的背景」（階級・階層をはじめ、性別、年齢、エスニシティ等）の関係について、現代イギリス社会での調査結果をもとに考察した研究であり、筆者たち（森田・相澤）がその翻訳作業¹に関わった『文化・階級・卓越化』（原題：*Culture, Class, Distinction*）の内容を、研究者以外の一般読者や学部生にとって理解しやすくするためのガイドとして執筆するものである。

2009年に執筆された『文化・階級・卓越化』（Bennett et al. 2009=

¹ 本書は5名の研究者による共訳作業の成果であり、青弓社から2017年10月に出版予定である。翻訳メンバーは森田と相澤（中京大学）のほか、磯直樹（日本学術振興会・慶應義塾大学）、香川めい（東京大学）、知念渉（神田外国語大学）である。なお、以下で示す『文化・階級・卓越化』の頁数は、校正原稿上の頁数であり、今後、若干の相違が生じる可能性がある。

2017) は、1979年に公刊され、現在では社会学の「古典」とも言うべきピエール・ブルデューの『ディスタンクシオン』(Bourdieu 1979=1990)の理論と方法を批判的に継承した大著²である。本書は、質問紙調査とインタビューを組み合わせた「混合研究法」を2000年代前半のイギリス社会の分析に応用しており、社会学はもちろん、階層研究や文化研究、メディア研究といった様々な領域の研究者からも、その理論枠組みや方法論の独自性に関心が集っている(森田・相澤 2015; 相澤・森田 2016)。

本稿は、このような『文化・階級・卓越化』(以下、特に断りのない限り「本書」と表記)の概要、とくに本書全体を貫いている社会調査の方法論について解説することにより、社会調査のみならず、広くマーケティングリサーチや統計調査に関心のある一般の方々、さらには社会学以外の人文社会科学を学ぶ大学生にも、本書を手にとってもらうためのガイドとなることを期待して執筆されている。

以下では、『文化・階級・卓越化』を今、なぜ、どのように読むかという本稿の問題意識について、数ある文献のなかでも本書が中心的に依拠しているブルデューの『ディスタンクシオン』が、日本においてどのように受容されてきたかという論点と関連づけながら説明する。

1.1 『ディスタンクシオン』邦訳書の社会的文脈と『文化・階級・卓越化』の方法論的位置

一般的に言って翻訳書は、原書が書かれた時代や社会の状況を踏まえて読まれるべきである。他方で、原書が翻訳される社会の状況にも大きく影響されるため、その「受容」の過程に注目する視点も忘れることはできない。既に筆者の一人である相澤が別稿で詳細に論じているように(Aizawa & Iso 2016)、ブルデューの名著である『ディスタンクシオン』(Bourdieu 1979=1990)が日本社会でいかに受容されたかという経緯は、その訳書が

² 分量は原書(英語)で約330頁、訳書で560頁に及ぶ。

出版された、1980年代後半から1990年代前半にかけての社会状況と関連づけることで説明することができる。

第一に、ブルデューの受容に影響を与えた社会状況としてあげられるべきは、1980年代後半における「バブル経済」³と「フランス現代思想」の流行である。『ディスタンクシオン』が翻訳された当時は、ブルデューだけでなく、思想や哲学の領域において「フランス現代思想」という名の下に、「構造主義」⁴や「ポスト構造主義」の思想が多く日本に紹介されていた。こうした社会状況のもと、ブルデューの研究もまた、他の多くのフランスの思想や哲学の研究とともに、新しいフランス社会学の「理論研究」、具体的には「再生産論」⁵や「階級論」に関する理論書として紹介されることになった。とくに当時の日本の社会学では理論研究や学説史研究が盛んであり、量的研究と質的研究、理論研究の三者を架橋するような領域横断的な問題意識は社会学者の間で希薄であった。そのため、ブルデューの研究は「フランス現代思想」という問題関心のなかで訳され、理論書として理解されることも多かった⁶。

また、同時に見落とすことができないのが、1980年代以降、ブルデュー

³ ここで唐突な質問になるが、本稿の読者である大学生の皆さんは「バブル（経済、崩壊）」という言葉聞いたことがあるだろうか。バブル崩壊時に生まれていなかった読者でも、「バブル芸人」の平野ノラの名前を知っている人は多いのではないか（平野ノラ 2017）。衣装は1980年代のバブル時代に流行していた「肩パッド付きスーツ」、髪型は「ロングソバージュ」、メイクは「直線的な太眉と濃いめの口紅」で、1985年に発売されたポータブルタイプの携帯電話、「ショルダーホン」を掲げて登場する。

⁴ 「構造主義」とは、狭義には「フランスの人類学者レヴィ・ストロースが1950年代に導入して、60年代以降に一つの思潮となった人文・社会科学の方法論および思想的運動」のこと（『哲学・思想事典』）を指し、広義には「構造を要素と要素の間の関係からなる全体と見、事象をその構造の要素間の関係や変換の結果として捉える方法的な視点」のこと（『社会学小事典』）を意味する。

⁵ 「再生産論」を「階層構造の再生産に教育がどのような役割を果たしているかを論じる」理論的立場と位置づけ、その諸類型の特徴と要点を簡潔にまとめた研究としては小内（1995：6）を参照。

による文化と資本に関する分析が、文化現象と社会的不平等の関係をとらえた実証研究というよりは、ジャン・ボードリヤールの『消費社会の神話と構造』(Baudrillard 1970=1979)の場合と同様に、文化現象間の差異自体とその多様性に注目した「消費社会論」や「記号論」の一つとして捉えられたという点である⁷。例えば、ブルデューが『ディスタンクシオン』という書名で示した distinction という概念(英語でも同表記)をとりあげてみよう。本概念は、辞書において「人と違うこと」、「人よりも良いところ」、「人と区分されるもの」と訳出されているように、『ディスタンクシオン』が出版された1990年代前後の日本社会では、人と人の「差異」を端的に表す概念だと理解されることが多かった。とくに、distinction という概念は、「消費社会」や「一億総中流社会」と呼ばれる時代状況のなか、「ファッションブランド」(洋服、バッグ、アクセサリ等)を中心とした狭義の「消費」の場面における人と人との差異や、その「戯れ」を記述するための概念として理解されがちであった。しかし、ブルデューによる本来の用語法としては、ある人の服装や振舞いが他者と「異なっている」(差異化する)という単なる事実関係を意味するだけでなく、『文化・階級・卓越化』のタイトルに「卓越化」という訳語があてられていることから

⁶ こうしたブルデューの受容のされ方は、他の「思想家」たちにも該当する。たとえば、冷戦体制の崩壊時に「ポストマルクス」の思想家として人気のあったルイ・アルチュセール(1918年-1990年)や当時、教育社会学の分野で世界的に重要な位置を占めていたリーディングス『教育と社会変動』で注目を集めたサミュエル・ポールズ(1939年-)とハーバード・ギンティス(1940年-)、あるいは階級と言語の関係に焦点を当てた限定コード/精密コード論で有名なバジル・バーンステイン(1924年-2000年)と共に「再生産」の理論家と見なされることも少なくなかった。

⁷ こうした時代の「空気」を象徴的に捉えた書籍で、社会学者にもしばしば引用されるものとしては『金塊巻』があげられる(渡辺1984; 秋永1992: 146)。

⁸ また、後述するように、ブルデューの理論の代表的な概念である「文化資本」や「ハビトゥス」は、このような文脈で受容された概念の例として挙げられるかもしれない。

わかるように、本来は、その「違い」に対する意味づけや社会的評価（優劣）のあり方を批判的に考察するための概念である⁸。そのため、自己と他者との違いに関する優劣を含意する「卓越化」ではなく、「差異化」という観点から *distinction* という概念が解釈された結果、『ディスタンクシオン』に掲載されている文化現象の多様性（文学、美術・芸術、映画、音楽、スポーツ、政治行動、住居、食事等）⁹と同時に、そうした多様な文化現象がいかに社会的不平等と関連しあうのかという関係論的な視点が、それぞれ看過されることになったと考えられる。

第二に、日本におけるブルデュー受容のされ方に影響を与えたのは、社会調査をめぐる日本のアカデミズムのあり方である。1997年にSSJデータアーカイブが東京大学社会科学研究所に設置され、2000年にJGSS（日本版総合的社会調査）が実施されるようになる。こうした状況を受け、社会学の量的調査データが研究者の間で共有の財産として意識され始め、さまざまな二次分析が試みられるようになるまで、量的研究は日本の社会学のある一分野を成すものでしかなかった。とくに、日本を代表する大規模社会調査として、1955年から10年に一度行われてきた「社会階層と社会移動調査（SSM調査）」ですら、東京大学や大阪大学に代表される特定の大学に所属する研究者を除けば、接点のある人は限られていた。つまり、日本の社会学者の問題関心において、ブルデューの理論研究と量的／質的調査を架橋する研究を受け入れる素地が十分にあったとは言い難い面があった。

このように、ブルデューの研究、とくに『ディスタンクシオン』は、当時の社会あるいはアカデミックな文脈に強く影響を受けて、理論研究あるいは思想研究の一部として限定的に理解され、受容されがちであったと説明できるだろう。

⁹ たとえば、『ディスタンクシオン』の訳書、第一巻巻末（Bourdieu 1979=1990: 481-488）にある「調査票」を参照。

しかし、こうしたブルデュー理解に対して、本稿が何よりも強調したいのは、ブルデューとは社会調査の実践者であり、現在の言葉を用いて言いかえれば『ディスタンクシオン』は量的調査（アンケート調査）と質的調査（インタビュー調査）の両方を用いた「混合研究法」（mixed method）の先駆者だという側面である。『ディスタンクシオン』はその目次を見ればわかるように、社会調査の分析及び考察を行った書籍である¹⁰。『ディスタンクシオン』を社会調査の書として読むためには、「理論書」や「思想書」という限定されたイメージを一旦排するの必要があり、そうした視点こそが『ディスタンクシオン』の「イギリス版」とも言うべき『文化・階級・卓越化』を読むうえでも必要不可欠だと考えられる。

そこで本稿では、以上の問題関心のもと、ブルデューの著作における社会調査の理論や方法のポテンシャルを最大限引き出すために、『文化・階級・卓越化』の主要な方法や分析枠組みを解題することを目的とし、以下論じていくことにする¹¹。

『文化・階級・卓越化』は、ある面で大変読みやすく、ある面で大変読みにくい書籍である。例えば、第4章から第9章では、映画（『マトリックス』）やファッション（ピアスやタトゥー、美容整形）、音楽（クラシック音楽からイギリスのロックバンドのOasisまで）、文学（『ハリーポッター

¹⁰ フランス文学が専門の石井洋二郎氏による『ディスタンクシオン』の翻訳は、きわめて詳細な解説（訳注）とともにフランス社会の質的情報（芸術、食、住居、ファッション、職業等）について流麗に訳された一方で、統計用語などの量的調査上の方法論を実際に活用していく点では、ブルデュー理論の意義を十分に汲み取りきれない部分もあったのではないかと考えられる。

¹¹ もちろん、この『ディスタンクシオン』の翻訳出版から二十数年を経て、翻訳される『文化・階級・卓越化』の原書は英語で書かれており、欧文の文献に精通している研究者、大学院生などの専門家にとってはあえて訳される必要がなかった書籍かもしれない。また、翻訳を担当した筆者たちとしては、訳出の困難さと限界にしばしば直面しており、その点の未熟さを露呈している部分もあろう。それでもあえて、本書をこのようにして紹介するのは、ブルデューから発展する社会調査の方法と可能性が人口に膾炙することを願っているからである。

と秘密の部屋』など)、スポーツ(サッカーからヨガまで)、美術(ルネサンス、バロック、印象派から前衛芸術まで)、食事(健康食材として注目されているキヌア)など無数の「文化」(固有名詞)が登場する。同時に、数多くのインタビューの語り(たとえば、世帯インタビューでは30世帯、40名が回答)が引用されているため、社会学の理論や統計用語に関する専門的知識がない者でも、興味に応じて途中から読むことができるだろう。

その一方で、本書の「はじめに」あるいは第1章から通読しようとする
と挫折してしまう難所が複数みられる。例えば、第1章と第2章では、先行研究からの知見を豊富に引用することで、本書の方法論上の独自性について詳細に検討されており、続く第3章では、日本では比較的なじみの薄い「多重対応分析」の手法と、それをういて作成されたイギリス社会における「文化マップ」(様々な文化の活動や好みの配置図)が提示されている。とりわけ、第2章の「社会的なものの関係論的組織化」(relational organization of the social)という考え方は、日本の社会調査の授業や教科書で取り上げられるオーソドックスな説明とは異なっているため、初学者には混乱を招く恐れがある。

そこで、本稿はこのような魅力と難解さを併せもつ『文化・階級・卓越化』の要点、とくにその全体を貫く社会調査の方法論を解説することにより、本書を手にとる機会を広げていくためのガイドとして活用されることを期待して執筆されている。そのため、以下の説明では、社会学理論としてはかなり入門的な説明を多数含んでおり、読者の理解を助けるために議論を単純化した箇所があることをあらかじめ断っておく¹²。

¹² 社会学理論の専門家にとっては、眉をひそめたくなるほどの単純化も含まれているかもしれない。その点をご寛恕の上、読まれたい。

1.2 『文化・階級・卓越化』の著者と構成

『文化・階級・卓越化』の解説に入る前に、本書の著者と構成について概説しておきたい。『文化・階級・卓越化』は、ラウトレッジ社より2009年に出版された著作（共著）であり、著者たちはイギリスを中心に活躍する6名の研究者（トニー・ベネット、マイク・サヴィジ、エリザベス・シルヴァ、アラン・ワード、モDEST・ガヨ・＝カル、デイヴィッド・ライト）である。彼・彼女らはCRESC(Centre for Research on Socio-Cultural Change)という研究グループを主導しており、その中でも代表的な役割を担っているのが、ベネットとサヴィジの2名である（CRESC 2017）。本書の著者や概要については、すでに別稿で論じているため（森田・相澤 2015）、ここでは最低限度の説明にとどめておく。

ベネットは現在ウェスタンシドニー大学の教授とメルボルン大学人文学部プロフェッショナル・フェローを兼務している研究者であり、文化研究と文化社会学が専門である。ベネットの研究についてはすでに邦訳が出ており、単著としては『フォルマリズムとマルクシズム』（未来社）が、共編書としては『新キーワード辞典』（ミネルヴァ書房）が出版されている。これに対して、サヴィジはロンドン・スクール・オブ・エコノミクス（LSE）の社会学部教授と国際不平等研究センターの共同所長を兼任している研究者であり、19世紀から20世紀にかけての階級の歴史や政治、都市に関する研究で有名である。とくに、近年の彼の関心は社会学的な階級分析にあり、2011年以降は、BBCと共同で実施した英国階級調査(GBCS)の成果を分析し、注目を集めている（Savage 2015）。

次に、『文化・階級・卓越化』の主な特徴を述べると、本書はブルデューの『ディスタンクシオン』の問題設定、理論、及び方法をそれぞれ批判的に継承し、イギリス社会の分析に応用している点にある。後述するように、本書はブルデューと同様、「関係論的視点」を採用しており、計量分析では「多重対応分析」(Multiple Correspondence Analysis、本書内ではしばしばMCAと表記)を用いている。

しかし、本書と『ディスタンクシオン』とはいくつかの点で大きく異なっている。詳細は、訳者による本書巻末の「解説」（磯・相澤）にゆずるとして、社会調査法という観点からブルデュー研究に注目するという本稿の問題関心上、両者の違いとして以下の3点を指摘したい。

第一の相違点は、イギリス社会における2000年代以降の動向、つまり新自由主義的な思潮の拡大と移民人口の増加というマクロな社会変動の影響を、研究上の出発点としている点である（研究背景の側面）。とくに、本書では『ディスタンクシオン』が「『自律的』で『抽象的』な文化という近代主義の考え方」に依拠しているという問題関心のもと、こうした「近代主義」と呼ぶべき考え方が、「商業化された消費主義的な新自由主義の時代」においては「時代遅れ」になっていると評価されている（本書48頁）。第二の相違点は、ジェンダー（ゲイ／レズビアンを含む）やエスニシティ（インド系、パキスタン系、アフロ・カリブ系）といった『ディスタンクシオン』ではほとんど扱われていない「社会的マイノリティ」を研究の射程に入れている点である。その結果、『ディスタンクシオン』と、本書の調査票の内容は大幅に異なっている（研究対象／方法の側面）。第三の相違点は、文化に関する好みや行動の多様性、すなわち「文化的オムニボア」（雑食性）をめぐる議論を踏まえ、「文化資本」に代表される主要な概念を再定義している点である（理論枠組みの側面）。とくに、イギリスにおける文化現象の対立を、大学教授や大企業の管理職といった「上流階級」（高級文化）と、事務労働者や小学校教員、単純労働者といった「中間階級／庶民階級」（大衆文化）の対立ではなく、「文化的に活発であり幅広い活動に関与しているようにみえる人々」と「狭い範囲の文化的活動や関心しかもたない相対的に無関心な人々」の対立として説明している点である（本書90頁）。

このように独創的な視点にたつ本書の目次は、以下の通りである。本書は、目次と序論、結論、方法論補遺を除くと大きく4つのパートから構成されている。

目次

序論

第1部 分析の位置付け

第1章 『ディスタンクシオン』以後の文化

第2章 文化資本の調査に向けて

——理論と方法に関するいくつかの問い

第2部 嗜好・実践・個人のマッピング

第3章 イギリスの文化的趣味と関与のマッピング

第4章 文化マップのなかの諸個人

第3部 文化界と文化資本の構成

第5章 音楽界の緊張関係

第6章 人気と稀有と——読むことの界に関する探究

第7章 視覚芸術の社会的キャンパス

第8章 卓越化の対照的なダイナミクス——メディア領域

第9章 文化資本と身体

第4部 卓越化の社会的次元

第10章 中産階級の文化形成

第11章 文化と労働者階級

第12章 ジェンダーと文化資本

第13章 ネイション、エスニシティ、グローバル化

結論

方法論補遺

以上のような『文化・階級・卓越化』の内容について、以下ではおもに理論的枠組みを説明した第1部の議論から1章（本稿2節）と2章（同3節）を取り上げるとともに、方法論について説明した第2部から3章と4章（同4節）を中心に取りあげ解題していく。第1部と第2部に限定して議論を進める理由は、これら4章における社会調査や分析の考え方がわか

れば、具体例の多い他章については個人の興味関心に応じて読み進めることが容易だと考えられるからである。

2 ブルデューの『ディスタンクシオン』の問題設定とその批判的継承

本節では、『文化・階級・卓越化』の「1章『ディスタンクシオン』以降の文化」の論点をまとめる。

2.1 「ブルデュー」とは誰か——『ディスタンクシオン』の問題設定

最初に、ピエール・ブルデュー（Pierre Bourdieu、1930年–2002年）の経歴について述べる¹³。ブルデューはフランスを代表する社会学者の一人であり、その著作の多くが日本語で翻訳されている。

訳書のうち代表的なものとしては、初期のアルジェリア社会におけるフィールドワークの成果である『資本主義のハビトゥス——アルジェリアの矛盾』（Bourdieu 1977=1993）があげられる。また、美術や文芸などの具体的な分析を行った著作としては『美術愛好』（Bourdieu et Alain 1966=1994）や『芸術の規則』（Bourdieu 1992=1995, 1996）がある。これら実際の社会現象を中心的に分析した研究に対して、彼独自の理論を体系的にまとめた著作としては『実践感覚』（Bourdieu 1980=1988, 1990）があげられるものの、アメリカで活動する社会学者ロイック・ヴァカントとの知的対話を交えた『リフレクシヴ・ソシオロジーへの招待』（Bourdieu & Wacquant 1992=2007）がブルデュー理論の入門書としてはお薦めである。

また、上述の『リフレクシヴ・ソシオロジーへの招待』以外にも、他の

¹³ ブルデューの経歴についてはGrenfell(2012)を、『ディスタンクシオン』の概要については、『社会学文献事典』より『ディスタンクシオン』の項目（石井洋二郎氏による訳者要約）を参照した。下記の各文献の書誌情報は、本稿文末の「文献」を参照。

研究者との共著も多く、フランスの社会学者であるジャン＝クロード・パスロンとの『遺産相続者たち——学生と文化』(Bourdieu et Passeron 1964=1997) や、『再生産——教育・社会・文化』(Bourdieu et Passeron 1970=1991) は、一見「公平」とされる学校教育が、いかに社会の不平等の形成に寄与しているかについて実証的に分析したものである。これらの多くの著作のなかでも本書がとくにその知見を継承しているのが、『ディスタンクシオン——社会的判断力批判』である。

では、その『ディスタンクシオン』とはどんな研究か。『文化・階級・卓越化』の内容に即して説明する¹⁴。まず、『ディスタンクシオン』の意義を筆者なりに大雑把にまとめるならば、それは「文化」というものが、社会的な条件のもとで形成されていること、とくに「文化的な価値観(嗜好)が社会的に構築されたもの」だということを経験的なデータにより明らかにしている点にあると考える。すなわち、本書においても以下のように書かれている点が重要である(本書 28 頁)。

文化的諸形態とは優れていて偉大なものであり、さらには普遍的で時代を超えて存在するものだという主張を額面どおりに受け取ってはならず、こうした主張は、文化的諸形態を高く評価する者たちが、それら諸形態に対してどのような社会的な価値を付与していて、そうして付与された価値がどれだけ必要とされているかということに、どれほど密接に結び付いているのかを提示するためにこそ分析されるべきものなのだ。

『ディスタンクシオン』では、「趣味判断」という一見したところきわ

¹⁴ 本稿は学部生をはじめとする一般の読者を対象としているため、ブルデューの学説史に関心のある読者は本書に直接あたることをお薦めする。本書の第1章では、フランスにおける論争、イギリスにおける社会階層論、アメリカにおける文化社会学、文化研究及びメディア研究という4つの観点から整理がなされている。

めて個人の自由や判断に依拠していると考えられる価値の領域において、いかに既存の階級構造（訳書でいうところの上流階級／中間階級／庶民階級）と社会的不平等が関係しているかを調査のデータにもとづき明らかにしている。『ディスタクシオン』は、序文、第Ⅰ部（第1章）、第Ⅱ部（2章から4章）、第Ⅲ部（第5章から第8章）、及び結論と追記からなる。

そのなかでも『文化・階級・卓越化』を読む上で重要なのは、「第Ⅱ部 慣習行動のエコノミー」において提示される「社会空間」の構図である。ここでは、社会を一種の座標平面にとらえ、「経済資本」と「文化資本」（後述）という二つの概念の多少を数値化し、縦軸に「資本総量」（上に行くほど2種類の資本の合計が大きい）、横軸に「資本構造」（右にいくほど「経済資本」が優位、左にいくほど「文化資本」が優位）をとることで、さまざまな職業カテゴリーがどのように位置づけられるかを分析している。たとえば、大企業の経営者は資本総量が大きく、経済資本が優位を占めるため、空間の上方右寄りに位置するのに対して、小学校教員は資本総量が中位で文化資本が優位であるため、社会空間の中ほど左寄りに位置する。

本書の第1章では、こうした『ディスタクシオン』の問題設定と調査法を叩き台としながら、以下のような3つの問い（「公理」）が提示される。第一の問いは、「現代のイギリスに文化資本を見いだすことが可能か、もしそうである場合、それはどのような形態をとるかを判断すること」である（本書32頁）。第二の問いは、「音楽、読書、芸術、テレビ、映画鑑賞、スポーツなどの様々な文化の界が似たような原理によって構造化されているのではないか、さらにもしそうであるとすれば、そのような類似性の本質とは何か、ということ」である（本書33頁）。第三の問いは、「地位を確立した中産階級諸集団が文化形態の組織化によって優位になる過程をどの程度までとられることができるか、また、同様の過程がもろもろのジェンダーとエスニック集団の関係の秩序化と再生産においてもみられるか、ということ」である（本書34頁）。

2.2 ブルデューのキーワード解説——文化資本／界／ハビトゥス

『文化・階級・卓越化』の要点を理解するにあたり重要なのは、「文化資本」、「界」、「ハビトゥス」という三つのキーワードである。この三つのキーワードは、先の段落で確認した本書の三つの「問い」と密接に関連している。そのため、ここでは、これらキーワードの辞書的な意味を確認しながら、本書が何を明らかにしたいかという問いの内容について具体的に解説していく。

第一のキーワードは、「文化資本」(cultural capital)である。この文化資本という用語は、K・マルクス以来の系譜を組む貨幣的価値を持った経済的な資本、とくに『資本論』及び『経済学・哲学草稿』での議論をもとに考案された概念である。すなわち、ある人物が社会的な「位置」を占める際（例えば入学する、就職するなど）に、その人自身、あるいはその人の行為の価値は「経済資本」（貨幣量）の多少によって測定されうる。ブルデューは、このような「経済資本」の概念から着想を得つつ、経済資本とは別次元の構成要素や力学を持つ資本として「文化資本」を提示している。本書での説明を借りれば、文化資本とは「どちらかと言えば、資産のようなはたらきをする」ものであり、「文化資本をもつ者は、それを持たない者からの支出を得る」というわけである（以上、本書30頁）。つまり重要なのは、1)「文化」もまた「貨幣」と同様に数量化できること、2)文化を「元手」（資本）とすることで、別の文化資本や経済資本に転換できるということである。

ただし、文化資本の概念について注意が必要なのは、本概念が上流階級や中間階級（中産階級）といった階級上位層と密接に関連づけられて定義されている点である。たとえば、ブルデューは文化資本とは何かについて、以下のような意味合いをもつ「美的性向」(aesthetic disposition)と関連づけながら説明している(Bourdieu 1979:57 (1984: 55) =1990: 85)。

日常の差し迫った必要を和らげ、実践的な目的を括弧に入れる一般

化された能力、あるいは実践的な機能をもたない実践に向かう持続的な傾向と適性のこと。これらは差し迫った必要から解放された世界での経験のなかでしか、また、それ自体が目的であるような諸活動、例えば学校での練習問題や芸術作品の鑑賞といった実践なくしては構成されえないものである（本書 31 頁）。

このように、文化資本とは、ブルデューが「必要性の文化」と呼ぶ労働者階級に特徴的な文化とは対照的であり、それが「身体化され、教養がある中産階級は身体と知の両面で社会化されて、『正統』文化を享受できる」と説明されている。（本書 30 頁）。例えば、文化的に「優れており」、「望ましい」ものとして評価される能力（例えば、ピアノを弾けたり、上手に絵が描けたりすること）を身につけている者は、その活動をすることによって金銭的に収入を得たり、社会的に評価されたりすることがある。一方で、ピアノ講師や画家が必ずしも高所得者でないことを考えてみれば、この文化資本が経済資本と関連しながらも、別の次元で存在していることが理解しやすくなるのではなかろうか。もちろん、このような特定の階級と関連づけられている文化資本は、すべての社会に自明のものとして存在している訳ではない。だからこそ、先述の第一の問い（「現代のイギリスに文化資本を見いだすことが可能か、もしそうである場合、それはどのような形態をとるかを判断すること」）で確認したように、本書における問題関心は、文化資本がブルデューの観察した 1960 年代のフランス社会と同様の形態でイギリス社会においても観察することができるのか、という問いからスタートしているわけである。

第二のキーワードは、「界」である。「界」という単語は、フランス語では Champ、英語では、field であるため、「場」とも訳されることも多い。この概念は、本書の第二の問い（「音楽、読書、芸術、テレビ、映画鑑賞、スポーツなどの様々な文化の界が似たような原理によって構造化されているのではないか、さらにもしそうであるとすれば、そのような類似性の本

質とは何か、ということ)」の中心となっている。

先ほどのピアノや絵画の例からも想像できるように、私たちの身の回りに目を向けてみると、ピアノが弾けることや絵画をうまく描けることが肯定的に評価される「界」と、さほど評価されない「界」があること、あるいは、こうした能力に対して独特の評価を行う「界」があることがすぐわかるだろう。例えば、合唱コンクールを恒例行事として毎年、大々的に実施している中学校のクラスのほうが、そうでない中学校のクラスよりも、ピアノの演奏をできることは相対的に高く評価されるだろう。また、音楽大学や芸術大学の学生たちのようなピアノや絵画を専門的に勉強している人達の間では、その優劣がよりシビアに評価されることになる。したがって、このようなそれぞれの文化資本を持った人が位置する空間、すなわち、「界」とそこにおいて評価される行為や価値観の全体像をそれぞれ示してみると、各界の間に共通点が発見できるのではないか、というのが第二の問いの骨子である。このように、文化資本が意味を持つためには、ある一定の「界」の存在が前提となっているという点がポイントである。

第三のキーワードは、「ハビトゥス」である。ハビトゥスは、フランス語で *habitus* と綴るように、英語の *habit* とも通じる単語である。*habit* という単語が、例えば、『ランダムハウス英和大辞典』によると、「癖」、「習慣」、「習わし」、「性癖」、「傾向」といった意味が掲載されていることからわかるように、人は一見、個々に個別的で独立したように見えても、ある種の社会的な環境に影響されながら行動している。例えば、お辞儀をしようとする日本の慣習に親しんだ人々が、初対面でもまず握手をしたり、親しい場合には、挨拶の一貫として同性同士でハグやキスをしあったりする人々を見ると、驚くことが多いであろう。ブルデューの『ディスタンクシオン』では、その書籍名が「*distinction*」（卓越化、区別すること）とされていることに象徴されるように、同じ言語や文化を共有する社会（『ディスタンクシオン』ではフランス社会、『文化・階級・卓越化』ではイギリス社会）であっても、異なったハビトゥスを持った人々（集団）が観察される

ことに注目がなされている。

ただし、こうしたハビトゥスの概念をどう応用するかについては、ブルデューの『ディスタンクシオン』と『文化・階級・卓越化』ではいくつかの点で異なっている。ブルデューは、『ディスタンクシオン』において「ハビトゥス」を定義しており、『文化・階級・卓越化』においても引用されている箇所から説明してみよう（Bourdieu 1979: 193（1984: 173）= 1990: 265）。

ハビトゥスの総合的な統一性、あらゆる実践を統一し生成する原理のうちに体系的な統一性が存在するからこそ、家屋、家具、絵画、書籍、自動車、アルコール、タバコ、香水、衣服といった個人や集団を取り巻くすべての特性——そして物——のうちに、また、スポーツ、ゲーム、エンターテインメントといった彼らが自らの卓越性を顕示しようとする実践のうちに体系的な統一性が見いだされるのである（本書 60-61 頁）。

すなわち、この引用部においてブルデューは、「ハビトゥス」には体系的な統一性があることを強調している。同時に見落とすことができないのが、その統一性が特定の階級と結びついているとされている点である。たとえば、本書では、下記のような『ディスタンクシオン』からの引用がある（Bourdieu 1979: 59（1984: 56）= 1990: 88）。

それ（ハビトゥス：筆者注）は存在条件のある特定の階級＝集合に結び付いた条件づけから生まれるものであり、同じような条件に生まれた人々すべてを結び付けると同時に、これらの人々を他のすべての人々から区別する。それも彼らの最も本質的なやり方で区別するのである。というのも嗜好というのは、人間であれ物であれ、存在するものが有するすべての基盤であり、また、人が他人にとってどういう存

在か、そして人は何によって自らを分類し何によって分類されるのか、といったすべてのことの基盤だからだ(本書 60 頁、以下ブルデューの原書から引用された訳文は、『文化・階級・卓越化』の記者による)。

このようにハビトゥスとは、「ある特定の階級＝集合に結び付いた条件づけから生まれるもの」であり、ブルデュー自身の別の言葉を借りれば「構造化する構造」であると同時に、「構造化された構造」(Bourdieu 1979: 191 (1984: 170) = 1990: 263) として定義されている。その一方で、グローバル化の中で従来の社会階級がより不可視になり、エスニシティやジェンダーによる区分が流動化している、2000 年代イギリス社会を調査対象とした『文化・階級・卓越化』では、このハビトゥス自体がそれぞれの階級と統一性を持ってア priori に定義すること、すなわち、調査前から所与として捉えることが難しくなっている。そのため、「どのような社会集団がどのようなハビトゥスを持っているか」という問いのみならず、「どういうハビトゥスをもった人々がどういう社会集団を構成しているのか」というように、発想を逆転することが喫緊の課題となった。

こうした状況を受けて本書では、第三の問い(「地位を確立した中産階級諸集団が文化形態の組織化によって優位になる過程をどの程度まで捉えることができるか、また、同様の過程がもろもろのジェンダーとエスニック集団の関係の秩序化と再生産においてもみられるか)のように、地位の確立した階級集団と組織化された文化形態の関係が、どこまでそもそも観察されうるのか、また、それがジェンダーやエスニシティの観点からどう捉えなおせるのかが本書全体を貫く問いとして掲げられている。

3 ブルデューによる社会調査法の刷新と『文化・階級・卓越化』における改良点

第 2 節までに紹介した『文化・階級・卓越化』の第 1 章の問いを要約すると、文化資本／界／ハビトゥスといった概念を用いて、2000 年代のイ

ギリシア社会における「文化と階級」の問題を読み解くことができるのか、ということに尽きる。では、これらの概念は実際に、どのようにすれば、社会調査の手段として活用していくことができるのだろうか。この点が書かれているのが、『文化・階級・卓越化』の「2章 文化資本の調査に向けて——理論と方法に関するいくつかの問い」である。本節では、通常社会調査の方法とは異なる「関係論的組織化」の考え方と、『文化・階級・卓越化』で『ディスタンクシオン』の反省を踏まえた調査法、とりわけサンプリングにおける改良点について紹介する。

3.1 社会調査における因果関係の捉え方とその転換——「関係論的組織化」をめぐる

「関係論的組織化」(relational organization) という考え方を取り上げるにあたり、まず強調しておきたいのは、ブルデューの『ディスタンクシオン』、および本書で採用されている社会調査の考え方が、いわゆる日本の社会調査の入門授業で紹介される関係性の捉え方とは異なる点である。ここを踏まえることが、本書とブルデューの『ディスタンクシオン』を「社会調査の書」として読み解く際の重要なポイントとなる。

例えば、現在でもしばしば社会調査の教科書として用いられる高根正昭の『創造の方法学』では、「アメリカの社会科学が共通に持っている、問題解決のための論理」として、「『原因』と『結果』とを明瞭に定めて、問題の論理を組み立てる方法」を詳細に説明している（高根 1979: 35）。つまり、ここで強調されているのは、社会学においては「原因」と「結果」からなる関係、すなわち因果関係がその方法論上の大前提だという考え方である。高根はさらに因果関係に基づく「『説明』の方が、『記述』よりは一段と高度な研究で、およそ社会学者たるもの『説明』を行うよう、努力しなければならない」（高根 1979: 39）という考え方を、カリフォルニア大学バークレー校の社会学部の学風と合わせながら説明している。

このように通常社会科学の入門授業では、社会科学における調査で目

指すべきは、単なる単純集計ではなく、原因を示す独立変数と結果を示す従属変数（結果変数）の間に結びついた因果関係の説明であり、このような関係性を持って社会を捉えようとするということが社会調査の理解の基礎だとされているのだ。だが、ブルデューの『ディスタンクシオン』とその応用としての本書の調査法を考えた際、この発想を一旦、脇に置いて別の発想に注目する必要がある。ブルデューは、「従属変数と独立変数もしくは原因変数を区別して『社会的なもの』を定義するのではなく、平面上に配置された実践の關係に焦点を当てることで『社会的なもの』を捉えよう」とする姿勢を持っていた（本書70頁）。この考え方は、『ディスタンクシオン』（Bourdieu 1979: 114-115（1984: 103）=1990: 162）にも次のように示されている。

ある従属変数（例えば政治上の意見）と性別、年齢、宗教、さらに教育水準、収入、職業などのいわゆる独立変数との個別的な關係は、こうした個々の相関關係のうちにするされた様々な効果もつ独自の力と形の、真の原理を構成する諸關係の完全な体系を隠蔽してしまう傾向がある。だから「独立」変数のうちでも最も独立性の強いものは、その変数がある意見なり行動との間に取り結んでいるなかにひそむ統計的諸關係の網を、すっかり隠蔽してしまうだろう（本書71頁）。

すなわち、ブルデューは、原因を自明視する従来の社会学のモデリングではなく、諸關係が網の目のように構成されているその網全体を捉えることを企図したのである。本書では、シカゴ大学の社会学者、アンドリュー・アボットが指摘したように、「ごちゃごちゃした複雑な世の中では、「従属」変数と「原因」変数を区別すること」の困難さも紹介されている。ここから本書では、英語圏で行われてきた『ディスタンクシオン』に関する研究とは異なり、ブルデューが用いていた「多重対応分析に立ち戻ること」が提唱されている（本書71頁）。「多重対応分析」を導入することの利点は、

続く第4節での議論を先取りするならば、従来の社会科学的な社会調査における因果関係を捉える方法としての社会調査ではなく、社会の関係性全体を描き出そうとするところにあり、ここに『文化・階級・卓越化』と『ディスタクシオン』の社会調査の方法論上のきわめて大きな特徴がある。そして、このように特定の変数間の因果関係を明らかにする方法ではなく、複数の変数間の関係性全体を捉える手法こそが、本書の第2章で説明されている「社会的なものの関係論的組織化」（本書71頁）という視点である。

以上の議論に関連して『文化・階級・卓越化』では、ブルデューの『ディスタクシオン』以降に登場した「文化的雑食性」（オムニボア）に関する議論が取り入れられ、方法論上の差異化が図られている。ブルデューは、文化と階級の関係性について、文化資本の豊かな人々（上流階級）は「高級文化」を好む一方で、文化資本の少ない人々（労働者階級）は「大衆文化」を好むという形で捉えていた。例えば、『ディスタクシオン』の例では、知識人階層がバッハの「平均律クラヴィーア曲集」を好むのに対して、大衆が毎年ウィーンフィルのニューイヤーコンサートのアンコールでもよく演奏され、広く知られているシュトラウスの「美しき青きドナウ」を好むといったようである¹⁵。

これに対して、「文化的雑食性」（cultural omnivore）の議論を展開したりチャード・ピーターソンは、学歴の高い人やコミュニティにおいてつながりのある人ほど、文化的に雑食（オムニボア）であり、「高級文化」と「大衆文化」の双方を好む一方で、そうでない人たちは「大衆文化」しか好まない（ユニボア）という議論を、主にアメリカでの調査結果にもとづきながら展開している（Peterson 1992; Peterson and Kern 1996 など）。こうしたアメリカ社会でのブルデュー理論の読解と応用は、アメリカ流の「計量社会学」の流れによる応用でもあった。すなわち、先述の「社

¹⁵ なお、『文化・階級・卓越化』のなかでは、ブルデューのこの議論について、いずれの例にせよ、クラシック音楽しか質問されていないことが批判されており（本書148頁）、他ジャンルの音楽を含んだ調査が行われている。

会的なもの「関係論的組織化」という捉え方よりは、アメリカの計量社会学による因果関係モデルの分析の流れを汲む回帰分析がここでは用いられている。

くり返しになるが、本書はこのような単純な因果関係を用いた回帰分析にすぐに進むのではなく、まず文化の好みの関係性をマップ（「文化マップ」）として分類し、図示することによって、文化への好みや参加と、その背景にある階層構造を多面的に捉えている¹⁶。もちろん、『文化・階級・卓越化』の議論では回帰分析を全否定している訳ではなく、いくつかの章では、その分析を出発点として回帰分析が用いられており、その結果、地位構造に関する新たな知見も示されている。

3.2 『ディスタンクシオン』の手法をイギリス社会に応用した際の改良点

『文化・階級・卓越化』で行われた調査では、『ディスタンクシオン』をイギリスに応用するため、おもに質問紙調査とインタビュー調査の手法において、さまざまな改良が加えられている。具体的には、1) フォーカス・グループインタビュー、2) エスニック・ブースト・サンプル、3) 世帯インタビュー、4) エリートインタビューが導入されている。これらの方法は、先に示した三つの問いのうちの第三の問い、「地位を確立した中産階級諸集団が文化形態の組織化によって優位になる過程をどの程度まで捉えることができるか」という点と、「同様の過程がもろもろのジェンダーとエスニック集団の関係の秩序化と再生産においてもみられるか」（本書 34 頁）という問いを明らかにするためである。以下では改良された調査法の具体的な内容について、順に見ていこう。

第一に、第三の問いの後半部で言及されているジェンダーとエスニック

¹⁶ 紙幅の関係上、本稿では割愛したものの、『文化・階級・卓越化』にはこうした文化と社会集団（職業、性別、年齢、学歴等）の関係性を示した図（たとえば、図 3-1 から 3-8）が複数掲載されているので参照されたい。

集団に関する調査法から確認すると、本書の調査では、全国規模の無作為サンプルの1,564名に加えて、イギリスの「三大エスニック・マイノリティ集団」であるインド系、パキスタン系、アフロ・カリブ系が均等に含まれたエスニック・ブースト・サンプルの227名の合計1,791名が対象になっている。この質問紙設計に関しては、イギリスの国立社会調査センターの協力を得ており、2004年から2005年の冬から早春にかけての実査はこのセンターが担当した。このように本書の調査は、最新のサンプリングテクニックを用いているという点で、おもに1960年代中頃に実施されたブルデューの調査とは対照的である。

第二に、実際に質問紙を作成したり調査を実施したりする前に、大規模なフォーカス・グループインタビューが実施されている点も、上記の目的を達成する上で特筆すべきである。これは、人口構成が異なる層の文化実践とその様式の両方を詳しく調査することを目的とするものであり（本書、方法論補遺1参照）、職業階級やジェンダー、エスニシティ、年齢、セクシュアリティなどの異なる社会的地位の組み合わせに配慮してフォーカス・グループの対象者が集められている。

第三に、質問紙調査だけの知見からでは、文化に関する嗜好や実践の実態を精確に明らかにすることができないというブルデューの哲学を継承し、本書においても質問紙調査を実施した後、大規模な「世帯インタビュー調査」が実施されている。この世帯インタビューは質問紙調査のサンプルに加え、該当する場合はそのパートナーを対象としている（本書、方法論補遺3参照）。

第四に、経済的・政治的、または文化的に卓越した地位にある個人は無作為サンプルの対象になることが限られるという点を克服するため、ブルデューの例にならい、成功したビジネスマンやビジネスウーマン、政治家、

¹⁷ このように文化的に恵まれた地位の人を、意図的に多くサンプリングすることにより、より明瞭に関係性を提示する試みは日本でもしばしば行われている（例えば小針 2004）。

上級公務員と学者を対象にした「エリートインタビュー」も実施されている¹⁷（本書、方法論補遺4参照）。

4 『文化・階級・卓越化』における方法論——「混合研究法」の可能性

以上、第2節と第3節では、本書の理論上の分析枠組みについて概観した。こうした議論をうけ本節では、実際にどのような調査手法を選択すべきかについて、本書の「3章 イギリスの文化的趣味と関与のマッピング」と、「4章 文化マップのなかの諸個人」の内容に即して整理する。

訳者解説でも触れられているように、本書の方法論上の大きな特徴は「量的調査」と「質的調査」を組み合わせた「混合研究法」が採用されていることにある。こうした手法が採用されている理由は、ブルデューの研究姿勢、すなわち、量的調査によって社会構造の全体像が把握しようとしてきた一方で、質問紙調査の結果だけでは実践の実相を明らかにすることはできない、という哲学が受け継がれているからである。混合研究法では、「量的調査を先に行うべきか、質的調査を先に行うべきか」という方法論上の問題（メリット／デメリット）が指摘されており、この点をめぐってさまざまな議論が蓄積されてきた（抱井・成田編 2016）。

こうした方法論上の論争があるなか、『文化・階級・卓越化』では、基本的には量的調査を先に行い、具体的な実践の内容についてインタビューを行うという手順が取られている。その理由は、前節で紹介したように、量的調査によって因果モデルを構築することに一旦脇に置き、文化と階級の関係の関係論的組織化にまず関心が向けられているからである。では、このような考え方を操作化し実際に運用していく場合、どのような混合研究法が採用されるのだろうか。以下では詳細を見てみよう。

4.1 量的調査に関する方法論——「多重対応分析」とは何か

本書が社会のなかの関係を「関係論的組織化」の観点から分析するにあ

たり、最も重要な分析手法となっているのが、「多重対応分析」（Multiple Correspondence Analysis）である。近年、多重対応分析を単に入門レベルで導入するのではなく、実際に社会調査データの分析法として使用する上で参考となる文献が複数出版されている（例えば Clausen 1998=2015；君山 2011 など）。しかし、回帰モデルを中心とした分析に比べると、多重対応分析の知名度はまだまだ低いと言わざるをえない¹⁸。

ここで、あらためて「多重対応分析法」とは、いったいどんな調査手法と言えるだろうか。きわめて単純化して説明すれば、それはクロス表によって分類された値を単純なデータ行列に変換することにより、空間的（視覚的）に表現する方法である。この空間的表現では、近似しているものは近くに、似ていないものは離れて示される（Clausen 1998=2015：4）。このため、因果関係を前提とすることなく、社会のなかの連関の遠近関係を図示することができ、先述の「関係論的組織化」を実現するための手法として適している。

具体的に本書の表現を借りて説明すると、「このアプローチ（多重対応分析：筆者注）の魅力は、その帰納的な特徴によって主要な関係性がどのようなものなのかを前もって判断することなく、データから明らかになるパターンを解釈したり報告したりできることにある」（本書 91 頁）とされている。言いかえれば、「従来社会学で用いられてきた多変量解析の手法の主要な関心は、ある結果に対して『原因になる』いくつかの変数もつインパクトの大きさを測定すること」であるのに対して、多重対応分析における関心は、「嗜好の社会的規定要因に関する想定を暗に持ち込むことなく、文化的・生活自体の様々な側面の組織化や互いの関係性だけに基づいて構築される」（本書 91 頁）という点にある。

ところで本書では、多重対応分析を使用する際に「文化」なるものが、

¹⁸ ブルデューの議論をもとに、日本社会のデータについて多重対応分析を使用した先駆的な研究としては近藤（2011）を参照。

「関与」（行動の側面：する／しない。する場合はその頻度で数値化）と「嗜好」（好みの側面：好き／嫌いで数値化）という2つのカテゴリーと7つの界に体系的に整理されている。この7つの界とは、「音楽」、「読むこと」、「視覚芸術」、「テレビ」、「映画」、「スポーツ」、「外食」（食事）である。こうした分類を前提に多重対応分析が実施された結果、以下のような4つの「軸」が抽出されることになった。それら4軸とは、①頻繁に関与しているか／あまり関与していないか（関与／非関与）、②最近の流行のものか／古くから地位の確立したものか（現代的・商業的／地位が確立した）、③外向的か／内向的か、④関わりが熱心か／穏当かである。

こうした分析結果について特筆すべきは、上述した4つの軸のうち回答上の分散に関する説明力が最も高い第1軸（右側：関与が高い、左側：関与が低い）と、その次に高い第2軸（上方：現代的、下方：古典的）を交差して作成された図（本書図3-1）の結果、および、その図上に職業階級を追加して配置させた図（本書図3-9）の結果である。両者の図を重ね合わせてみると、「専門職＝幹部階級」と「中間階級」、「労働者階級」という三つの階級に属する諸個人の位置を比較した場合、第2軸上の分布についてはそれほど大きな差異（同心円上のずれ）がみられない一方で、第1軸上では大きな違いがみてとれる。すなわち、先に「文化的オムニボア」を論じた際に指摘したように、イギリス社会のなかで見出される社会的な分断線は、ブルデューが指摘するような「上流階級」（高尚な文化）と「庶民階級」（大衆文化）の間に存在するのではなく、代わって「文化的に活発であり幅広い活動に関与しているようにみえる人々」（たとえば専門職＝幹部階級）と「狭い範囲の文化的活動や関心しかもたない相対的に無関心な人々」（労働者階級）の間にみられる、ということが示されている（本書90頁、及び図3-1と図3-9を比較参照）。

こうした議論をふまえて本書の知見を整理すれば、多重対応分析を通じて得られた最大の発見とは、『ディスタンクション』において自明とされてきた、特定の文化と階級を一对一に対応づける単線的な解釈図式のあり

方が再考されるとともに、「中産階級」に対して「中間階級」概念が提示されたり、階級上位層を表す概念として「専門職＝幹部階級」（professional executive class）が提案されたりしているように、従来の階級観が再定義されている点だと考えられる。

4.2 質的調査を導入する意義——量的調査との「相補性」

4.2.1 質的調査導入の利点

以上の特徴をもつ多重対応分析から得られた結果は、質的調査（インタビュー調査）の結果と関連づけられ検証されることになる。くり返すと、このように「量的調査」と「質的調査」を相互補的に活用する手法のことを、社会科学の領域では「混合研究法」（mixed method）と呼ぶが（抱井・成田編 2016）、通常とは異なり、こうした複雑な手法が採用される理由とは何だろうか。

本書では、混合研究法としてのアプローチには三つの重要な利点があるとされている（本書 115-116 頁）。第一の利点は、質問紙調査と質的インタビューで同じ個人についてデータを比較することで得られるものである。すなわち、質問紙調査の回答者がインタビューをされた際に、質問紙調査で回答していた知見をどれだけ変更し、修正しているかを評価することができる。その結果として、「質問紙調査の測定結果には誤差がある」という一般論にとどまる認識を乗り越え、そのような「誤差」の社会文化的な意味を同定することができるようになる。

第二に、質的インタビューを併用することにより、多重対応分析で得られた結果の意味を精確に評価することができる。たとえば、複数の個人がライフスタイルの空間上で似たような場所に位置づけられているにもかかわらず、その発言が根本的に異なっていると。その場合、当初実施された文化の活動や嗜好に関するマッピング（文化マップ）の信頼性自体が失われることになる。したがって、マップ上、互いに近い位置にいる者同士の発言を吟味することで、抽出された異なる個人間の相違点と類似点を

きちんと評価することができる。

第三に、質的インタビューから得られる情報のおかげで、軸それ自体の意味をより精確に解釈することができる。

このように、本書では「われわれのアプローチが意味するのは、量的なデータと質的なデータとはその体系からして相補的なもの」(本書 115 頁) だという問題関心のもと、対応分析という調査手法の独自性、すなわち図示された社会空間上に個人を配置させることができるという特徴が活用される形で、混合研究法が採用され実施されている。

4.2.2 質的調査の導入例——対照的な 2 名のインタビュー事例から

しかし、一般的にはこうした利点が認められる対応分析ではあるが、実際に本書の文脈においてはどのような成果が得られているのだろうか。

4.1 でみたように、多重対応分析の結果、とくに第 1 軸 (右側: 関与が高い、左側: 関与が低い) と第 2 軸 (上方: 現代的、下方: 古典的) の結果だけを見た場合、第 1 軸の左側に位置する人たちは、「まったく社会的な活動を実施していない状態」、すなわち「社会的に排除」(本書 116 頁) された状態であるように見える。しかし、こうした認識は果たして正しいのだろうか。このような問題関心のもと、本書の第 4 章では第 1 軸の左側に観察される「文化的な活動を頻繁に実施しない人たち」を対象にインタビューを実施することで、質問紙調査のなかでは明らかにならなかった事実について光が当てられている。

第一に、第 1 軸の最も左側にいる個人に対するインタビュー調査の結果 (本書 117-120 頁) を取りあげてみよう。「障害者介護施設」で働くマーガレット・ステイブルズは、「誕生日や特別な用事」で出かける場合をのぞけば、これまで文化施設と呼べる場所にはほとんど出かけたことがない。また、年に 5 冊しか本を読まず、モダンジャズを除きほとんど音楽は聞かない。加えて、彼女は芸術については視覚芸術に関してはほとんど知識がなく、映画についてもイングマール・ベイルマンやペドロ・アルモドバルと

いった映画監督の名前を知らない。

しかし、彼女に対するインタビューの結果からは、質問紙調査では集められなかったような活動として、「家庭」（家事・育児）と「近所づきあい」を中心とした「余暇活動」の実態が明らかになった。たとえば、彼女は、インタビュー中に息子であるピリーの名前を出しながら、自らの子育てに関する忙しさについて下記のように、実に雄弁に語っている。

いえいえ、私は家にいる必要があるんです。わかってもらえと思いますが…。ピリーは病気で学校をずっと休んでいたせいで、今日、四冊の本を宿題で持って帰ってきたんです。それを明日までに全部やらないといけないんです。つまりまあ、いやってうほどやらないといけないことがあるわけで。ピリーと私でやるのに、二時間半はかかるでしょうね。きっちりやるには（……）（本書119頁）。

このように、子育てに忙しいマーガレットにとっては、こうした日常的な忙しさが解放されるための時間として、「余暇活動」が重要な意味をもつことになる。彼女にとっての余暇とは「自宅を中心としたもの」である。より具体的には、「日曜日になると決まって家族で散歩に出かけ、教会に通って」おり、友人たちと「家族ぐるみ」で交際していて、主に「自宅」で楽しんでいる。ここからわかるのは、子育てと余暇活動に関する「無数とも言うべき社会関係」（本書119頁）によって時間をとられているがゆえに、文化的な活動が実施できないということである。

第二に、マーガレットの事例と対照的に、第1軸の最も右側、すなわち文化的活動に積極的に関与しているマリア・デレックの事例（本書121-123頁）をとりあげてみよう。質問紙調査に対する彼女の回答からは、彼女がテレビをまったく見ないものの、スピルバーグやヒッチコックの監督映画は見たりしていることが明らかになっていた。また、「読書好き」という彼女が昨年読んだ冊数は500冊であり、その範囲は推理小説から

SF、伝記、自己啓発本や宗教書にまで及んでいる。さらに、彼女はジャズ、ロック、クラシック、そしてヘビメタルの熱狂的なファンであるとともに、彼女は視覚芸術にも熱心でファン・ゴッホとパブロ・ピカソが好きである。このように、「ポピュラー・カルチャー」から「ハイ・カルチャー」にまでわたるマリアの雑食で貧欲な嗜好がはっきりと裏づけられる。

しかし、マーガレットに対するインタビュー調査から明らかになったのは、彼女は「筋痛性脳脊髄炎」という重い障害があり、日常的には車いすがないと移動できないという状況であった。そのため、彼女は人と会ったり、レジャー施設に出かけたりする機会はほとんどないにもかかわらず、他方で「インターネット」を介して実に生き生きと、様々な文化的な活動にはまり込んでいた。

マリア：パソコンこそがすべてで、パソコン上で生きているのです。

インタビュアー：そのことについて、どう思いますか？

マリア：私はインターネットをするのが好きです。パソコンでゲームをするのが好きなんです。

インタビュアー：どんな種類のサイトを見たり、どんなゲームをしたりしていますか？

マリア：私は女性特有の問題のせいで、支援団体にずっと頼り続けてきました。でも、まあ、ブロード・バンドにしてからは、パソコンを一台、つけっぱなしにしたままにしています。うちには二台パソコンがあるんですが、私のものとフルーツバットのなんです。裏でちょうど鼻歌が聞こえるでしょ……。あれはフルーツバットの鼻歌です。で、彼はパソコン・マニアなんです……。私たちはいつもパソコンを一台、つけっぱなしにしていて、もし何かをしたり、何か会話のなかで生じたとするでしょ。「あれ、その答えは何かしら。あれ、私は何を知りたかったんだっただけ。あるいは、もしかしたらこ

うかもしれないといったことを、私たちはインターネットで検索するんです。だから、インターネットというのは驚くほどたくさんのに使える、参照ツールなんです。オンライン上のゲームについても同じことで、それを使って、フルーツバットと私は出会ったわけで……（本書 122 頁）。

このように、第 1 軸の左側に観察される「文化的な活動を頻繁に実施しない人たち」に対してインタビューを実施することで、彼・彼女たちが質問紙調査のなかには含まれていなかった活動や社会的ネットワークに関与していることが明らかになり、その結果、第 1 軸に関する理解を「精緻化」することができる（本書 116 頁）。以上のような検証作業の結果、第 4 章では多重対応分析（量的調査）とインタビュー結果（質的調査）を相補的に組み合わせることで、文化と社会的不平等というブルデューにより問題提起された研究テーマを多角的に検証することができる、と結論づけられている。

5 結語——『文化・階級・卓越化』の検証と応用に向けて

以上、本稿では、ピエール・ブルデューの研究蓄積を現代イギリスで応用した文化と社会的不平等の関係性に関する重要文献であり、筆者たち（森田・相澤）がその翻訳作業に関わった、『文化・階級・卓越化』の内容について解題を行ってきた。その際、本書の内容が研究者に限らず、それ以外の一般読者や学部生にとっても理解しやすくなるように、本書の理論と方法に関わる第 1 部と第 2 部に焦点を当てて解説した。

その要点をまとめると、1) 文化（嗜好と実践）と社会的不平等の関係性を「関係論的組織化」（relational organization）という独自の観点から分析している点（理論上の独自性）、2) そうした関係論的視点のもと、「量的調査法」の一つで、特定の因果関係を前提とせずに変数間の関係性の全体をマッピングできる「多重対応分析」（Multiple Correspondence

Analysis)と、「質的インタビュー」(フォーカス・グループインタビュー、世帯インタビュー、エリートインタビュー)を総合的に関連づけた「混合研究法」を実施している点(方法論上の独自性)、という2点に整理されるだろう。

ただし、上記以外にも『文化・階級・卓越化』についてはブルデューの社会調査法のポテンシャルを正確に理解し、応用していくためのアイデアが数多く説明されている。たとえば、紙幅の関係上、本稿ではふれることができなかった論点としては、ジェンダー(第12章)やエスニシティ(第13章)といったブルデューの研究では軽視されがちであった視点の重要性や、「中産階級」概念の再定義(10章)というテーマ設定の可能性があげられる。このように、今回扱えなかった論点については、別稿にて議論することにした。

最後にブルデューによる社会調査の方法を日本で応用していく際の叩き台としては、きわめて実験的な試みではあるが、すでにパイロット調査が実施されているため(相澤・森田 2016)、今後は本書の知見を日本社会に応用した社会学的研究が蓄積されていくことが期待される。たとえば、一例として相澤・森田が東海圏の大学生を対象に実施した調査票には、Twitter、Facebook、Instagramの3種類の利用実態を尋ねた質問があり、この質問を使えば、「誰がTwitterを使うのか」といったテーマで卒業論文を作成することが可能である。本稿の知見をとおして、われわれの身の回りにある「文化」と「社会的背景」(社会的不平等)の関係性を「調査」したいと思う読者が、少しでも増えれば望外の喜びである。

[文献]

Aizawa, Shinichi, and Iso, Naoki, 2016 "The Principle of Differentiation in Japanese Society and International Knowledge Transfer between Bourdieu and Japan", Derek Robbins (ed.) *The Anthem Companion to Pierre Bourdieu*, London: Anthem Press, 179-200.

- 相澤真一・森田次朗, 2016, 「社会調査データによる日本の社会的分断線の構成要素に関する探索的検討——東海圏の大学生調査の基礎集計から」『中京大学現代社会学部紀要』10（1）：169-188.
- 秋永雄一, 1992, 「階級と文化」, 柴野昌山・竹内洋・菊池城司編『教育社会学』有斐閣 143-163.
- Baudrillard, Jean, 1970, *La société de consommation : ses mythes, ses structures*, Paris : Gallimard. (=1979, 今村仁司・塚原史訳『消費社会の神話と構造』紀伊国屋書店.)
- Bennett, Tonny, et al., 2009, *Culture, Class, Distinction*, London : Routledge. (=2017, 磯直樹・香川めい・森田次朗・知念渉・相澤真一訳『文化・階級・卓越化』青弓社.)
- Bourdieu et J.-C. Passeron, 1964, *Les héritiers*, Paris : Éditions de Minuit. (=1997, 石井洋二郎監訳『遺産相続者たち——学生と文化』藤原書店.
- , Pierre et Darbel, Alain 1966, *L'Amour de l'art : les musées et leur public*, Paris : Éditions de Minuit. (=1994, 山下雅之訳『美術愛好——ヨーロッパの美術館と観衆』木鐸社.
- et J.-C. Passeron, 1970, *La reproduction, Paris : Éditions de Minuit*. (=1991, 宮島喬訳『再生産——教育・社会・文化』藤原書店.
- , 1977 *Algérie 60 : Structures économiques et structures temporelles*, Paris : Éditions de Minuit. (=1993, 原山哲訳『資本主義のハビトゥス——アルジェリアの矛盾』, 藤原書店.)
- , 1979, *La distinction, Critique sociale du jugement*, Paris : Éditions de Minuit. (=1984, Tralated by Richard Nice, *Distinction : A Social Critique of the Judgement of Tasete*, London : Routledge. (=1990, 石井洋二郎訳『ディスタクシオン I・II——社会的判断力批判』藤原書店.)
- 1980. *Le sens pratique*, Paris : Éditions de Minuit. (=1988-1990, 今村仁司他訳『実践感覚』(一・二巻)みすず書房.)
- , 1992, *Les règles de l'art*, Paris : Éditions du Seuil. (=1995-1995, 石

井洋二郎訳『芸術の規則Ⅰ』『芸術の規則Ⅱ』, 藤原書店.)

——— & Loïc J. D. Wacquant. 1992, *An Invitation to Reflexive Sociology*, Chicago: University of Chicago Press. (=2007, 水島和則訳『リフレクシヴ・ソシオロジーへの招待——ブルデュー、社会学を語る』藤原書店.)

Centre for Research on Socio-Cultural Change, 2017, "About us", (<http://www.cresc.ac.uk/about-the-centre/>, 2017年8月29日取得.)

Clausen, Sten Erik, 1998, *Applied Correspondence Analysis: An Introduction*, SAGE. (=2015, 藤本一男訳『対応分析入門——原理から応用まで』オーム社.)

Grenfell, Michael ed., 2012, *Pierre Bourdieu: Key Concepts 2nd edition*, Durham: Acumen.

平野ノラ, 2017, 「平野ノラオフィシャルブログ「平野ノラのOKパブリー! ブログ」Powered by Ameba」(<https://ameblo.jp/hiranonora/>, 2017年8月30日アクセス)

抱井尚子・成田慶一編, 2016, 『混合研究法への誘い——質的・量的研究を統合する新しい実践研究アプローチ』(日本混合研究法学会監修) 遠見書房.

君山佳良, 2011, 『第2版 コレスポネンシ分析の利用法——一般対応分析モデル』データ分析研究所.

小針誠, 2004, 「階層問題としての小学校受験志向——家族の経済的・人口的・文化的背景に注目して」『教育学研究』71 (4) : 422-434.

近藤博之, 2011, 「社会空間の構造と相同性仮説——日本のデータによるブルデュー理論の検証」『理論と方法』26 (1) : 161-177.

森田次朗・相澤真一, 2015, 「P・ブルデューにおける社会調査法の応用可能性——『文化・階級・卓越化』の翻訳作業をとおして」『中京大学現代社会学部紀要』9 (2), 161-188.

Peterson, Richard, 1992, "Understanding Audience Segmentation: From Elite and Mass Omnivore and Univore.", *Poetics*, 21 (4) : 243-258.

——— and R. M. Kern. 1996. "Changing Highbrow Taste: From Snob to Omnivore.", *American Sociological Review*, 61 : 900-7.

Savage, Mike, 2015, *Social Class in the 21st Century*, London: Penguin Books.

高根正昭, 1979, 『創造の方法学』講談社.

渡辺和博, 1984, 『金魂巻——現代人気職業三十一の金持ビンボー人の表層と力と構造』主婦の友社.

[付記]

本稿は、2016年度中京大学特定研究助成「現代日本社会における差異化原理を解明するための社会調査モジュールの開発と応用」(研究代表者：森田次朗、研究連携者：相澤真一)の成果の一部である。本稿の執筆は、相澤が全体の構想と草稿を作成し、その後、森田による全体にわたる大幅な加筆を経た後、双方で内容を確認した。なお、本論文の執筆に当たっては、高田佳輔氏と堀兼大朗氏(ともに中京大学)、越田有咲氏(名古屋大学大学院生)、由井智也氏(中京大学現代社会学部学生)のご協力を賜った。記して感謝の意を申し上げたい。最後に、本稿に関する文責は筆者たち(森田・相澤)にある。

執筆者紹介（執筆順）

松田茂樹	中京大学現代社会学部教授
芦川晋	中京大学現代社会学部准教授
森田次朗	中京大学現代社会学部講師
相澤真一	中京大学現代社会学部准教授

◆編集後記

今号は論文の数こそ多くはなかったものの、学部教員の最新の研究成果が集結した内容に仕上がりました。2016年度に学部創立30周年を迎えた本学部では、今年度、通例の第1号と第2号に加えて、特別号の発刊を企画しています。そうした実り多き今年度の学部紀要第1号を、無事に発刊できたことを、まずは素直に喜びたいと思います。

現代社会学部紀要編集委員

岡部真由美・辻井正次

中京大学現代社会学部紀要 第11巻 第1号
(旧) 社会学部紀要通巻第60号

発行日 2017年9月25日(2017年度)

発行所 中京大学現代社会学部
〒470-0393 豊田市貝津町床立101

発行者 村上隆
編集者 現代社会学部紀要編集委員会
印刷所 常川印刷株式会社
名古屋市中区千代田2-18-17

CHUKYO UNIVERSITY
FACULTY OF CONTEMPORARY
SOCIOLOGY BULLETIN

Volume XI, Number 1

2 0 1 7

C O N T E N T S

<Articles>

Low Fertility in Asia

- Theoretical Frame and Hypothesis of Background Factors of Current Situation -
..... Shigeki Matsuda (1)

How Symbolic Interactionism Treats Problems of Identity:

In case of Anselms L. Strauss from "Mirrors and Masks" to The Theory of Awareness
..... Shin Ashikawa (29)

Bibliography: Anselm Leonard Strauss (1916-1996) (81)

Reading Culture, Class, Distinction

— Bourdieu Revisited as Social Research Methods —

..... Jiro Morita (103)
Shinichi Aizawa

CHUKYO UNIVERSITY
FACULTY OF CONTEMPORARY
SOCIOLOGY BULLETIN
Editorial Committee